

新刻普濟禪師語錄跋

通幻門下、人人龍象、蹴躡簡簡、鸞鳳翱翔、雖然非隱南山、霧避北海、濱擬欲人讓一著、不受他
 黔削者、奈昭昭冥冥、室邇人遐、其故何、居由翰天、霹靂瀾翻、提唱罕聞、於澆運季世也、就中普
 濟禪師、潦倒多舌、著爾許口業、今日寒落冷裔、以鳳毛麟角、待師亦宜也、然而此錄、論諸湖海
 幾百歲矣、縱撈撻觀之者、視為故事、縱擯撥揚之者、卻犯忌諱、奚由若此、總之、輓近宗屬、競古
 輕於鉏蘭、玩今嗜于逐臭、若輩不受其咎、誰受其咎、茲有一同志、告余曰、洞上宗猷、天童一變
 流桑域者、率以崢絕斗峭、寄之葛藤、至於其言、朴略不詭、僻不奇崛、而不味宗旨、不失機杼、示
 正明不露之妙趣、則不可無此錄矣、有一本、淹委匣底者、今發諸梓、大行于世、不特舒禪師大
 寂場一顧、猶且提醒邇來、么麼昏瞶乎、余聆其言、嘆云、天日未墜、法社于城、豈憂無托哉、于焉
 反復原本、渙散無紀、首次不分、以謂別有全稿、故不欲擅抹一字、填一字、歷索在東、關北、越者
 十數本、校訂一帙、稍得清楚、析為三卷、遂付剞劂、嗟嗟、方今叢林凋起、不榮不茂、如照此錄者、
 為甘露時雨、化其拳曲、沾其枯朽、則直饒斷取一瓣於香積國、為師祝、恩大猶未足酬矣、諒
 哉、以師之拈提、見于世、言道德、迥雙當初一門、伯仲不敢過擡焉、余道師前、豈無師、師後豈有
 師、斯言使人短氣、亦使人作氣、統題于後。
 昔元祿八乙亥歲臘八
 前興聖嗣祖信椽峰書于楞伽林中

國譯月坡禪師語錄

解題

禪師諱は道印、月坡は其の號なり。江州大津の人、本姓は源、佐々木氏の一族なり。八歳にして儒
 壽印禪師に謁して難髮し、尋いで竹龍遊公に依つて業を受く。後、諸方を行脚し、黄檗に到つて、
 隱元琦公、木庵瑠公、即非一公等に謁す。又蔭涼寺鐵心に投じて曹洞の禪に歸し、寛文四年以降、長
 く近江比良山獅子谷に庵居して、磨甄作鏡大いに力む。其の間、山居三十律、十絶句等の作あり。近
 江の有志、逢坂山の蟬丸の舊址に庵を建て、師を請するや、辭する能はずして亦茲に留る。斯くて道
 價大いに世に顯れ、中頃請せられて黄龍、岱宗等の衆を薰陶し、後、特に加州天徳院住持の請を受
 けて遂に入院す。

本録二卷は主として天徳住山以後の行實遺硯にして、侍者元曠・元機等の編録する所なり。就中第
 一卷は、天徳晋山の香語態容より、上堂、茶話、佛事等の接衆引導、及び詩偈、願文、啓、書、志等を録
 し、第二卷には永平高祖元禪師より、其の師愚穩和尚に至る迄の歴代諸師二十四人の史傳概要を載す。
 而して巻頭附するに、天徳住山の節に於ける請啓及び復啓を以てし、巻尾加ふるに編者自ら撰する所

の禪師行實、及び禪師と親交ありし東阜心越の送る所の詩偈を以てし、以て一部の體裁を成す。而して本書は天和二年の上梓に係り、水戸府書林奥田十郎兵衛之を刻すと云ふ。猶ほ禪師の傳記は卷末に附する禪師の行實に詳かなれば今茲に録せず。

請 啓

伏して以れば、^①沒底の淨瓶、躍倒場に逢ふて快活。^②越格の機、瀉山幾頭の猿猴を叱殺す。^③爛柄の鋤斧、運用年を積んで煨煉。住山の風、青原一角の麒麟を追倒す。久しく化を分つて方に遊ぶの正風規を仰ぎ、偶々^④手を撒して家に到るの好消息を見る。恭しく惟れば、曹洞の正宗三十七世、上月下坡印公大禪師は、無所住を以て所住と爲し、無所爲を以て所爲と作す。折拄杖子、世を閱すると風の空を渡るに似、破蒲團邊、縁に緇ふこと月の水に印するが如し。面目を未生の前に了じ、禪燈を既滅の後に挑ぐ。人間蝶のごとくに遊んで、世夢の昨夢に齊しきを悟り、根塵蟬のごとくに脱し

①請啓。啓は「まなす」と訓す、請啓は住持を請待する意を文

書にて陳述せしもの。之は加賀天徳院より師を請する文。

②沒底云々。沒は絶なり、無なり。淨瓶は淨水を貯ふる瓶にして、僧の常に携帶して手清むるに用ふる器。傳燈錄瀉山章に「百丈云く、若し能く衆に對して一語を下し得て出格ならば、常に住持すべし」と。

即ち淨瓶を指し問うて曰く、喚んで淨瓶となすを得ず、喚んで什麼とか作さん。華林云く、喚んで木俵と作すべからず。百丈肯はず、乃ち師（靈祐）に問ふ。師、淨瓶を踢倒す。百丈云く、第一座、由子に輪却せらる。遂に師を遣は

して瀉山に往かしむ」と。

③越格の機。越格は格外と同じく尋常を超越せること、機は物に應じて發動すべき能力をいふ。

④爛柄の鋤斧。爛は「たる」と訓じ、腐敗潰滅の意。鋤斧は斧のこと。これ蒯樸などを截斷する器なれば、古の宗師其の弟子に住山を許す時の信表となせしことあり。景德傳燈錄青原章に「師、石頭をして書を持つて、南嶽神和尚に與へしめて曰く、書を遺しれば速かに回れ、吾れに此の鋤斧子あり、汝に與へて住山せしめん。……石頭乃ち禮拜して南嶽に住す」と。

て、^①我空及び^②法空を樂む。嶺を出づること
 は^③覺一宿の如く太だ實頭、道を訪ふことは^④
 存九至と同じく尤も徹困。徳、王侯の撰を感じ
 て、聲價千鈞、辯、魔外の權を降して、言論百
 當。東のかた、知音を求めて横に鐵笛を吹き去
 り、北のかた、終老を懷ふて暮に草蓑を擔ふて
 歸る。某等只だ願はくは、寶車速かに迎へて、
 山門觀を改め、紀綱恢に張つて、^⑤叢林古に
 歸らんことを。金龍山靈ならずと雖も、此れ我
 が合城第一の法窟、天徳院、誰か領することを
 争はん。幸に師、歴世無比の道風、境勝れ人奇
 なり、力牛競ふて相挽く。天荒地老ゆ、法王
 起つことの何ぞ遅き。啓に臨み戰慄して、未だ
 瞻依を盡さず。

復啓

伏して以れば、秋風葉を拂ふて清冷、梧桐枝
 上、此れ鳳凰に非ずんば奚ぞ棲むこと得ん。春
 雨香を蒸して^①深沈、^②梅檀林中、唯だ獅子の
 み有つて當に住すべし。恭しく惟れば、
 金龍山天徳禪院は、幽都の名藍、^③朔方の靈趾、
 氣、^④五嶽を壓して、雄風方萬里に振ひ、威、三
 越に布いて、^⑤禪派幾千流を疏ぐ。役局皆^⑥
 龍子象孫、^⑦操白典襲、宛も諸禪師安上座の大
 瀉に在るが如く、擁護悉く王臣宰官、挿草布金、
 天帝釋須達多の鷲嶺に於けるに下らず。不肖、
 蒲團上、坐して七箇を破るに堪へたり。家風正に好し、
 字を留めず、日用只だ石を負うて碓を舂くに慣る。
 往年久しく^⑧五斗の官に飽く、獨り甘じて^⑨元亮
 を學ぶに心有り。今日漫りに^⑩千鍾の爵に任ず、自ら愧づ、
 董賢を笑ふに口無きことを。苟も諸方の

なす」と訓む、兩手を開いて
 何物も取らざるをいふ。
 ① 禪師。禪門善徳の稱號なり。
 ② 我空。衆生悉く心身あれども
 是れ五蘊の假に和合せるもの
 にて、常に一の我體なきをい
 ふ。生空、人空等ともいふ。
 ③ 法空。諸法の空無なる眞理な
 り、二乘の人未だ法空の理に
 達せず、五蘊の法實なりと解
 して一切の所知障を免れず、
 佛之がために五蘊の自性皆空
 を説く。
 ④ 覺一宿。永嘉玄覺、曹溪山六
 祖大鑑に參じ、一宿してのち
 法を嗣ぐ、故に世人、一宿覺
 といふ。
 ⑤ 存九至。雪峰義存禪師、曾て
 三たび投子山に登り、九たび
 洞山に至りて參究辨道せり。
 ⑥ 叢林。和合衆の安居同學する
 處に名く、師ち大樹の叢生し
 て林となるが如く、僧侶の衆
 合せる意なり。
 ⑦ 瞻依。瞻仰歸依の略、仰ぎし
 たしむこと。
 ⑧ 深沈。深くしておちつけるこ
 と。
 ⑨ 梅檀林。梅檀は梵語、支那、
 雲南、瓜哇、暹羅等に産する
 香木の名。證道歌に「梅檀林
 中に雜樹無く、鬱密深沈とし
 て獅子のみ住す」とあり。
 ⑩ 朔方。北の方。
 ⑪ 五嶽。支那の泰山(東嶽)、衡
 山(南嶽)、華山(西嶽)、恒山
 (北嶽)、嵩山(中央)。
 ⑫ 役局。役寮といふに同じ。
 ⑬ 龍子象孫。龍は鱗族の王、象
 は獸類の長、此は役局を敬ひ
 ていふなり。
 ⑭ 操白典襲。「白を操り襲を典
 襲」と讀み、典座寮の所掌に屬
 す。
 ⑮ 新婦作説。洪州江西の馬祖大
 寂禪師、南岳に參侍し、密に

心印を受く。蓋し同參を抜い
 て傳心法院に住す、當に坐禪
 す。讓之れ法器なりと知つて
 師の處に往き問うて云く、大
 德坐禪して此の何を圓る。
 師云く、作佛を圓る。讓即ち
 一瓢を取つて師の座前の石上
 に於て磨す。師遂に問ふ、什
 麼をり作す。讓云く、磨して
 鏡と作さん。師云く、瓢を磨
 して豈に鏡と作すことを得ん
 や。讓云く、坐禪豈に作佛を
 得んや云々。
 ① 五斗の官。縣令の俸給のこと
 にして、僅かの俸給の意。陶
 淵明の話による。
 ② 元亮。陶淵明の字。晉書陶潛

傳に「我れ豈に五斗米の爲に
 腰を折りて、鄉里の小兒に向
 はんや云々」と。之を斥す。
 ③ 千鍾の爵。鍾は量の名、六斗
 四升、或は八斗、又は十斗、
 千鍾は量の多きをいふ。
 ④ 新婦。柔弱なる禪風をい
 ふ。
 ⑤ 老婆の責。婆子一庵主を供
 養す、常に二八の女子をして
 給仕せしむ、一日女をして抱
 定せしめて云く、正與麼の時
 如何。主云く、枯木寒巖に倚
 る、三冬暖氣なし。女子歸つ
 て婆子に舉示す、婆云く、我
 れ二十年たゞ箇の俗漢を供養
 し得たり」と。遂に庵を燒く。

新婦禪に參するを嫌ふて、又千載に老婆の責を免れんことを欲す。素より紙衲の錦衣に勝ることを知る、何ぞ手を撒して家に到るの道を失はん。幸に鋤斧の心印を作ることを得たり。悔らくは踵を繼いで山に住するの才に非ざることを。書に臨んで悚寒、香を焼いて布謝す。

國譯月坡禪師語錄卷之一

住加賀州 金龍山天德禪院 語錄

侍者 元曠 元機 元實等 編錄

入門

延寶九年、歲辛酉に次る天和九月初五日、檀那越三州の刺史、羽林宮君、暨び合城の諸宰官、本院の耆德聖衆等、師を請じ相接して、席を金龍山天德禪院に繼がしめ、第三代の祖となし、本月十八日を以て院に進ましむ。

①金龍山。此れ天德院の山號なり。凡そ寺院には寺號の外に山號なるものあり、蓋し寺は最初は城市を離れて深山裏に開創せるが故なり。
②禪院。禪宗寺院のこと。
③語錄。列祖の語要を集めたるものを稱して一般に語錄といふ。

其の命に順ひ、給仕輔佐する役の名。これに五種ありて五侍者といふ。
④編錄。編は「あむ」と訓じ、簡冊をあみ編ること、錄は記の義。
⑤入門。入寺又は入院と同じく新命の住持初めてその寺に入るをいふ。
⑥延寶九年。靈元天皇の世。西

ことを解するに非ずんば、争か又今日能く入得
することを解せんや。喚んで神通と云はゞ、
我れ山門に瞞せられん、喚んで本然と云は
ば、山門我れに瞞せられん、畢竟如何。東西に
揖し罷り、頭を擧して望めば、「一對の金剛
笑又噴」といつて便ち進む。

佛殿に至つて云く、「過去佛は何ぞ現在佛に似
かんや、死木佛は何ぞ活肉佛に似かんや。汝
が火を度らざることは且く置く、未審し屋裏に
向つて坐得するが如きんば、還つて眞佛と稱せ
んや否や。丹霞來るや、低聲低聲」といつて、
遂に具を展べて禮拜す。

伽藍に至つて云く、「禪は心を識得するを以て
宗となす、豈に寸土の汝をして護せしむる可有
らんや。若し是れ土地神ならば、這裏、脚

曆一六八一年、此の年九月天

和と改む。
⑤ 檀那。梵語、譯して布施といふ、轉じて布施者、更に寺院の信徒をいふ。
⑥ 刺史。國守の唐名。
⑦ 羽林。天子の宿衛を司る官名。
⑧ 善德聖衆。六十歳又は八十歳を善といふ、善徳は徳に長ずるの義にして、年服多き僧を尊敬していふ語なり、聖は智慧深く、徳高き人をいふ、衆は多の義にして、大衆の意、大衆を敬稱して聖衆といふなり。

⑨ 金龍山天徳禪院。金澤市上鶴間町にあり。元和九年、安房國長安寺十一世巨山泉滴和尚の開山にして、加賀藩主前田利常、其の室天徳院(徳川秀忠の女)の爲に開基し、世々其の香華院たり。

心の平安を得て、外境の爲に動搖せらるることなき不壞身の事、佛身に喩ふ。
⑦ 佛殿。佛菩薩の像を奉安する所の堂をいふ。法堂の前に建つるを以つて通制とす。
⑧ 汝。佛殿に安置する過去の木佛を指す。
⑨ 丹霞來低聲低聲。丹霞は丹霞山天然禪師にして石頭希遷の法嗣なり。五燈會元卷五丹霞章に、「師、一日慧林寺に於て天大いに寒きに遇ふ、木佛を取りて火に向つて焼く云々」とあり。丹霞來らば復た焼かずとも限らざれば、低聲にして見付からぬ様にせよとの意なり。

二

⑩ 山門。寺院に於ける總門をいふ、凡そ山門の制は左右中の三門を並列して一門を作るが故に三門ともいふ、三門の權上には必ず十六羅漢の像を安置し、中に寶冠の釋迦或は觀音を安じ、月蓋長者及び其財童子を以て其の脇侍とするを通規とす。
⑪ 神通。神は神異不測の義、通は無礙自在の義、即ち神變不思議なる作用をいふ。
⑫ 瞞す。瞞着又は瞞却と熟語す、欺き誑すこと。
⑬ 本然。本來又は天然の意にして、天然の儘少しも人爲を加へざるをいふ。
⑭ 揖罷。揖は又手して低頭すること、禮の一種なり。罷は「やむ」と訓じ、休め止むることなり。

⑮ 金剛。金剛身の略、金剛は堅固の義、堅固なる身、即ち身

する殿堂を特稱するなり。即ち土地堂のことなり。
⑯ 土地神。寺院の境内を守護する神をいふ、寺院に依りて一定せず。
⑰ 這裏。這は「此」と同じ、這裏は「このうち」、又は「こゝ」といふ程の意なり。
⑱ 可憐生。支那の俗語、可愛相な奴と云ふ程の意。生は助字。
⑲ 祖師。祖師堂の略、宗祖及び開山、列祖等の尊影、尊牌を奉安する堂のこと、祖堂ともいふ。
⑳ 一隊の無面目。祖師堂に並列せる祖師達の像を指すなり。
㉑ 胡蘆。蔓生の植物、ふくべのことなり。
㉒ 簡點。吟味すること。
㉓ 巾。普通手巾のことなれど、今は巾具をいふなり。
㉔ 與廢。恁麼に同じ、是の如しの意にて、支那の俗語。

を措くに處なし」といつて、便ち地を踏むこと
一下して云く、「可憐生、山僧が脚跟下に向つ
て身を藏し去れ。」
祖師に至つて云く、「一隊の無面目、箇々様
に依つて胡蘆を畫くことを得たり。簡點し
將ち來れば、巾を展ぶるに由なし。然も與
廢なりと雖も、人事道中」といつて乃ち禮す。
方丈に至つて云く、「好箇の一室、從上來、
鹿を指して馬と作し、龜を證して鼈と作して、
幾人の活舌頭をか坐斷す。今日新長老到來、
又作廢生。三たび道場に坐して年半は老ゆ。
棒頭力無うして禪を談するに懶し」と。遂に
杖を靠せて座に據る。

上堂

即日、合院の耆德、聖衆暨び内外護法の宰官等、師を請じて開堂せしむ。

師、法座の前に至り、請啓を拈起し、衆に示して云く、「此れは是れ二千年前、十方の王臣、有力の檀越に遺囑する底の陳曆、夜來業風に吹かれ、九回散亂して山僧が手に落つ、諸人見んと要すや」と。遂に維那に附して表白せしむ。維那宣疏し畢る。又法座を指して云く、「昔日、天人師佛、此の座を多子塔前に分つて、獨り金色の頭陀を坐せしめ、諸の弟子の爲に大依止と作さんことを要す。今日鈍置の古錘、此の座を金龍山中に與へて、獨り瞎屨の比丘を坐せしむ。未審し箇の甚麼邊の事をか爲さんと要す、諸人、還つて會すや。座、龍を屠つて功無きことは、須らく鈍置の古

●人事道中。「人間づきあひ」といふ程の意。

●方丈。方一丈の居室の意にて寺院住持の居處をいふ。

●從上來。「これまで」の意。

●鹿を指して馬と作す。事を設けて人を欺くにいふ、趙高が秦の二世皇帝に馬を獻じて鹿なりといひ、群臣の其の妄を笑ひしものに法を中てし故事、史記に見ゆ。次の「龜を證して龜と作す」も同意。

●長老。道眼を具へて智徳ある人の稱。

●作麼生。生は助辭、作麼は「何」と同じ。支那の俗語にして「いかん」「いかに」「いかせんに」等の意に用ひらる。

●三たび道場に坐す。黃龍、僂宗及び今の天徳の三寺に住持たるをいふ。

●拄杖のこと。

●上堂。堂は法堂の義にして、

演法のために住持が法堂に上るをいふ。

●開堂。法堂を開き講經演法することを云ふ。

●請啓。請待狀のこと。

●拈起。拈は「つまむ」と訓ず、拈出に同じく、持ち出すこと。

●檀越。梵語、施主と譯す、六度中の布施を行ふ人をいふ、檀家に同じ。

●陳曆。陳は「ふるし」と訓ず。

●業風。業は生死の根本なる善惡の所作、風は業の作用に譬ふ。

●山僧。僧侶が自己を卑下したる謙稱。

●維那。維は維綱の義にて、僧衆を統ぶるをいひ、那は梵語、羯磨陀那の略にして、知事、授事と譯し、僧衆の雜事を司り、及び之を指導する義、梵漢兼舉の名なり。六知事の一にして衆僧の進退威儀、舉唱回向

錘に還すべく、蛇を畫いて足を添ふことは、應に瞎屨の比丘に任すべし」と。遂に座に陞り香を拈じて云く、「此の一瓣香、寶爐に薰向して端に

今上皇帝、聖躬萬歳の爲にしたてまつる。

伏して願はくは、堯田春耨して、萬邦時を授くるの恩に伏し、舜苑秋成つて、百姓畔を遡るの徳に和せんことを」と。又香を拈じて云く、「此の一瓣香、爐中に薰向して、恭しく

大檀那越三州の刺史羽林管君、暨び合城の諸宰官、内外護法の居士等の爲にす。只だ願はくは、位、和叔に齊しうして、永く幽都の山河を鎮し、令を陳民に號れて、長に仲冬の律氣を正さんことを。」又香を拈じて云く、「此の一瓣香、爐中に薰向して、恭しく山を本院に開いて

●等を司る。

●宣疏。疏語を讀むをいふ、疏とは文の一體にして多くは四六文にて作る、今は請住持の疏、即ち前の請啓なり。

●天人師。如來十號の一、釋尊を指す。

●多子塔。千子塔、多子支塔ともいふ、印度吠舍利城の西北三里の處に在りといふ。

●金色の頭陀。迦葉を指す、頭陀は梵語、抖擻、修治等と譯す、煩惱妄想を去りて佛道修行するより苦行とも譯す。迦葉は佛弟子中頭陀第一と稱せらるゝより斯くはいふなり。

●鈍置の古錘。鈍置は頑固なること、即ち無碍自在ならざるをいふ。祖庭本苑卷一に「鈍置、置は當に讀と作すべし、音は致、礙られて行かざるなり」とあり。古錘は鋒鈍きもの、老僧のことに喩ふ。無礙の

宗將の異稱として用ふ、鈍置の古錘、今は愚癡和尚を指す。

●瞎屨の比丘。瞎又は婁に作る、屨は愚、又は無分別の義なり。瞎は盲目なり。比丘は梵語、破惡、怖覺、乞士等と譯す、出家の男子をいふ。瞎屨の比丘とは「どめくらの坊主」といふ程の意にて、道印禪師自らをいふなり。

●寶爐。寶は尊貴の意、爐は香爐なり。

●熱向。熱は燒なり。

●端。「まさに」と訓じ、専らの意。

●聖躬。天子の御からだのこと。

●堯。舜は支那古代の聖天子の名。

●居士。白業を行じ、佛道を修行する在家人をいふ。

●陳民。庶民といふに同じ。

第一代たり、^①輩を嗜んで釋迦を罵り、酒に酔つて彌勒を打し、常に一驚馬に騎つて、人相笑へども、獨り自若たる箇の^②慕直の老古錐の爲にす。只だ願はくは、^③師翁、衆を驗して佛法爛卻の眼を具するが如く、兒孫人を得て、共に馬駒踏殺の機を全うせんことを。^④又香を拈じて云く、「此の一瓣香、爐中に蒸向して、恭しく、^⑤大方の明德、^⑥諸山の專使、暨び合院の耆宿、聖衆等の爲にす。只だ願はくは、^⑦少林の一枝、五葉の春、^⑧空劫の外に回り、洞水の千派、四海の波、永平の宗に歸せんことを。」又香を拈じて云く、「此の一瓣香、昔日、塵積み醸生じて、本院の^⑨丈室、鼠糞堆中に留置する底、山僧拾ひ得て草蓐に包秘し、東漂西泊一十二年、未だ嘗て放棄せず。今日衆に對して

① 仲冬。陰曆十一月、冬の中頃。
② 輩。輩は臭氣ある菜蔬、即ち葱、薤、蒜、菘等を云ふ、酒と共に禪院之が山門に入るを禁する所なり。
③ 彌勒。又梅恒麗耶ともいひ、慈氏と譯す、姓は阿逸多といひ、無能勝と譯す、南天竺の婆羅門にして、兜率天に上生し、未來五十六億七千萬歳の後に此の土に出現し、釋迦に代つて衆生を濟度すといふ。
④ 慕直。事文字義に、中州の人は、蜀人の放誕にして軌轍に違はざるをいひて、川慕直といふ」とあり、自恣自由の意なり。細事に拘はらざる氣風をいふ。
⑤ 師翁。師祖と同じく師匠の師匠をいふ。
⑥ 佛法爛卻の眼。爛は「たゞる」と訓す、却は「のぞく」意、眼て、世界滅盡の時代をいふ。
⑦ 洞水の千派。洞水は洞山悟本大師を指す、派は川の名なれども、今は一般に川の意に用ふ、洞水の千派とは洞山悟本大師の流を汲める多くの兒孫を指す。
⑧ 丈室。方丈のこと。
⑨ 第三番。黃龍が第一、岱宗が第二、天徳が第三番なり。
⑩ 半欄。欄は橋に同じ、「のき」のこと。
⑪ 和尚。梵語に烏波陀耶といひ、親教師、力生等と譯す、初め阿闍梨と共に授戒の師たるもの、名なりしが、中古以來單に高僧の尊稱として用ひらるゝに至る。
⑫ 上首。首は上の義にて、多人數の中に於て上位にある者、器量の勝れたるものをいふ。
⑬ 白毳。毳は大眾に報告する時に鳴らす具、白は「申す」と訓

第三番拈出し、爐中に蒸向して、傳曹洞正宗三十六世、現に丈室の^⑩半欄に在つて、空に向つて釘櫛する箇の無鼻孔の老^⑪和尚に供養し、用て法乳の恩に酬ゆ」といつて、遂に衣を斂め座に就く。^⑫上首^⑬白毳して云く、「^⑭法筵龍象衆、當觀第一義」と。師云く、「若し第一義諦を論せば、^⑮大眾未だ門に入らず、山僧未だ堂に上らず、那時邊に向つて領得下するも、猶ほ靈龜尾を曳くが如し。箇の中傍に帝命を分つて爲に傳持し、萬里の山河政威を布く底の漢有ること莫しや、試みに來つて相見せよ。」僧、衆を出でて問ふ、「一佛出世すれば千佛讚揚す、靈山の嘉會、儼然未散、^⑯一代藏中は便ち問はず、^⑰世尊未だ拈華せず、迦葉未だ微笑せざる如きんば、^⑱正法眼藏甚麼人の邊にか落在す

む。即ち大眾に告白するため
に槌を打つ意なり。
⑩ 法筵龍象衆、當觀第一義。法筵の龍象衆、當に第一義を觀すべし」と訓む、法筵は法席なり。龍は鱗族の王、象は獸類の王と稱せらるゝより、龍象は高僧碩學に喩ふ、第一義は第一義諦の略にして、慮知念覺を離れたる絶対の理想界をいふ。
⑪ 大眾。大は多の義、多衆の人といふこと、叢林にて四方より集り來れる雲衲を總じて大眾といふを常とす。
⑫ 靈龜尾を曳く。龜は卵を産むに、沙の中に藏して、自らは餘處に避く、其れは卵の所在を人に知られざらんが爲なり、されど其の去るや、沙の上に自己の尾を引きすり、跡の残れるに氣付かずして却つて人の爲に卵の所在を發見せ

や」と。師云く、「千山の勢は嶽邊に到つて止み、萬派の聲は海上に歸して消す。」進んで云く、「和尚今日開堂、忽ち白槌前に向つて聽法を解する底有り、出で來らば如何が接得せん。」師云く、「東邊の露柱喝を下せば、西邊の露柱棒を行す。」進んで云く、「山門覆蔭して王臣敬ひ法座屹然として龍象圍む、箇の中綱宗を定むる底の一句、又作麼生。」師云く、「兼至去來妙用を興す、到兼何ぞ更に言詮を逐はんや。」進んで云く、「沒絃の一種、新豐の曲、誰か謾せん、吾が師の彈じ得て奇なることを。」師、拄杖を一卓して云く、「且く道へ、是れ甚麼の曲調ぞ。」僧、擬議す。師云く、「古院苦封じて人到らず、松風聲裏、知音を絶す。」僧問ふ、「如何なるか是れ。」公案現成の一句。師云く、「堂上幾人か、或は、緇

らる。藏さんとすれば愈々顯はるゝに喩ふ。
 ⑦靈山の嘉會。釋尊一代、諸處に於て說法せられたるが、會つて靈鷲山上、百萬の衆前に於て說法せられしなり、其の會座をいふ。
 ⑧一代藏。釋尊四十九年の說法をいふ。
 ⑨世尊拈華、迦葉微笑。佛一日靈鷲山に在つて大衆に說法するの次、梵王、金波羅華を獻す、世尊衆前に此の華を拈じ、瞬目し玉ふに、大衆其の意を會せず、時に迦葉座中に在つて破顏微笑す、世尊、吾れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付すと宣せらる。
 ⑩正法眼藏。此の語は前註世尊の語に起源し、歷代佛祖の正傳し來れる佛法をいふ、正とは正邪善惡を超越せる中正不偏の心體をいひ、法とは其の

中正不偏の心德より顯現する萬法をいふ、眼とは此の心體を以て事物を照破するに、一點も明かならざる處なきをいひ、藏とはこの心體は一切の善法を包含して餘す所なきをいふ。畢竟正法眼藏とは吾人本具の一心の妙德を形容したる語なり。
 ⑪接得。得は意を強むることば、接得は應接の意、轉じて教化の意にも用ひらる。
 ⑫露柱。法堂佛殿等に在る圓柱のこと。
 ⑬屹然。高く聳ゆる貌。
 ⑭沒絃の一種。沒は無なり、絃無ければ五音六律の聞くべきなし、無聲の靈聲、言外の妙旨を云ふ。禪門古來不立文字教外別傳と稱し、自ら別傳の有るあり、故に這様の語を以て宗風を表す。
 ⑮新豐の曲。新豐は山の名、唐

或は素。進んで云く、「此の外別に長所ありや。」師云く、「聽取せば便ち去れ。」
 僧問ふ、「西來の祖意は便ち問はず、如何なるか是れ東來の佛法。」師云く、「蒲肥えて、鞞價下り、竹瘦せて杖痕強し。」進んで云く、「灼然灼然。」師云く、「作麼作麼。」僧、擬議す。師失笑して休す。師乃ち云く、「山僧、昔、江西に在つて一條の白棒を伐り得たり。扶桑國裏力を借つて横行、到る處手に任せて受用す。初め黃龍に住し、第三、頓を下して、土面灰頭底を接し得たり。中ごろ岱宗に在り、第二、頓を下して、驢腮馬顔底を接し得たり。且く今日の如きんば、第一、頓を下して、銅頭鐵額底を接せんと要す。」拄杖を拈卓して云く、「假使ひ釋迦彌勒あり、同時に出で來つて玄を談じ妙を論する

の大中の末に、洞山真僧禪師此の山に住し、大いに洞上綿密の宗風を擧揚す、故に洞門特殊の宗風を呼ぶに新豐の曲を以てす。
 ⑯拄杖。僧の携ふる杖のこと。
 ⑰擬議。擬は「なぞらへる」と訓じ、言はんとして云ひ得ず、唯だ口を動かすのみをいふ。
 ⑱知音。心に心を知り合ふたる友をいふ、知己と同じ。
 ⑳公案。公府の案牘と熟字して、公界定むる所の法式案文にして、これに依りて訴訟の事理を處理するもの、例へば今の民法刑法の如し。此の意より、古來祖師の定むる所の法を提擧して一人の私法を是非す、即ち佛祖の機縁相契ひ、時に隨ひ機に應じて宗綱を開示したる因縁を録せしものにいふ。
 ㉑緇素。緇は黒色、素は白色に

て、僧は黒衣を纏ひ、俗は白衣を着するより僧俗といふも同じ。
 ㉒西來の祖意。祖とは達磨大師のこと。西來とは印度より支那に來られたるをいふ。西來の祖意とは達磨が遙に支那に來りて、從來教家の轍をふまず、不立文字教外別傳を標榜せる意旨をいふなり。
 ㉓鞞價。「くつのはたひ」のこと。
 ㉔灼然。明かなる貌。
 ㉕作麼作麼。作麼は作麼生の略、支那の俗語、生は動辭。作麼は「何」と同じ、「いかに」「いかに」「いかにせん」等の意に用ひらる。
 ㉖失笑。をかしまに堪へずして思はず笑ふことなり。
 ㉗江西。支那揚子江の西一帶の地をいふ、馬祖を以て名高し。

も、猶ほ是れ土面灰頭底、這裏棒を下すに、分なし。假使ひ、徳山臨濟あり、一門より入り來つて雨を罵り風を打するも、又是れ驢腮馬顔底、這裏棒を下すに分なし。假使ひ、格外の禪僧あり、千箇萬箇一時に、筋斗を打し來つて、身を翻して一時に、拂袖し去るも、又未だ銅頭鐵額底にあらず、這裏棒を下すに分なし。箇の中、箇の漢有つて、閃電機裏に端倪を辨せば、汝に許す、一頓を喫するに分あることを。其れ或は未だ然らずんば更に一則を、擧し、箇の消息を通せん。」

擧す。青原思禪師、石頭をして書を持し、南嶽讓和尚に與へしめて云く、「汝書を達し了らば速かに回れ、吾れに箇の、錙斧子有り、汝に與へて住山せしめん」と。頭、彼れに至り、未

①扶桑國。日本國の異稱。
②頓。唐土の刑、罪人を打つこと二十棒、これを一頓といふ、これより師家が學人を接得する時に打つを一頓二頓といふに至れり。臨濟、黃檗のために三頓の棒を喫すとは六十棒打たれたるなり。
③土面灰頭、驢腮馬顔、銅頭鐵額。これ何れも常相に非ざる人ないふ。
④分。分限或は分際のこと。
⑤徳山、臨濟。徳山は徳山宣鑑禪師、馬祖の法嗣。臨濟は臨濟義玄禪師、臨濟宗の祖。共に機鋒俊烈なるを以て名あり。
⑥格外。尋常を超越する意。
⑦筋斗を打す。とんぼがへりすること。
⑧拂袖。袖を拂ふことにて、怒つて立ち去る時の氣勢なり。
⑨閃電機裏に端倪を辨す。閃電機は電のびかりと光る時ない

ふ、端倪は山頂と水邊のことにして、轉じて本末始終、又は觀察の意に用ふ、電のびかりと光る間に、物の本末始終を辨別するといふことにて、機敏なるに喩ふ。
⑩擧す。擧示の意、あげ示すこと。
⑪青原思禪師、石頭、南嶽讓和尚。青原山行思禪師のこと、六祖の法嗣。石頭は石頭山希遷禪師、行思の弟子。南嶽は南嶽懷讓禪師、行思の法眷。
⑫錙斧子。錙斧は斧のこと、子は助字。
⑬諸聖。已靈。諸聖は、もろもろの聖人の意にして、三世歴代の祖師を指す、大事了畢の人々なり。已靈とは自己本具の心性をいふ。
⑭太高生。太は「はなはだ」と訓じ、生は助辭、「高尚すぎる」と云ふ程の意。

だ書を呈せざるに便ち問ふ、「諸聖を慕はず、己靈を重んぜざる時如何。」讓云く、「子が問、太高生、何ぞ、向下に問はざる。」頭云く、「寧ろ永劫に沈淪を受くべくとも、諸聖に従つて、解脱を求めず」と。讓、便ち休す。頭、廻つて靜居に至る。思、問うて云く、「子去つて未だ久しからず、書を送り達すや否や。」頭云く、「信も亦通せず、書も亦達せず。」思云く、「作麼生。」頭、前話を擧し了つて、卻つて云く、「發する時、和尚箇の錙斧子を許さんことを蒙りき」と。便ち請取す。思、一足を垂る、頭、禮拜す。尋いで、南嶽に歸つて住山す。諸人、青原を識らんと要すや、只だ賊のため梯を過ぐるに慣れて、卻つて賊の爲に敗らるゝことを得たり。石頭を識らんと要すや、是れ賊、賊を知ると雖も、奈爲せん、賊を抱いて屈と叫ぶことを。山僧、恁麼に一狀に領過す、青原父子慙汗を拭ふに處無からん。然も與麼なりと雖も、山僧、今日鈍置の老古錐を瞞卻して、横に白棒を擔ひ、幾重の江山を、跋渉し、歸り來つて且く此の山に住す。未審し青原父子と相去ること多少ぞ。古徳、一頭有り、云く、

①向下。向上の對句、絕對平等の境たる向上に對して、相對差別の境をいふ。
②沈淪。六道に沈むをいふ。
③解脱。四苦八苦等の一切の繫縛を脱し、自由安樂の境界に達すること。
④南嶽。衡嶽のこと、支那五嶽の一にして、南方に在るが故に此の名あり、湖南省にあり。
⑤賊。賊物、或は賊品のこと、賊の奪ひたる物品をいふ。
⑥恁麼。宋代の俗語にて、「斯の如し」、「其の通り」、「此の通り」等の意、與麼といふも同じ。
⑦跋渉。跋は山を行くこと、渉は水を行くこと、方々をあるき廻ることなり。
⑧古徳。古代の有徳家の義、即ち古の道人のこと。
⑨頭。梵語。伽陀の譯、韻文の

雲水隔邊君莫住。雪山深處我非忘。

尋思去日顏如玉。嗟嘆來時鬢似霜。

撒手到家人不識。更無一物獻尊堂。

卓拄杖一下。上首。結槌して云く、「諸觀法王法、法王法如是」と。下座す。

頭首。知事を立めて上堂す。師乃ち云く、「田を開いて、莊を成し、以て賢良を養ひ、木を積みて林を成し、以て龍象を聚む。直に得たり皇家の柱石と作し、佛國の金湯と爲すことを。箇の中若し永く帝基を堅うし、大いに祖宗を興さんと要せば、直に須らく事に細大無く、法に收捨を忘じて始めて得べし。所以に吳起は士と食を同じうし、午頭は衆の爲に米を負ふ。恁麼に眞俗無二、凡聖合轍ならば、帝風と佛風と同じく振ひ、官舎と僧舎と共に隆ならん。當與麼の時、交々肘臂と爲り、互に主賓と爲つて、人々職に當り、箇々事を辨する底の一句作麼生。」擧す。圓照本禪師、初め永安昇公を師とす。昇の道價は叢林に重く、歸するもの雲の如し。本、敝衣垢面、井臼を操り、炊爨を典り、以て之に給し、夜

一種なり。杖をつくこと。

尋思。思を焦して考ふること。

結槌。白槌のことなり、只だ今度以前の白槌に對して終りの白槌なるが故に結の字を以てするなり。

諸觀法王法、法王法如是。法王の法を諸觀するに、法王の法は是の如し」と訓む、法王とは遠くは釋尊のことなれど、今は上堂の主人公、即ち月坡禪師をいふなり。諸は明かなり、觀は觀察の義、明かに觀察するを諸觀といふ。

頭首。大衆の主なるを以て此の名あり、叢林に於ては知事に次ぐ重役の位なり、これに六頭首八頭首あり、六頭首は首座、書記、藏主、知客、知浴、知殿、八頭首は首座、藏主各々一人を加ふ。

は則ち入室參堂す。昇云く、「頭陀、衆の良苦を荷ひ亦疲勞せるか。」本云く、「若し一法を捨てなば、菩提を満足すと名けず、必ず此の生に親證せんと欲せば、其れ敢て勞と言はんや」と。

昇、陰かに之を奇とす。好箇の老頭陀、答へ得て奇特なるも、簡點し將ち來れば、半提の分なし。若し是れ菩提ならば、既に満足すと道ふも亦不是、未だ満足せずと道ふも亦不是。山僧若し在らば、他に向つて道はん、「太勞生、茶を喫し去れ」と。諸人還つて會すや。拂子を堅起して云く、「諸人は於て會取せば、總に不是無からん。假使ひ地獄餓鬼に墮して各々其の苦を受くるも、亦是れ菩提満足せずと云ふことなし。假使ひ畜生修羅に在つて、各々其の報を受くるも、亦是れ菩提満足せずといふ

知事。各自其の役に就いて其の事を知(つか)まざると訓ずる意なり。禪門に六知事あり、都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歲是れなり。

莊。田中の舎、又は別莊の田園をいふ。

金湯。金城湯池の略、金鐵にて築ける城、熱湯の池の意にして、堅固なる城池を云ふ。

祖宗。祖師の宗旨の意。

吳起。支那周代衛の人、魏の文侯に事へ、其の將となりて功あり。

眞俗。眞諦、俗諦のこと、眞とは眞實平等の理をいひ、俗とは世界差別の法をいふ。又出世間の法を眞諦、世間の法を俗諦といふ。

凡聖。凡夫、聖人のこと、迷へる衆生と悟れる佛陀とをいふ。

當與麼の時。當恁麼の時といふ。

ふも同じ、斯の如き場合に當つての意。

辨。成辨の義。

師。模範となる人の意にて、師匠のこと。

叢林。和合衆の安居同學する處に名く、即ち大樹の叢生して林となる如く、僧侶の衆合せる意なり。

炊爨。飯を炊ぐこと、俗に「にたき」といふに同じ。

入室。住持の室に入らしむること、住持室を開いて學人を勸辨する時に、學人の疑を決せんため住持の室に入つて、特に所解を呈し、所疑を質しめ、住持之を勸辨するをいふ、入室獨參の意なり。

參堂。堂は僧堂なり、僧堂に歸りて坐禪するをいふ。

菩提。梵語、智、道、覺等と譯す、佛陀正覺の智慧、即ち佛果をいふ。

ことなし。乃至聲聞緣覺菩薩佛果、天上人間、大地山河、草木瓦礫、各々其の處を得て、亦菩提満足せずといふこと無し、畢竟如何。斧を携へて柴を破ること四五束、刀を提げて柴を擇ぶこと兩三莖、道人の日用只だ是の如し、甚の菩提道の成す可きか有らん。」喝一喝して下座す。

東歸上堂。僧問ふ、「一百日以前、得得として東關より來り、一百日以後得々として東關に去る、箇の中還つて去來に干はらざる底の消息ありや也た否や。」師云く、「芭蕉葉上に愁雨無し、唯だ是れ時の人聽いて斷腸す。」進んで云く、「某甲、不會、子細に指示したまへ。」師云く、「七尺單前に承當し去れ。」進んで云く、「慙麼ならば宗風永く扇ぐ億萬年。」師云く、「山僧汝

に道著せらる。師乃ち云く、「山僧六年前、東、常陽に遊ぶ、既に天徳に在つて天徳を知らず。六年の後北の方、加州に歸る、既に天徳を知つて天徳に在らず。且く道へ、六年前既に天徳に在り、甚麼としてか還つて天徳を知らざる。六年後既に天徳を知る、甚麼としてか又天徳に在らざる。諸人還つて、落處を識るや。箇の中箇の漢有つて、錐の卓無き處に向つて入得透し坐得斷せば、汝に許す、山僧が禪に參じて箇の千分の一を會し去ることを。未審し恁麼に去就する底還つて人の比倫する有りや、是れ鷲嶺の釋迦佛なること莫しや。且喜すらくは沒交涉。是れ毘耶の維摩詰なること莫しや。且喜すらくは沒交涉。是れ湖南の瞎長老なること莫しや。且喜すらくは沒交涉」と。便ち兩手

奇特の意。
①菩提。全提に對す、全分の提起に非ざること。
②太勞生。生は助辭、太勞生は御苦勞といふ程の意。
③拂子。白拂ともいふ、白鹿を束れてこれに柄を付したるもの、僧の蚊蠅を拂ふがために作られたるものなれど、後に轉じて一會の導師たる人のみ之を持つこととなりぬ。
④地獄。八寒八熱等の苦處なり、地下にあるが故にこの名あり。
⑤餓鬼。常に飲食を求むる鬼類なり、人間と雜處して而も見るべからず。
⑥畜生。禽獸なり、多く人界と依所を同じくして眼見すべし。
⑦修羅。常に瞋心を懷いて戰鬥を好む大力神なり、深山幽谷を依所として人と隔離す。

⑧聲聞。佛陀説法の音聲を聞き、眞師の理を悟り、世間を出づるをいふ、小乗の分際なり。
⑨緣覺。又獨覺と云ふ、佛の教を受けず十二因縁を觀じて我執を除き、涅槃に悟入するが故にこの名あり。
⑩菩薩。悲智の二願を具し、自利化他の行を全うする修行人をいふ。
⑪佛果。佛最勝覺の位をいふ。
⑫天上。身に光明あり、自然に快樂を受くる衆生をいふ。
⑬喝。支那唐朝以後に用ひられたる一種の叫聲にして、叱吒の意、言證の及ばざる所を顯はすに用ふ。
⑭東歸上堂。禪師、天徳院を辭し、關東の岱宗へ歸らるゝ時、關東の演法なり。
⑮得々。追々、はるくの貌。
⑯某甲。名字の代り、或は名字

に代へて或は自ら其の名をいはず、「余」、「吾」、「我」の意等に用ふ。
⑰不會。會得せずといふことにて、「分りませぬ」といふ程の意。
⑱七尺單前。僧堂内に於ける一人の單位は前三尺、奥七尺なるが故にいふ、自己の坐床といふことなり。
⑲承當。自ら會得領悟することないふ。
⑳常關。水戸をいふ。
㉑落處。歸着の處、要旨といふ程の意。
㉒卓。尖なり。
㉓鷲嶺。靈鷲山のこと、中印度摩竭陀國王舍城の東北に聳ゆ。
㉔且喜。俗に「まあ幸なことに」といふ程の意。
㉕沒交涉。少しも關係のなきこと。
㉖とをいふ。没は無の義。
㉗毘耶の維摩詰。維摩詰は維摩羅詰ともいひ、單に維摩ともいふ、淨名無垢稱と譯す、釋尊と同時代の人、印度毗舍利國の長者にして、在家の身を以て菩薩行を修行したる人、毘耶は毘耶利の略、毗舍離に同じ。
㉘撥開。拂ひ開くこと。
㉙那箇。這箇に對す、「彼れ」、又は「何れ」の意、此は「何れ」の意なり。
㉚供養。佛法僧の三寶に對して、敬慕の心を以て物を獻するをいふ。
㉛誑訛。誤の意。
㉜那邊。這邊、又は這裏に對す、「彼方」といふこと。
㉝賓儀。賓客に對する儀禮。
㉞慙麼。慙づる貌、恥辱のこと。
㉟茶話。茶筵上の説話のこと、

を展べ、眉毛を撥開して云く、「看よ看よ、舊に依つて雙眉眼上に横はる底。諸人は於て識得せば、喚んで湖南の瞎長老と爲すも也た是、喚んで毘耶の維摩詰と爲すも也た是、喚んで鷲嶺の釋迦佛と爲すも也た是、畢竟如何が落著し去らん。」擧す。「臨濟大師、衆に示して云く、「一人有り、劫を論じ、途中に在つて家舎を離れず、一人有り、劫を論じ、家舎を離れて途中に在らず、那箇か人天の供養を受く合き」と。臨濟大師説き得て諸訛なり、然も與麼なりと雖も、舌頭長きこと多少ぞ。山僧、今日衆を辭して東に歸る、那邊、迎待するに賓儀を以てすることは且く置く、這裏相送るに主禮を以てするが如きんば、如何が供養し去らん。百鳥華を獻するも一場の懺悔」と。座を下り、門を出で去る。

茶話

開爐の日、合山の大家等、特に茶筵を設けて住山の賀儀を伸べ、拜して茶話を請ふ。師乃ち茶盞を拈起して云く、「此の茶は、山僧、昔年無何有曠漠の野に向つて、獨り脱然として摘み得、之を蓋ふに天を以てし、

之を載するに地を以てし、之を炙るに日月を以てし、之を曝すに風雲を以てし、遂に之を味つくるに、虚空を以てして、能く革囊に包み得、秘藏珍味、春秋三十年、受用未だ盡きず。或時は趙州に在りて、布衫に和し、量り得て、喚んで七斤となし。或時は洞山に到りて、熟麻と同じく量り得て、喚んで三斤となす。正當今日は嘗て斤量を論せず、只だ汝等諸人をして如法に一箇の空茶を煎出せしむ。箇の中箇の漢有つて、百沸千沸を問はず、一啜兩啜を管せず、直に禪味を甘得して冷煖自知することを視ば、汝に許す、山僧が堂中、始めて喫茶の人なることを。設し或は未だ然らずんば、更に一盞大いに人を酔はしむる底の事あり、親しく爲に説話せん。昔文殊大士、無著と茶を喫するの次、玻璃の盞を拈起して、無著に問うて云く、「南方に這箇有りや不や。」著云く、「無。」殊云く、「尋常甚麼を將つてか茶を喫するや。」著對ふる無し。大小の文殊、無味の談能く人口を塞断すと雖も、奈爲せん、自ら先づ唇を濕穿し了ることを。簡點し將ち來らば、未だ眞正の喫茶の人にあらす。若し是れ眞正の喫茶ならば、須らく舌乾き唇熱するの時に向つて、或は一瓶半瓶、或は三盞四盞、分に隨

それより極めて略式に通俗に問話するにも用ふ、永覺晩錄に「晚間、師學問答、次に師説法するを名けて茶話といふ」とあり。

開爐の日、陰曆十月一日なり、この日、僧堂其の他各寮舎に暖爐を開くを以ていふ。

茶盞。盞は「さかづき」と訓ず、今の茶碗のことなり。
無何有曠漠の野。曠々として何物もなき野原のこと、寂滅有爲の地に喩ふ、莊子に出づる語。

脱然。物に拘はらざる貌。
趙州布衫。僧、趙州に問ふ、萬法一に歸す、一何れの所に歸す。州曰く、我れ青州に在つて一領の布衫を作る、重きこと七斤。

洞山熟麻。僧、洞山(守初禪師)に問ふ、如何なるか是れ佛。山曰く、麻三斤。

如法。佛祖の規定せられたる如くの意。

一箇。籠は鍋、或は釜と同じ。

冷煖自知。自證自悟の義、見證悟道は他の教示に依つて得べからず、魚の水を吞んで冷煖自知するが如く、自證自悟すべきことをいふ。

文殊大士。文殊は梵語、妙吉祥、妙徳、妙覺等と譯す、支那五台山に在りて一萬の菩薩と俱なりきといふ、大士は菩薩の異譯。

無著。姓は董氏、金陵の牛頭山忠禪師の法嗣、臺山下に文殊に會せりといふ。

玻璃盞。硝子製のさかづきのこと。

無味の談。何等の意味のなき話のこと、一定の理義に拘泥せざる自在の語をいふ。

佛事。佛教の祭祀、法會を一

つて、始めて得べし。且く道へ、如何が分に随つて去らん」と。遂に茶を擧し、啜一啜して云く、「諸人還つて會すや。道ふこと莫れ、趙茶煎ることを得ずと。誰が家の爐底にか火に煙無からん。」

佛事

天徳院 乾運大姉に薦むる 點茶

師、茶盞を拈起して云く、「一莖草上に梵刹を建つ。有力方に作家と稱するに堪へたり。禪味點じ來つて半盞を點す。空茶何ぞ用ひん唇牙に著くることを。然も與麼なりと雖も、此の半盞の茶、恭しく點出して、天徳院乾運大姉に供養し、用て挿草の恩に酬いんことを免れず。未審し、酬恩の一句の如きんば若何が説得せん。大樹陰を成して天下に甲たり、叢林鬱密として龍蛇を樂ましむ」と。遂に茶を點す。

陽廣院前羽林將巖 大居士に薦むる 拈香

師、香を拈じて云く、「此の一瓣の香、昔佛靈山に在つて、十方の國王有力の檀越に付囑し、轉傳して一大三千に及ぼし、河沙の群類をして

般にいふ、法事といふも同
乾運大姉。前田利常の妻、徳川秀忠の女なり、大姉とは佛、諸の天女を稱して諸姉となせるに始る、深く佛法を信する善女の意。
點茶。俗にいふ「お茶を立つる」ことなり、此は死者に茶を立て、薦むるなり、これを奠茶といふ。
一莖草上に梵刹を建つ。從容錄第四則に「世尊行次、手を以て地を指して曰く、此の處宜しく梵刹を建つべし。帝釋、一莖草を拈つて地上に挿んで云く、梵刹を建つること竟んぬ」とあり、大小廣狹の二見を離れ、無限絶對の境界に在る人の無碍自在なる妙用を示せるものなり。梵刹は寺院のこと、今此の大姉は開基なるが故に此の語あるなり。

鼻孔を穿卻せしむる底。山僧餘香を分ち得て、布袋頭に秘在すること已に二十二年、今日恭しく拈出して、陽廣院前羽林將巖大居士に供養し、用て檀護の徳に酬いんことを免れず。未審し、香風を占得する底の一句作廢生。晚香吹き送つて秋風靜かなり、華は淨し東籬一朶の霜」と。遂に爐中に蒸く。

詩偈七言律

延寶辛酉の秋、師、偶々海東より歩いて南山老人を金龍に省る。老人喜び迎ふ。乃ち大檀那羽林菅君と同じく師を留めて、席を三世に繼がんことを請ふ。是の時、師、水戸の請に應じ、現に岱宗の衆を薰す。此に係つて久しく住すること能はず、遂に日を限つて以て住す。因つて偈を説き志を表す。

返本還源路不差。從來無住是吾家。
院矜二美麗一禪中虱。道抱二疑團一盃裏蛇。
青海暫浮泡世界。紅爐何止雪生涯。

作家。唐宋時代は詩文盛にして、詩文を巧に作るもの作家と稱して尊びたり。轉じて伶俐の人をいふに至れり。
挿草の恩。前の世尊と帝釋との故事よりして寺院創立の恩のことといふなり。
大居士。佛道を修行する在家人をいふ。祖庭事苑に「凡そ四徳を具するを乃ち居士と稱す、一に仕官を求めず、二に寡慾にして徳を積む、三に財に居して大に富む、四に道を守つて自ら悟る」とあり、大は尊稱、この意よりして在家人の死亡後、法名の下に附するなり。
拈香。拈は「つまむ」と訓ず、香を拈みて焼くの義なり、焼香に同じ。
十方。東西南北四維上下のこと、諸方といふに同じ。
河沙の群類。河沙は恒河沙の

其二

一於祖上喚君王
有法求邊都旅寓
昔年漫傲顏如玉
撒手懸崖歸去後
底事半生眠客牀
無錐卓處即家鄉
今日還慙髮似霜
旦昏奉重向尊堂

其三

未到何嘗勞問尋
松圍境致千年碧
爐火煉金煙淡淡
新豐曲斷知音少
舉州皆道大叢林
草鎖堂前一丈深
香風凝恨月沈沈
下指爲誰彈古琴

其四

古殿苦封人不登
途中可憐千般客
立路踏繭空寂寂
獨凭欄畔伴枯藤
物外堪休一箇僧
禪塵拂罷任騰騰

其五

腕頭力乏老猶懶
分化一方方十年
門前預恐老婆責
世夢半生遊伴蝶
當軒歷坐金龍寺
海東より歸つて
萬里海東多少難
語中甘蜜知腸苦
逢別十年心自寂
衲僧幸領圓成法
大檀越羽林君に面し此を賦して
正是王家柱石臣
仁施毛氈溫如春
重道時呼護法神

恨嘗無二路可棧天
海外何參新婦禪
塵緣幾處脫如蟬
不識又消多少眠
本師老和尚を省観す
買舟買馬問平安
句裏含氷覺齒寒
冤親一日指空彈
何學蜚娘轉糞丸
莫怪無心挑祖燈
莫怪無心挑祖燈
莫怪無心挑祖燈

略、無數の意、群類は機類種
種なる衆生をいふ、群機、群
生に同じ。

①布袋頭。頭は助字、袋の中と
いふ意。

②詩偈。偈陀、又は伽陀ともい
ふ、韻頭と譯す、歌なり、僧
家の詩を偈といふ。

③南山老人。愚極和尚の別號。

④紅爐上の雪。紅爐は火の盛ん
に燃ゆる所の爐なり、その紅
爐の中に雪を投すれば、雪は
忽ち消え失せて蹤なし、因つ
て暫時も停住せずして消滅す
るをいふ。

⑤藥杖。あぢの杖。

⑥露柱。法堂、佛殿等にある丸
柱のこと。

⑦祖上。祖海道上の意、曹洞宗
のことを洞上と云ふが如し。

⑧卓。立なり。

⑨撒手。撒は「ちらす」、又は「は
なつ」と訓む、兩手を放ち開

きて何事も執らず、何處にも
かけざるをいふ。

⑩叢林。和合衆の安居同學する
處に名く、即ち大樹の叢生し
て林となるが如く、僧侶の集
合せる意なり。

⑪境致。境内の風致。

⑫淡淡。うすく、あはきこと。

⑬沈沈。夜の更け行く貌。

⑭知音。眞に心を知り合ひたる
友をいふ。知己に同じ。

⑮千般の客。多くの客、或はい
ろ／＼の客といふこと。

⑯支路。支々微妙の路、即ち有
無迷悟等一切の見を混じたる
をいふ。

⑰空寂々。思慮辨知なき貌。

⑱禪塵。禪病といふに同じ。

⑲祖燈。祖師の法燈の略、祖師
の法を擧揚するを「祖燈を挑
ぐ」といふ。

⑳老婆賣。婆子有り、一庵主を
供養す、二十年を經るに常に

佛國須憐荒廢極 憑君欲見一番新

又

元來佛法付三王侯 有力須扶老比丘

官舍舍優君大德 僧途途絕我安遊

折微江北十年雨 浮筏海東千里秋

今日幸堅檀護約 何時結草謝恩由

遊山感有

堂前一丈草 離離 眞正宗風誰敢疑

龍臥猶腥深洞雨 鶴歸彌秀舊棲枝

應門童子鬢如雪 守塔弟兄苔蒸碑

操節毋言無似我 歲寒松發碧瑠璃

本多安房老居士を訪ねて賦簡す

一條藜杖寄生涯 萬里風雲是我家

尋故敲門金澤月 迷途穿履武陵華

昔年漫說年猶嫩 今日還愁日已斜

自愧老來君見笑 肩癩塵布爛袈裟

大乘寺を過り 正和尚を訪ふ

東海歸來路萬千 傍尋禪友一話雲煙

遠公蓮社結空跡 顏子瓢簞樂小賢

山園須栽醫俗藥 市廊誰得買閑錢

吾家亦有風光好 伴蝶夢遊終百年

一夕、閑を沒慈庵に偷む

閉門客食不隨群 只恐風塵汚袴裙

見脫一身猶外物 商量萬事付浮雲

秦中奔野多追鹿 世上負山誰愧蚊

林隱家寬雖獨處 半欄明月沒二分

本多主殿 信士を訪ふて賦簡す

十歲海東耕野田 工夫枉費鑊頭邊

言詩口畔常生醜 見月眼中如帶煙

老去是僧何稱佛 化來非鶴孰呼僊

一の二八の女子をして飯を送つて給仕せしむ。一日女をして抱定せしめて云く、正與庵の時如何。主云く、枯木寒巖に倚る、三冬暖氣なし。女子歸つて婆に擧示す。婆云く、我れ二十年紙だ箇の俗漢を供養し得たりと、遂に追ひ出して庵を焼却す。

①新婦禪。柔弱なる禪風を指していふなり。婦人始めて嫁すれば、即ち其の容を麗にして媚を夫に取る、是れ夫の意に違ひ趁ひ出されて家の主宰となること能はざるを恐るゝなり。

②海東。東海道のこと。

③本師。副法の師をいふ。

④平安。事なくして穩かなること、今は安否といはんが如し。

⑤納僧。衲は衲衣のこと、衲衣を着せる僧の意にて、専ら禪

僧にいふ。

①螺蛸。糞を喰ふ蟲。

②簡。手紙のこと。

③陳民。庶民に同じ。

④毛髭。細くして柔かなる毛、食獸等のことはいふ。

⑤老比丘。比丘は梵語、出家の男子をいふ。破惡、怖覺、乞士の三義あり。上諸聖の法を乞ふて慧命を資け、下衆生に食を乞ふて體養を資くるが故に乞士といひ、煩惱を破するが故に破惡といひ、魔王眷屬をして怖れしむるが故に怖覺といふなり。

⑥結草。報恩の意。左傳に「魏武子有嬖妾、無子、武子疾、命曰、必嫁、是、疾病則曰、必以爲殉、及卒、嬖妾之曰、疾病則亂、吾從其治也、及訖、杜回、杜回、瞶而顛、故獲之、夜夢之、曰、余而所嫁

對君慙愧風流少。笑倒瓦瓶茶一筵。

禪より起つ

高堂冷徹道適真。用得蒲團一著親。

心滅萬波平地盡。眼空諸有太虛泯。

風驚巢鶴卷雲葉。雨訪定僧敲竹筠。

今日枯禪禪榻外。露滴秋氣轉清新。

鐵心禪師に薦む

渾身鑄作鐵心肝。定力老來人轉難。

頭上戴鞵游法界。洞源浮筏涉禪淵。

百年槐夢眼前覺。一世芳名耳裏殘。

我欲師師師不得。對靈話出舌根寒。

大乘寺に應請して兼ねて叟道兄に簡す

萍逢此處話生涯。午後腸寒備啜茶。

老骨慙癩新圃竹。破顏讓笑古巖華。

人間萬事好隨分。蝸屋半檐堪納些。

一趣對君消息盡。

偶成

何愁秋日到西斜。

生本非鯤何欲鵬。

種栽心足苑多荒。

悟去一身華上露。

頭陀素不願成佛。

雪後、徒に示す

象王狂起峨眉巔。

春復寒林枯木蓄。

憐韓擊節藍關句。

試撥冷灰著柴見。

重ねて 生縁を過ぐ

力竭長途倦步遲。

行尋親友失門徑。

元是衲衣何化鶴。

國譯月坡禪師語錄 卷之一

婦人之交也、爾用先人之治命、余是以報。

離々。草木等の繁茂せる貌。

應門の童子。玄關に客を取次ぐ童子。

正和尚。諱は道白、弔山は其の號なり、備後の人、洞上近古の英傑、夙に宗門の衰頹を憂ひて之を復興せんと志あり、艱苦前後四十餘年、遂に其の志を成す、世復た道人と稱す。延寶八年先師の後席大乗寺に請ぜられて赴く、此の詩は其の時代に月坡禪師が訪はれしものならん。

遠公蓮社。蓮社、具には白蓮華社、又は白蓮社といふ。晋の慧遠法師、廬山の虎溪東林寺に於て、慧永、慧持、道生等の名徳、劉遺民宗炳雷次宗等の名儒耨耨一百二十三人を集め、無量壽佛の像前に於て、誓を建て、西方の淨業を修す。寺に多く白蓮を植うるを以て蓮社と名く。又蓮邦を願求する社廟なれば名くと。

顔子瓢簞。顔子は孔子の弟子顔回、瓢はひきこ、簞は竹造の丸き食器。論語に、孔子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。

客食。寄食に同じ、俗にいふ「いさふらふ」なり。

商量。商人が物品を賣買する時に、互に其の價を論量して定むることより轉じて、一般に問答審議するに用ふ。

半間。欄は橋に同じ、「のき」のこと。

信士。又信男ともいふ、在俗のまゝ佛法を信じて戒法を受けたるものをいふ。優婆塞のこと。

賤。「ちび」のこと。

他。仙に同じ。

溪邊獨有老婆一在。來喚儂家小厮兒。

東海の道中

千里吟行詩未成。吾奴可喜布囊輕。

嘯空雲雨隨他去。夾路山華爲執清。

孤枕夜難浮蝶夢。旅牀曉却聽猿聲。

閑遊初識這回勝。嘗爲風光不動情。

富士山に題す

山與二群山勢不同。一峰獨立半天中。

櫻壇雪積千秋日。龍洞雲橫萬里東。

脚跨三州無二向背。氣吞四海振雄風。

行人何念官行急。駐馬幾回望碧空。

武陵を過ぎて 故舊を訪ふ

相遇知音樂在茶。萍踪無意話生涯。

千鍾不羨董賢爵。五斗還憐元亮家。

誰覺黃皮愁裏皺。漫驚白髮夢中加。

幾回拍手笑休後。起見寒梅數朶華。

武陵の偶成

自幼爲僧樂出家。浮雲流水是生涯。

探幽金澤七年雨。忘路武陵千里華。

臭布禪中常感虱。空茶盃裏豈疑蛇。

江湖誰與話消息。只見扶桑人似麻。

深川に遊んで村亭に宿る

借筒單丁一夜休。世間出世念如瀛。

破茅檐下誰安分。古樹蔭中獨樂幽。

頻笑衲僧求作佛。又憐紳士願封侯。

武陵城裏何邊寺。鐘送西斜月半樓。

別後韻に雪夜の有懐に依り、兼ねて心越禪師に寄酬す

萍逢何料宿生緣。靦面無心話樂禪。

白雪和歌聲外曲。青篇擊節句中玄。

閑塵蟬脫共雲水。夢世蝶遊齊晚年。

①風流。みやびやかなること。

②竹筴。共に「たけ」なり。

③禪榻。禪床に同じ、僧堂内に於ける坐禪をする場處なり。

④定力。禪定に依りて得る力のこと。境に遇うて境に動ぜざる力なり。

⑤槐夢。槐安夢の略、淳于棼の故事より夢の義に用ふ。異聞集に、「淳于棼、夢に大槐安國に入り、王に見えて南柯郡の司となり、凡そ二十年にして、使者送りて穴を出でて遂に寤む、古槐の下に尋れしに蟻穴あり、乃ち槐安國なり云々。」

⑥偶成。思ひがけなく出来た詩の意。

⑦鯢。大魚のこと。列子に、「有鯢焉、其廣數千里、其長稱焉、其名爲鯢。」

⑧鵬。大鳥。莊子に、「北冥有魚、其名爲鯢、鯢之大不知幾千里也、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之大不知幾千里也。」

⑨瀝。餘滴の義にして、微なる流をいふ。

⑩頭陀。梵語、持擻と譯す、煩惱妄想を去つて、佛道修行をなすこと。又種々の苦行をなすが故に、苦行とも譯することあり。更に以上の意味より僧の別稱として用ふることもあり、此は自稱なり。

⑪粥飯僧。叢林にありては、朝は粥、晝は飯を食するを通規とす。粥飯僧とは、僧堂僧の謂にして、俗に「雲水坊主」といふ程のことなり、冷笑の意あり。

⑫峨眉嶺。支那四川省嘉定府眉縣の南百里にある山。

⑬普賢。梵語、鄧輪跋陀の譯、彌吉といふに同じ、一切諸佛の理徳、定徳、行徳を主り、文殊の智徳、證徳と相對す。

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

約老林間空別去。不知枕藉甚山眠。

詩偈七言絕

列、律の二、禪人家に歸つて母を省るを送る

賣糶何似買糶親。可愧睦州陳道貧。

若錯臨行論孝滿。無私足下惹埃塵。

初めて心越禪師に會うて此を賦して喜ぶ

新豊曲斷已千年。且喜道兄來續絃。

彈指未成神調妙。清音何必在琴邊。

其の二

胡言漢語路方通。相遇全提舉祖宗。

問到西來閑意旨。一聲笑倒太虛空。

其の三

破顏無語此心親。一句未嘗分主賓。

清會且須終日去。異風互愛異州人。

即ち理智一雙、行證一雙、三昧般若一雙なり、故に釋迦如來の二脇士となす。文殊は獅子に駕して佛の左方に侍し、普賢は白象に乗じて佛の右方に侍す。

① 佛號節藍關句。唐の韓退之、潮州に謫せられ、途中詩を賦し、「雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前」の句あり。

② 語釋備參藥蟠。龍は龍窟居士のこと、藥蟠は藥山禪と云ふに同じ、藥山は惟儼禪師、石頭希遷の法嗣。碧岩四十二則に、「龍居士辭藥山。山命十人禪客。相送至門首。居士指空中鸞。云、好雪片片不落別處。時有全禪客云、落。在什麼處。士打一掌。全云、居士也不得草草。士云、汝恁麼稱禪客。問老子未放汝在。全云、居士作麼生。士又

心越禪師再晤の韻に和して兼ねて懷を述ぶ

俱談辯慧湧如泉。再會何慙九至筵。

一曲調高人不賞。沒絃今荷孰家傳。

曉、小高の原を過ぐ

霜明荒草踏無痕。影白西斜月一村。

風送鐘聲一何處寺。曉行駐馬小高原。

願文

禮佛安樂行の願文

歸命す、靈山の獨尊佛及び歷代の諸大祖師、我れ今頂禮して法乳に酬ゆ、唯だ願はくは慈悲を以て誠詞を鑑みたまへ。末法の弟子某甲等、幸に僧衆中の尊と爲ることを得たり。直に愛纏を截つて、實相を顯し、永く財色を脱れて空門に入る。階級を歷すして聖衆に交り、修證を假らずして法身を成す。父母も得て子とすることなく、王侯も得て臣と爲さず。事に觸れて宗に合して常に自在、處に隨ひ主と作つて最も裕寛。

打一掌、云、眼見如盲、口說如啞。

③ 生緣。出生の因縁となれる處、即ち出生地のこと。

④ 木孔罕に龜を浮ぶ。稱揚諸佛功德經中に出づ。

⑤ 儂家小厮兒。儂は自己の稱、厮は家において薪水の勞を取る召使のこと、故に儂家の小厮兒は俗に「わつしの家の小僧つ子」といふ程の意なり。

⑥ 吟行。詩歌を口ずさみながら行くこと。

⑦ 德壇。德は仙に同じ。

⑧ 三州。甲斐、相模、駿河の三國。

⑨ 行人。旅行する人。

⑩ 官行。官の使、又は官より召出される旅のこと。

⑪ 故舊。以前よりの知合、舊知のこと。

⑫ 知音。心から知り合つた友達、知己といふに同じ。

身を雲水に約して依身
淨く、心を虚空に了じ
て用心安し。情、物に
附かすんば物自ら空
しく、物、情を礙へざ
れば情自ら保し。
報應盡く影の如く泡
の如し。作用又何をか
惡み何をか好まん。性
に任せ、逍遙して斷續
なく、縁に隨ひ放曠し
て去留を樂しむ。或は
孤峰頂上に向つて
立ち、或は十字街頭
に入つて遊ぶ。或は國

- ①千鐘。鐘は量の名、六斛四斗、或は八斛、或は十斛をいふ、千鐘は量の多きをいふ。
- ②種中虱。晋書に「虱之處種中云々」とあり。
- ③孟襄蛇。晋書樂廣傳に見ゆ、相問の弓に蛇を書きありしが、其の下にて酒を飲み、孟中に蛇の影が映じたるを見て、神經を惱まし、病氣を生ぜしといふ故事。
- ④單丁。丁は亭に通ず、單丁は「軒立のあづまや」のこと。
- ⑤作佛。成佛と同じ、大悟徹底し、佛境界に至るをいふ。
- ⑥紳士。官吏、又は學徳の修養高くして典雅なる男子をいふ。
- ⑦宿生縁。前世の因縁のこと。
- ⑧親面。親は見と同じ、出會ひがしらといふ程の意。
- ⑨擊節。拍子を取ることをいふ。
- ⑩絶。絶句の略、起、承、轉、

結の四句より成る詩の一體なり。

①評人。評に歸したる人の意。

②睦州陳道賢。睦州は黃檗希運の法嗣、姓は陳氏、睦州龍興寺に居て跡を睡まし、常に草履を製して密に道上に賣りて母を養ふ、歳久しうして、人之を知り、陳蒲鞋の號あり、時に學人來つて叩激すれば、隨問隨答、詞語當るべからず、是に由つて四方歸慕し、陳尊宿と號す。道賢は貧道に同じ、沙門の譯語、又道徳に乏しき義にて、僧侶が自己の謙稱に用ふ、此は他よりいふとにて、少しく輕蔑の意を含む。

③且喜。俗に「まあ幸なことに」といふ程のこと。

④胡漢。胡は「えびす」、漢は中國の稱、此は日本と支那とをいふ。

- ⑤主賓。主人と客、師家と學人のこと。
- ⑥禮佛安樂行。禮佛は合掌恭敬して佛を禮拜すること、此は禮佛即ち安樂行なり。
- ⑦歸命。歸は歸向の意にして、命は自己の命根なり、即ち自己の命根をして三寶に歸向するの意。又歸は敬順の意にして、命は佛命なり、佛の命令に敬順するの意。
- ⑧頂禮。五体を地に投じ、香が頂を以て尊者の足を禮するなり。
- ⑨法乳。法乳の恩のこと、佛祖の恩徳をいふ。世の小兒が慈母の乳に依りて成長するが如く、佛弟子は佛祖の教法に依りて慧命を資益し來れるが故に法乳といふ。
- ⑩慈悲。能く他に樂を與ふるを慈といひ、能く他の苦を抜くを悲といふ、即ち諸佛の一切

士筵中に在つて坐し、
或は野老村裏を過ぎて
行く。飛行三昧、自
ら具足し、神通六種
本圓成す。纏纒百結、
寒を逃つて足り、脫粟
一炊、饑を忘じて休す。
自己都べて塵の掃ふ可
き無く、目前更に法の
求むべきなし。四時、
萬物盡く成行、二
儀三光嘗て私無し。
祖道從來只是の如く
佛法現前又何をか疑は
ん。娑婆界中即ち

- ①衆生をいつくしみ玉ふをいふ。
- ②末法。佛の滅後五百年を正法といひ、更に千年を像法といひ、更に其の後一萬年間を末法といふ、末法の世には正師少く邪法多くして佛法は漸次衰滅すといふ。
- ③弟子。門人、門弟、徒弟に同じ、學は師の後にあるが故に弟といひ、解は師に依りて生ずるが故に子といふ、即ち教を受くるもの、こと。
- ④實相。宇宙萬象の眞實の体相をいふ。
- ⑤財色。五欲の二を擧げて食名睡の三を攝するなり。
- ⑥空門。佛教の總名なり、佛教は主として空法を以て涅槃の門となせばなり。
- ⑦聖衆。聲聞、緣覺、菩薩、佛の四聖をいふ。
- ⑧修證。修行證果の略、佛祖の

法に依りて善行を修むるを修といひ、その修行に依りて到る佛果を證といふ。

⑨法身。佛身といふと同じく、無相なる佛陀の靈覺をいふ。

⑩報應。報身、應身のこと、前の法身を合して三身といふ。報身は因行の功徳に報いて顯はれたる佛の實智、應身は理智不二の妙体より衆生化度のために種々に應現する身なり。

⑪逍遙。自適の貌。

⑫孤峰頂上。孤峰は山の重疊せるところに特に一段と高く聳ゆる峰をいふ。

⑬十字街頭。十字街は道の十字形になれる處をいふ。前の孤峰頂上の反對にて、通行頻繁なるをいふ。

⑭飛行三昧。自在に虚空を飛行すること。

⑮神通六種。一、神境、二、天

- ⑯眼、三、天耳、四、他心、五、宿命、六、漏盡。
- ⑰四時。春夏秋冬。
- ⑱二儀三光。二儀は陰陽或は天地、三光は日、月、星のこと。
- ⑲祖道。祖師道の意にて、祖師の教をいふ、佛法と名異なりて實同じ。
- ⑳娑婆界中即ち寂光。娑婆は忍土と譯す、吾人の住むこの世界なり、寂光は具には常寂光土といふ、常寂光土は周遍法界の法界なれば、三五の色質皆寂光一理の上に在つて宛然たり、故に四聖同居土の娑婆即ち常寂光土なり、經に常在靈鷲山といふこれなり。
- ㉑法界宮。胎藏大日如來宮殿、依處は摩醯首羅天にあり、これ古佛成菩提の處なり、但し此は其の義には非ず、單に法界といふに同じく、萬有該括

寂光、草木叢林佛にあらすといふことなし。況んや是れ人々大丈夫、豈に應に自ら輕んじて退屈すべけんや。假使ひ虚空は盡日有りとも、我が箇の安樂行は窮り無からん。願はくは上來の勝功德を以て、無邊の法界宮に回向す。

啓

某甲の禪師に復して住山を賀するの啓

伏して以れば眞の石頭下の兒孫、家に在つて餅を饋るの夙志を厚うす。實に士民家の父子田を種る飯を搏むるの高風を繼ぐ。恭しく以れば、某甲の禪師は口皮邊、禪一字を説かず、己躬下、道千金よりも重し。調高うして新豐斷絃の曲を續ぎ、機全うして虚空無舌の言を解す。入定 那伽の如くにして倒に藥山の閑坐

の一法界をいふなり。

①回向。廻轉趣向の義にして己の善根功德を廻轉して他に趣向せしむるをいふ。

②啓。申し上ぐる義、手翰、上書と同じ。

③復。回書するなり、俗にいふ「返事」なり。

④種田搏飯の高風。地藏探禪師、一日田を搏む次で、新到の僧を見て乃ち問ふ、甚麼の處より来る。云く、南方より来る。師云く、南方の佛法如何。云く、商量浩々地。師云く、争ひ似かん我が道程、田を種る飯を搏めて喫せんには云々。

⑤新豐斷絃の曲。一時衰へたる宗風を復興するをいふ。

⑥入定。禪定に入つて坐禪三昧となるをいふ。

⑦那伽。那伽定のこと、那伽は梵語、龍と譯す。那伽定は梵

漢兼舉にて、大龍王の定の義なり。

⑧藥山閑坐。藥山久しく陸座せず、院主白して云く、云々、山陸座、良久して、便ち下座して方丈に歸る云々。

⑨青原の不爲。青原、六祖に問ふ、當に何の所務か階級に墮せざる。祖云く、汝嘗て什麼を作し来るや。原云く、聖諦も亦爲さず。祖云く、何の階級に落つるや。原云く、聖諦すら尙ほ作さず、何の階級か之れ有らん云々。

⑩盲龜木孔。稱揚諸佛功德經中に一切世界に設ひ中に滿つる水あり、水上板あり、板に孔有り、一の盲龜あり、百歲の中に於て一度頭を擧ぐ、孔に値はんと欲す、斯ること亦甚だ難し、人身を求索する甚だ難し云々とあり。

⑪劍去刺魃。呂氏春秋蔡今篇に

を笑ひ、所務階級無うして何ぞ 青原の不爲に慙ぢん。不肖恰も 盲龜の木孔に値ふことなきが如く、大いに睡螺の佛興を知らざるに似、數行啼を寄せて、特に書成つて玉を聯ぬることを辱づ。千般恨有り、自ら愧づ、劍去つて魃を刺むことを。而今 雲秦嶺に横ふ、知んぬ家何かあることを。此の日、雪藍關を擁す、奈せん馬前まざることを。故に 雙魚を勞し、聊か卑啓を復す。冀はくは二虎を備ひ備へて、笑資に充てんことを。

某甲の禪師に寄せて年旦を賀するの啓

伏して以れば、堯天平かに舜日永し、麟鳳野に舞ふて千變萬化、皆無爲の時を樂む。洞雲遠く濟水深し、龍象方に遊んで 三到九至、丕に絶學の道を訪ふ。此れ有力の宗師、大法 萬鈞の重きに任するに因つて、荒涼たる祖苑一華五葉の春を回すに逢ふ。恭しく惟れば、某甲の禪師は横に 無孔の笛を吹いて 少林脱空の歌に賞和し、倒に 破沙盆を擲つて、諸方提挈の手を假らず、宗風を扶桑の六十州に振ひ、禪範を 塵沙の五百劫に堅うす。大家風を望んで偃し、衆山穀を推して公なり。不肖冷灰未だ豆爆せず、寒谷何ぞ氷消せん。但だ願はくは 祝下の聲名、春雷と

出づ。

①雲積秦嶺。家何在、雲積秦嶺、馬不前。唐の韓愈が憲宗皇帝の佛骨を迎へらるゝを諷めて、南海に騎せらるゝ途次作れる詩の句。

②雙魚。雙鯉に同じ、書信のこと。

③堯舜。支那古代の聖君、此の時代は天子の徳に依り、無爲にして治まりたりといふ。

④無爲。爲すことなきをいふ。但し何事もなすずばんやりとして居ることに非ず、一切の行爲に於て、恰も魚の水を行くが如く、鳥の空を飛ぶが如く、少しも壘礙なく、而も其の痕跡の残らざるをいふ。

⑤洞雲濟水。曹洞臨濟をいふ。

⑥三到九至。曾て雪峯義存、三度投子に到り、九度洞山に至るの故事あり。

⑦絶學の道。佛道のこと、佛の

同じく轟き、徳光暖日を連ねて、共に耀かんことを。

書

東阜越禪師に寄する書

我が國祖道、振はざると二百餘年、獨り黃檗琦老人有つて、濟北の二宗を興起す。東波已に三十年、其の法席に往來する者、僅かに千萬の一二に過ぎず。而今洞上の一宗、人乏しからずと雖も、其の傳甚だ久しうして風範漸く衰ふ。弟、不敏にして祖燈を續ぎ、無德にして師位に據る、幸に道兄の東渡すること有り、豈に得力の歡を作さざらんや。但だ願はくは、道兄をして東遊せしむるの計を終へて、共に新豐斷絃の曲を奏せんことを。道兄倘し龍天の推

教は其の極致に至れば、知解分別の學を以て之を會すべからざるが故にいふなり。
① 萬鈞。鈞は三十斤のこと、萬鈞は量目無限なるに用ふ。
② 無孔の笛。孔の無き笛、吹奏することの出來ざる笛なり。言思を絶したる箇事の當體に譬ふ。
③ 少林脫空の歌。少林は達磨のこと、脫空とは空を脫離したるの意、有に著せず空に著せざる直指人心見性成佛の宗旨をいふ。前に無孔の笛といひたれば、之に對して歌といふなり。
④ 破沙盆。破れすりばちのこと。
⑤ 禪範。禪林規範の略。
⑥ 塵沙の五百劫。五百塵點劫のこと、長遠なる時間をあらはすに用ふ、法華壽量品に出づる語にて、先づ五百千萬億那

由陀阿僧祇の三千大千世界を抹して微塵と爲し、五百千萬億那由陀阿僧祇の國土を過ぎて一塵を下し、斯の如くにして微塵盡きたる時、その經る所の一切の國土は微塵を下せるも下さざるも悉く抹して微塵とし、一塵を一劫と數へて總計せしものをいふなり。
⑦ 現下。現座下の略、現は獅子の一種なれば、獅子座の下といふこと。高僧碩徳、常に獅子の左右に侍せる高座に陞つて、説法垂示するを以て、その人を尊稱するに用ふることをなれり、猶ほ殿下、閣下の如し。
⑧ 書。文の一體、手紙様の文をいふ。啓、牘と稍異なる。
⑨ 東阜越禪師。東阜は號、心越は字、名を興備といふ。明の杭州金華府婺州府蘭溪の人、翠微潤堂の法嗣、延寶五年來

出を得ば、願臨に容なること莫れ。岱宗、山靈ならずと雖も、半檐の風月弟も亦惜まず。

暗臺流和尚に寄する書

未だ識面せずと雖も、屢々思ふと故の如し。偶々黙子の到るに逢ひ、千里渴望を倍す。已に聞く、道兄盟を東阜越公に結んで、厚く法猷を助くと、方に至誠を見るに足れり。弟が如き、三年前越公有ることを知るも、然も書を裁して起居を問候するに及ばざること、嗣承未だ明かならず、凡聖計り難きを以てなり。今弟、詳かに聞く、越公、法系壽昌の五世に係り、我が永平と共に洞上の門庭に出でたりと。土異なり源遠しと雖も、奕葉聯芳誰か秦心を懷かん。是に於て、弟、特に水戸侯に聞し、越公をして居を東武に移さしめんことを計る。只だ願はくは、事成つて新に西來の意旨を話らんことを。別に尺一を越公に致すと雖も、緒餘多端にして聊か事を盡すに遑あらず。請ふ道兄口諭せよ。

志

朝、後水戸光圀に請ぜられて祇園寺を開き、武藏、相模等を歴遊して吟詠多し、元祿九年五十五歳にて寂す、著作東阜全集二卷あり。
① 黃檗琦老人。名は隆琦、隱元と號す、黃檗宗の開祖、明の福州福清の人、永曆八年夏來朝。老人は尊稱。
② 濟北の一宗。臨濟宗のこと、臨濟宗祖義玄は直隸省鎮州城東南臨濟院河畔の臨濟院に住せり、院は其の河の濟(渡場)に臨むが故にこの名を得たり。
③ 祖燈。祖師の法燈の略、祖師の法を承傳するを「祖燈を續ぐ」といふ。
④ 龍天。佛法護護の神なり。
⑤ 暗臺。暗臺寺は長崎市にある。
⑥ 故。故人、又は故友の略にして、舊友のこと。

傳法正宗の志

傳は不傳を以て傳と爲し、法は無法を以て法と爲す。所以に道ふ、「我が宗に語句なく、實に一法の人に與ふる無し」と。此れ不傳の傳、無法の法に非ずんば、奚ぞ敢て眞傳實法と稱するに堪へんや。昔、祁原、安丘の孫崧に學ぶ、崧、書を以て相分つ。原、書を得、讀まずして云く、「夫れ學は智高きを以て通ず、書何かせんや」と。書を家に藏めて四方に游學し、學成り書を以て崧に還し、書を傳へざるの意を解す。崧、其の敏に服す。又徐曠、大學を學ぶ、時に沈重講授す、門弟子、常に千人。曠、質問する所數日にして辭し去る。或人其の故を問ふに、云く、「先生の講する所は紙上の語のみ、奥境の如きんば彼れ未だ見ざる所なり、尙ほ何

①法欲。欲は謀なり、はかりごとのこと。

②裁。製なり。

③嗣承。師嗣相承のこと、法系といふも同じ。

④壽昌。壽昌は支那建昌府壽昌寺の惠經を指す、芙蓉道楷の下、永平は丹靈子淳の流を汲み、心越は鹿門自覺の流を汲む、共に洞山の遠孫なり。

⑤突。突は「かきぬる」なり、葉は世に同じ、代々と云ふこと。

⑥尺一。尺廣、即ち手紙のこと。

⑦志。誌に通ず、記録の意。

⑧不傳の傳、無法の法。共に對對に亘らざるをいふ。

⑨眞傳實法。眞實の傳法といふこと。

⑩祁原。字は根矩、朱熹の人。

⑪安丘の孫崧。孫崧は平度の人、安邱に寓居す。

①解。解釋、解説の意。

②流俗。流類俗徒の略、僧侶に對す。

③教外の宗旨、別傳の道行。教外別傳の宗旨道行のこと。

④世尊華を拈じて、微笑の頭陀に付す。靈山會上に於ける世尊、迦葉傳法の體容なり、前に註に詳なり、見よ。

⑤磨師髓を分つて斷臂の比丘に與ふ。支那嵩山少林寺に於ける達磨、慧可付法の體容なり、五燈會元卷一、達磨章に、「其の年十二月九日夜、天大いに雪を雨らす、光（神光慧可）堅立して動かさず、明に運んで積雪膝を過ぐ、祖問んで問うて曰く……光、祖の誨勵を聞き、潛かに利刀を取りて自ら左臂を斷じて、祖の前に置く、祖、是れ法器なるを知らし」とあり、其の後、達磨、既に附法の時機至れるを看、

門人道訓、道育、尼總持、慧可の四人をして、所解を呈せしむ、慧可、言無くして達磨の前に至りて禮拜し、自位に依りて立つ、達磨曰く、「汝音が髓を得たり」と。

⑥嘉禎。四條帝（西紀一二三五—一二三七）の年號、寛元は後醍醐帝（西紀一二四三—一二四六）の年號。

⑦永仁。伏見帝（西紀一二九三—一二九八）、應永は後小松帝（西紀一三九四—一四一三）、稱光帝（二四一四—二四二八）二代に亘る年號。

⑧永享、寛正。後花園帝（二四二九—一四六四）中の年號。

⑨文明、長享。後土御門帝（一四六九—一四八九）の年號。

⑩嬭々然。長き貌。

⑪紛乎。紛は衆なり、盛なり、喜なり。

⑫宗門。宗派、又は宗旨の義に

をか觀せんや」と。重、之を知つて其の能を憚る。是れ人間、流俗の學すら尙ほ不傳の智才あり、況んや教外の宗旨、別傳の道行に於てをや。世尊華を拈じて微笑の頭陀に付し、磨師髓を分つて斷臂の比丘に與ふ、豈に此れ傳有らんや、又豈に傳無からんや。只だ火と火との如く合し、空と空との如く混す。黃梅の曹溪に於ける、青原の石頭に於ける、船子の夾山に於ける、洞山の雲居に於ける、皆道眼を以て人を得、佛法水く亂れざるのみ。我が永平の正宗、嘉禎・寛元の始に興り、永仁・應永の間に盛に、永享・寛正の末に衰へ、文明・長享の下に墜つ。已に墜つるの風、嬭々然として斷えざること二百餘年、今時禪學者の弊、宛も碓砮の玉を亂るが如く、技詞蔓説を以て辨博と爲し、鉤章棘句を以て迅機と爲し、認取意識を以て至要と爲し、懶惰自放を以て了達と爲す。縦ひ至愚と雖も、奚ぞ其の不可なることを知らざらんや。然も尙ほ紛乎として愧ぢざることは何ぞや、大いに笑ふべし。其の弟子たる者、心、師を非して諂るに敬を以てし、其の師たる者、實に弟子を賺して責するに法を以てす。師、弟子相共に、宗門を誑御すること、盜跖よりも甚だし。動もすれば、檀嚙の厚

薄を觀、^①屋樓の華否を料つて、居を移し師を改むること星火の如く然り。^②道士儒子の輩、吾が佛を難する毎に、必ず論じて此に至る。余、得法の日、此の頽風に類せざらんことを誓ひて一十二年の中、三たび道場に坐し、^③嗣香三たび南山老人の法乳に酬ゆ。此れ余が不傳の傳を傳とし、無法の法を法とする所以なり。^④嗚呼世を擧げて只だ余を笑ふことを知つて、世を擧げて余に笑はるゝことを知らず。伏して冀はくは、余が此の笑を以て、人有つて聲を繼ぎ、相引いて直ちに當來の幾千萬世に到つて、彌勒に分付し、彌勒をして一笑を加へしめんことを。此の日、方丈無事、乃ち志して以て余が後世の兒孫に傳ふ。

て、禪門と同意。古は教家に對して稱したるも、今は各宗共に自宗のことを宗門と稱するに至りぬ。
^①盜跖。古の大盜賊の名。
^②檀。檀家觀金の略。檀家は寺院に屬する信徒のこと、檀は檀那の略にして、布施主のこと、寺院に對して布施を行する家のこと、觀は觀、又は觀に作れども、三字共に施の意なり、即ち施主より三寶に施す金銀をいふ。

^③屋樓華否。寺院の大小、貧富のこと。
^④道士、儒子。道者儒者といふに同じ、道士は老莊の教、即ち道教を奉する者、儒子は孔孟の教、即ち儒教を奉するものをいふ。
^⑤嗣香。嗣承香の略、又嗣法拈香ともいふ、開堂の時、師の爲に拈香し、得法の由る所あるを明かにし、以て法乳の慈恩に報ゆるなり。
^⑥嗚呼。嘆息の聲。

國譯月坡禪師語錄卷之一 終

國譯月坡禪師語錄卷之二

住加賀州金龍山天德禪院語錄

侍者 元曠 元機 元實等編錄

源流の傳略

永平元禪師傳

禪師、名は道元、^①京兆の人、姓は源、村上天皇の裔なり。^②艸歲にして出家し、^③横川の公園に依つて戒度既に圓にす。年未だ幾ならずして大藏を閲すること二次、一日、^④教外に志有り、乃ち出で、^⑤建仁の西公暨び^⑥淨妙の勇公に參調し、遂に法を得て、^⑦黃龍の十世に係る。偶々人の宋地の禪風を稱するを聞き、即ち商舶に隨ふて直に大宋に入る。行々入道の捷徑を、^⑧派無際（てんどう）に天童に、^⑨琰浙翁（たんせつおう）に徑山に、^⑩元（げん）靠（こう）に萬年寺に、

^①京兆。京尹に同じく、首府のこと、此は京都を指す。
^②艸歲。卯は「あげまき」、小兒の髮風の様なり。
^③横川の公園。横川（よこがわ）の首楞嚴院座主公園。
^④戒度。受戒得度の略。
^⑤教外。五時八教を教内といひ、禪の正宗を教外といふ。
^⑥建仁の西公。建仁寺榮西禪師

卓公に小翠巖に問ふに、僉契はず。自ら念らく、日宋の兩地未だ知識の我れに過ぐるもの有らずと。初め錫を天童に留む、衆議して異域を以て位新戒に列す。師、樂まず、乃ち表を以て上に聞し、三度までにして遂に其の志を終ぐ。是に於て聲、遐邇に振ふ。次の年、適々淨禪師の來つて天童に住するに逢ふ。師、喜び迎ふ。淨、一見して器とし重んず。師、誠を投じて入室、午子力參、脇、席に至らず。一夕、淨、堂を過ぎ、一僧の坐睡するを見て云く、「此の事は須らく身心を脱落して始めて得べし、愆廢に只管に打睡せば、何年か今日の事有らん」と。便ち履を脱して之を打つ。師、傍に在り、豁然として旨を領す。次の日、方丈に詣るに、淨、笑つて云く、「脱落脱落」と。時

- ① 淨妙の勇公。退耕行勇、榮西の法嗣。
- ② 黃龍。黃龍慧南。
- ③ 派無際。無際了派禪師、當時浙江省慶元府太白山天童景德寺の住持たり。
- ④ 瑛翁。徑山に徑山に。新翁如瑛禪師、徑山は支那浙江省杭州府臨安縣天目山の東北にあり、山麓に能仁興聖萬壽寺あり、支那五山の一、臨濟專門道場として尤も有名なり。
- ⑤ 卓公。盤山思卓禪師。
- ⑥ 新戒。新に戒法を受けて得度したる僧のこと。
- ⑦ 表。君に奉る上書文のこと。
- ⑧ 遐邇。遠近なり。
- ⑨ 淨禪師。字は如淨、長翁と號す、支那越の人、少にして儒學を學び、長ずるに及びて出世間の法を學び、十九歳にして教相の學を捨て、雪竇山智

鑑に講して嗣法し、諸山に歴住し、教を奉じて天童に遷り、化門大いに張る、宋の理宗紹定元年(西紀一二二八)六十六歳にして示寂す。
① 午子。午は晝の十二時、子は夜の十二時、故に午子とは晝夜と云ふに同じ。
② 坐睡。僧堂のこと。
③ 此の事。此の一大事の略、佛祖の大道を云ひあらはす換言葉、今日の事といふも同じ。
④ 脱落。「もぬける」と云ふこと。吾が身心此の儘にして我慢我見の悉くなくなれること。
⑤ 愆廢。宋代の俗語「どんな」、「いづれ」、「こんな」又は「斯の如し」、「其の通り」、「此の通り」等。意に用ひらる。
⑥ 細。卑なり。

に福州の廣平、淨の傍に侍りて云く、「非細なり。外國の人、愆廢の大事を得たり」と。師、禮拜す。自後服勤最も厚うして、盡く其の蘊を得たり。偶々辭を告げて、東歸を促すに至り、淨、付するに、洞上の宗旨、暨び芙蓉の衲法衣を以てして云く、「汝須らく速かに歸るべし、只だ化を分つて斷絶なからしめんことを要す」と。師、俛仰して焉を受け、遂に歸つて化を城南の深草に開くに、諸方之を推し尊んで日域曹洞の第一祖と云ふ。師、上堂して云く、「山僧、叢林を歷ること多からず、只だ是れ等閑に天童先師に見えて、當下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞せられず、便乃ち空手にして郷に還る。所以に、一毫も佛法無し、任運に且く時を延ぶ。朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む。雲收つて山骨露れ、雨過ぎて四山低し。畢竟如何。三年一閏に逢ひ、鶏は五更に向つて啼く」と。下座。晩に永平精舍を越州に築いて居す、未だ幾ならずして四衆巖のごとくに至る。叢規一に太白に則り、肅如として扶桑に最初たり。時に寛元上皇、詔を降し、紫方袍を賜ふて佛法禪師と號す。内臣、勅を持して至る。師、恩を謝し竟つて力辭すること數次、上皇許さず。

- ① 東歸。日本に歸るを云ふ、日本は支那の東方にあるが故に斯くいふなり。
- ② 洞上の宗旨。曹洞宗一家の要旨といふこと。此の時洞山の五位顯訣、寶鏡三昧等を付與されしなり。
- ③ 芙蓉の衲法衣。芙蓉道楷禪師の袈裟なり、如淨禪師に至る迄、歴代相續し來れるものなり。
- ④ 俛仰。俛は俯と同字、首を垂るゝを云ふ。
- ⑤ 城南の深草。城南は城邑の南の意、城邑は京都を指す、深草は今の山城國宇治郡にあり。
- ⑥ 當下。直下と同じく、「直ちに」の意。
- ⑦ 任運。時運に任ずの義。
- ⑧ 五更。今の午前四時なり。
- ⑨ 永平精舍。精舍は梵語、毗訶羅の譯、精練なる佛法修行者

遂に收め、偈を獻じて云く、「永平山淺しと雖も、勅命重きことを重々、却つて猿鶴に笑はる、紫衣の一老翁」と。上皇、嘉歎すること久し。師の性極めて幽隱を好み、茅茨を玲瓏巖下に結んで退休の室と爲す。乃ち「西來の祖道我れ東に傳ふ、月に釣し雲に耕して古風を慕ふ、世俗紅塵飛んで到らず、深山雪夜草庵の中。」
① 三間の茅屋既に風涼、鼻觀先づ參す秋菊の香、鐵眼銅睛も誰か辨別せん、越州に九度重陽を見る」等の詩有り。平副帥時頼、師の道價を重んじ、數々招くに名藍を以てすれども就かず、久しうして師自ら往いて焉を訪ふ。副帥送迎するに弟子の禮を執り、又隨つて道を問ひ戒を受く。師、年を踰えて歸る。末後に門人懷昇を呼び來らしめて、嚀ろに遺囑し了り、偈を書

の居る處といふ義にして、即ち寺院のこと。永平は佛教初めて支那に渡來せる時の年、今、日城眞の佛法流通は道元師よりなりとの意より、名付くるに永平を以てせりと傳ふ、永平寺は越前吉田郡志比莊にあり。
② 叢規。叢林の規矩のこと。
③ 太白。一名天童山と云ふ、明州慶元府にあり。
④ 上皇。後醍醐帝なり、時に建長二年なりと云ふ。
⑤ 紫方袍。方は四角、袍は上衣、方袍は袈裟のこと、此は紫色の袈裟なり。
⑥ 永平雖山淺、敕命重重重、却被猿鶴笑、紫衣一老翁。
⑦ 西來祖道我傳東、釣月耕雲慕古風、世俗紅塵飛不到、深山雪夜草庵中。
⑧ 釣月耕雲。苦辛煩勞を厭はず、辨道修行に熱心なるをあらはす句。

⑨ 三間茅屋既風涼、鼻觀先參秋菊香、鐵眼銅睛誰辨別、越州九度見重陽。
⑩ 重陽。重九と云ふに同じ、九月九日の節句。
⑪ 踰。越に同じ。
⑫ 末後。最後の義にて、臨終をいふ。
⑬ 五十四年、照第一尺、打箇踣跳、觸破大千、嘆、渾身無處覓、活陷黃泉。
⑭ 踣跳。「はれ、えろ」の意。踣は不意に起る、跳は足を蹴つて飛ぶことなり。
⑮ 嘆。時に依つて種々の意あり。言詮不及、意路不到の玄旨を開示するに用ふ。
⑯ 臘。法臘のこと、法臘とは坐夏、戒臘、夏臘ともいひ、出家人得度の後、安居を経たか年をいふ。
⑰ 洛陽。京都のこと、支那の都

して坐化す。云く、「五十四年、第一天を照す、箇の踣跳を打して、大千を觸破す。嘆。渾身覓むるに處無し、活ながら黃泉に陥る」と。壽五十有四、臘三十有七。塔を永平に建て號して、承陽と云ふ。

永平昇禪師傳

禪師諱は懷昇、字は孤雲、洛陽の人、姓は藤、九條の相國爲通の末に出づ。幼より俗居を喜ばず。初め横川の圓能を師として、薙染圓戒し、教家の宗要を學んで聲有り。一日歎じて云く、「俱舍、成實、三論、法相の四宗は皆、有爲の學たり。止觀、淨土の二門は未だ奧玄を究めず。方に知る、是れ出世の舟航に非ざることを」と。遂に捨てて、覺安に多武峯に參じ、見性成佛の旨を問ふ。安、深く之を器とす。次で元禪師に東山に謁するに、元、一毫衆穴を穿つの因縁を擧して之を詰る。師、訥然として信伏す。遂に他遊に心無く、乃ち衣を更めて留まる。未だ幾ならずして、元、深草に移る。師、隨ひ行く。日常看窮、起居忽にせず。一日、堂に在り、展鉢の間に丁つて、忽然として領悟す。便ち威儀を具して入室。元、問ふ、「此の漢、甚邊の事をか明むるや。」師云く、「一毫を問は

になぞらへていふなり。
① 相國。百官の長、我國にては太政大臣の異稱。
② 薙染圓戒。薙髮染衣の略、圓戒は受戒といふに同じ。
③ 教家。教相家の略にして、佛法を種々に分類し分析し、文字言句に依りて説明するものをいふ。禪家に對して用ふる語。
④ 有爲の學。有爲とは種々の因縁和合に依りて作られたる現象を云ふ。無爲に對する語。
⑤ 止觀。今は天台の別稱に用ふ。
⑥ 見性成佛。見性即成佛の意にして、自己の心性を徹見し、諸法實相の常體と一致せること、即ち正覺を成じ、佛となれるところなるをいふ。
⑦ 東山。京都東山の建仁寺なり。
⑧ 訥然。無言の貌。

す、如何が是れ衆穴。元、笑つて云く、「穿了や」と。師、禮拜す。遂に乞ふて役を、衣孟に執り、一見二十年、座傍を退かず、只だ病暇一十餘日を除くのみ。一日、元、師に謂つて云く、「我れ子をして先づ寺務を執らしむるものは、法をして久住ならしめんと欲すればなり。子が歳、我れに長せりと雖も、當に能く永年にして大いに吾が宗を弘むべし。子其れ之を勉めよや」と。師、此に於て、開堂演法す。元、其の提唱を聞き、之が爲に願を解く。元、既に没す。師、席を繼いで牧衆す、晨夜寒暑、未だ嘗て懈倦の色有らず、且つ、宗教を荷負するを以て己が任となす。一衆悦服し、常に半百を墜ちす。碩臣、重宣、歸嚮、禮を修む。是に由つて洞上の一宗、蔚然として大いに振ふ。晩に法を徹通に付し、親囑し了り、偈を書して、坐逝す。師の性、素より剛硬にして苦行に堪へたり。動もすれば徒を延いて郡の中濱に出で、頭陀行化すと云ふ。

大乘介禪師傳

禪師諱は義介、字は徹通、越州の人。姓は藤、將軍利仁の遠孫なり。幼にして、懷鑿に波著に依りて師事し、淨土の三部、首楞嚴、見性義

- ① 展鉢。行鉢の時、其の鉢を展くをいふ。
- ② 忽然。「たちまち、又は「はからず」の意。
- ③ 成儀。畏敬の念を起さしむる容儀をいふ。
- ④ 入室。二義あり、一は入室猶參の意、一は入室嗣法の意なり、前者は學人を勸辨するた、師家が自分の室に學人を入る、をいひ、後者は嗣法相續のため本師の室に入るをいふ。
- ⑤ 衣孟。衣鉢と云ふに同じ、住持所有の錢財のこと。五侍者の中、衣鉢侍者の掌る所なり。
- ⑥ 開堂演法。法堂を開き諸經演法することはいふ。
- ⑦ 提唱。提要、又は提綱ともいひ、宗旨の大意を提起して説法するをいふ。又祖録を講ずることをもいふ。

等に通ず。受具の後、辭して遊方す。初め、元禪師に深草に謁す。性、剛潔にして、作務及び修禪、日常群ならず。偶々元、上堂、是法住法位、世間相常住、春色百華紅に、鷓鴣柳上に鳴く」と擧するを聞いて、忽爾として省有り。未だ幾ならずして元に隨ひ永平に移る。師、乞ふて、水頭に當り、躬ら水を八曲嶺に擔ふて、衆の爲に力を出すと年あり。元其の苦行に堪へたるを以て、差して、典座に當て、監寺を兼ねしむ。晝夜百事を照管して倦まず。間に工夫を用ふること衆人に過ぎたり。元、毎に眞の作道人と稱す。後、弊の席を永平に繼ぐに及んで、之が爲に輔佐す。一日、方丈に詣るに、弊、問ふ、「身心脱落、作廢生か會得す。」師云く、「將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡

- ⑧ 宗教。宗は「むれ」と訓じ、本家のこと、本家の教といふ意にて、經教に對して禪宗のこと。今の宗教なる語と其の意大いに異なる。
- ⑨ 碩臣。碩は大なり、碩臣は大徳ある大臣のこと。
- ⑩ 重宣。宣は官廳へ奉仕するもの、即ち官吏を云ふ、重宣は重だちたる役人のこと。
- ⑪ 蔚然。盛起の貌。
- ⑫ 坐逝。坐脱、或は坐化と同じく、坐禪しながら死するをいふ。
- ⑬ 頭陀行化。頭陀は梵語杜陀、都駄に作り、抖擻と譯す、煩惱の垢塵を抖擻するの謂なり。今は十二頭陀中の常行乞食、即ち常に乞食を以て生活し、食の好惡を擇ばざるをいふなり、行化は遊行教化の意にして、諸處を遊歴して説法教化するをいふ。
- ⑭ 懷鑿に波著に依る。越州波著寺懷鑿和尚に投じて、剃髮得度せるをいふ。
- ⑮ 淨土の三部。大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經等の三部經のこと。
- ⑯ 首楞嚴。佛所得の三昧の名なり、首楞嚴經(具には大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經)及び首楞嚴三昧經等あり。
- ⑰ 見性義。見性とは自心の佛性を徹見すること、義とは義理なり。
- ⑱ 元禪師。道元禪師のこと。
- ⑲ 作務。作業の意にて、坐禪者經等の外に、掃地採薪等の勞役に就くをいふ。
- ⑳ 修禪。坐禪を修すること、單に坐禪といふも同じ。
- ㉑ 是法住法位世間相常住。是れ俗諸常住を示せる金言にして大乘の極説、台家の眼目とす

有り。其、之を領く。尋で古今の差別因縁を以て密に研練を加へ、久しうして法を得たり。志、將に大いに宗を振はんとし、身を鯨波に横へて遠く宋地に遊ぶ。行々禪風を浙の東西に覽、其の堂室並に仲物、凡そ叢林有るべき所の者、逐一に自ら圖して歸る。其、喜び迎へて席を譲り、山門を主せしむ。師、開堂演法、大いに永平の宗風を興す。晩に加の大乘教寺を革め、禪席と爲して住す。師、居常衆に臨むこと敬嚴にして、門庭尤も高し、諸方之を仰ぎ、喚んで洞上の中興と云ふ。末後、鼓を撃つて衆に告げ、法を紹瑾に付し、及び門弟子の爲に、發心行脚の始末を説き、畢つて乃ち偈を書して云く、
①七頭八倒、九十二年、蘆華雪覆ひ、
②午夜月圓なり」と。

永光蓮禪師傳

禪師諱は紹瑾、字は瑩山、稱して佛慈禪師と云ふは、南帝の勅諭なり。越州の人、姓は鳩婆羅。兒たりし時其和尚を師として雅染す、既に介禪師の席を繼いで、永平の衆を董すに及んでは、師、介の爲に役を衣孟に執る。適々入室の次、介問ふ、「平常心、將得來や。」師、進語せんと擬す。

る所なり。法華經方便品に曰く、「是の法、法位に住すれば、世間の相常住なり、道場に於て知り已つて、導師方便を説く」と。法位とは眞如、法位に住すとは十界三千の諸法、眞如に住するをいふ。然れば眞如常住なると共に、世間相も常住なりとなり。
①鶴鳩。鶴に似て稍や大、背部は灰着色にて、棕色の斑點を有し、腹部は灰色の鳥。多くは支那の南方に産す、一名越雉といふ。
②水頭。洗面を始め其の他大衆の等しく使用する公界の水料を具辨する役名なり。
③差。差は「えらぶ」と訓す、差定の意。
④典座。六知事の一、衆僧の辨食を掌る役名。
⑤監寺。六知事の一、都寺、副寺と共に山門の事務を總監す。

介、幕口に打つ。師、茫然たり。是に於て疑情火熾なり。一夕、堂に在つて坐定す。忽ち風聲の窓に就いて過ぐるを聞いて猛省す。介、深く之を肯ふ。久しうして法を付し、遂に席を大乘に繼ぎ、超師の機を全うするもの年有り。中山を、永光に開いて居す。王臣歸嚮、化一世に盛なり。一日、門人明峰に謂つて云く、「靈山に分坐の首座あり、曹溪に分化の首座あり、今日永光が這裏又分説の首座を爲らん」と。遂に偈を以て衣法を付して云く、「永光燈下烈燄の人、劫空を照破して氣象新たなり。凸出の明峰藏匿し難し、全功轉側して全身を露す」と。自後、師、衆に對して嘗て兩片皮を鼓せず。晩に、總持の律席を革め、住して禪院と作す。久しうして院事に飽き、乃ち席を峨山に譲つて横

る役名なり。
①工夫。普通は思案工夫等と熟字して、審思熟考の義に用ひらるゝも、禪門にては精進勇猛の義となし、坐禪を專一にするをいふ。
②大波。大波のこと。
③山門。山門は寺院の總門をいへど、此は山門内の意にて、寺院中のことをいふなり。
④大乘教寺。石川縣石川郡野村に在り、東香山と號す。弘長元年富樫家尙之を建て、眞言宗澄海法印之を主せしが、弘安六年徹通和尚に譲る。
⑤中興。中興開山、又は準開山ともいふ、功勢開山に次ぎ、衰運に向へる宗旨を挽回したるの意なり。
⑥發心行脚。發心は發菩提心の略にして、佛道を求むる心、即ち自利利他の大行を修せんとする志を發起するをいふ。
行脚は本師の膝下を離れ、善友良師を尋ねて諸國を遊行し山川を跋涉するをいふ。
⑦七頭八倒、九十一年、蘆華雪覆ひ、午夜月圓。
⑧午夜。夜の十二時のこと。
⑨南帝。後村上天皇をいふ。
⑩勅諭。詔は死者生前の行跡に依りて名づくる道號のこと、「おくりな」のことなり、今は天子よりの道號なり。
⑪將得來や。俗に「持つて來たか」といふ程の意。
⑫進語。躊躇せずして發言すること。
⑬茫然。自失の貌。
⑭永光。石川縣鹿島郡餘喜村にあり、洞谷山と號す。應長元年郡人滋野信直の妻の施捨に依りて創建せらる。
⑮明峰。字は素哲、加賀富樫氏の子なり。
⑯首座。首衆、又は第一座とも

に一枝の法を分つ。師の性、素より行脚を樂み、遂に職を解き畢つて遊方し、破笠瘦藤、到る處に衆を接し、歸する者市の如し。

總持碩禪師傳

禪師諱は素碩、字は峨山、能州の人、姓は源、冷泉亞相の末なり。神性穎脫、清標拔俗、艸歲にして脱白、徑に叡嶽に上つて壇を建て具戒し、常に講席に遊んで台家の宗要を窮む。偶々瑩山禪師に東宮に謁す。山、一見して之を器とし、乃ち謂つて云く、「好箇の法器、何ぞ衣を更めて參禪せざる。」師云く、「我れに母有り、侍養を闕かんことを恐る。」山云く、「昔商那和修、一閑浮提を捨て、以て我が宗に入る。豈に瑣末の世務を將て莫大の法道を忽にせんや」と。遂に自ら直襪を脱して之を與ふ。

稱す、叢林に於て大衆の首位にあるが故に此の名あり、六頭首の一、多年通參の功成りて大事了畢の者を以て任ずる職なり。

①永光燈下烈燄人、照破劫空、氣象新、凸出明峰、難三藏匿、全功轉側露全身。

②總持の律席、石川縣鳳至郡藤比村にあり。往昔行基菩薩の草創に係り、眞言宗に屬せしを、元亨元年住僧定賢律師、寺境を擧げて紹運和尚に讓與し、諸嶽山と號したりしが、近年神奈川縣橋本郡鶴見に移して之を寺號とせり。

③素碩。一本に紹碩とあり、これ通稱なり。

④能州の人。能州羽咋郡瓜田の人なり。

⑤亞相。大納言の唐名。

⑥脱白。白衣を脱する意にて、出家するをいふ。

⑦東宮。大業寺なり。

⑧參禪。師家に就いて其の教を參問し、自ら端坐功夫し、或は問答商量すること、即ち參師問法、功夫坐禪の二種の方法を稱していふなり。但し永平門下にては、只だ坐禪を參師といふことあり。

⑨商那和修。商那迦縛波、商諸縛波に作り、自然服と譯す、印度付法藏の第三祖にして、阿羅多に受け、優婆塞多に傳ふ。

⑩一閑浮提。梵語、具には開浮提婆といふ、開浮は樹の名、提婆は洲の義、普通には南閩浮洲と稱す、往昔印度は嚮山を以て須彌山とし、其の南方なる自國を開浮提と稱し、之を以て人類の世界と考へたるなり、此は天下の位といふ意。

⑪直襪。今日の所謂「ころも」のこと。往昔は襪袴と襪子とは別のものなりしが、中世より此の二を直ちに縫ひ合せて用ひたるが故に此の名あり。

⑫時中純觀。二六時中、純一觀密の意、日夜少しの油斷もなく、純一無雜、道に親しく辛酸を嘗むるをいふ。

⑬警爾。警は物目を過ぐるをいひ、爾は語調を助くる字。警爾は俗に「ちらつ」といふ程の意。

⑭種草。植物の苗草の意にて、佛祖の慧命を嗣ぐべき人物に喩ふ。

⑮結跏坐。結跏趺坐のこと也、坐禪の儀則にして、右の足を以て左の脛の上に安じ、左の足を以て右の脛の上に安ず、次に右の手を以て左の足の上に安じ、左の掌を以て右の掌の上に安じ、兩の大指相向ひて相拄ふ、而して耳と肩と對

師、欣然として拜受す。乃ち隨つて總持に移り、時中純觀、須臾も離れず。一日、山、上堂、師、衆を出で、問ふ、「一氣不通の處、甚麼としてか道ひ難き。」山云く、「道不道」と。師、警爾として省有り。口を開かんと擬するに、山云く、「不是」と叱して退く。師、此れより志氣俊快、超邁群ならす。一夕、山、師と月を翫ぶの次、問ふ、「汝、月に兩箇有ることを識るや。」師云く、「不識。」山云く、「月に兩箇有ることを識らざるは、此れ洞上の種草に非ず」と。師、是に於て志を勵まし、歷年結跏坐して鐵幢の如くす。一日、山、堂を過ぎ、垂語して云く、「或時は伊をして揚眉瞬目ならしむるも便ち是、或時は伊をして揚眉瞬目ならしめざるも便ち是」と。師、言下に於て大悟す、乃ち威儀を具して所悟を述ぶ。山、之を肯ひ、謂つて云く、「古人旨を得るの後、南去北來、朝磨夕碎、未だ嘗て自ら慢せず。汝、今日より直に去つて諸方に徧參し來れ」と。師、即日拜辭す。到る所の叢林、渾て龍蛇を辨せずと云ふことなし。久しうして遂に歸省す。山、喜び送へて云く、「今日始めて洞上の種草と爲すに堪へたり」と。師、便ち耳を掩ふ。山、云く、「老僧力乏し、汝が隻手を借つて箇の破沙盆

を扶起せん」と。便ち法を付す。師、受け竟つて、衆を總持に牧す。叢規
鼎盛、専ら天童の嚴令に則る。未だ幾ならずして、四衆、雲の如くに歸
し、常に萬指を透して大いに洞宗を唱ふ。付法の神足二十五員、各々化
を一方に分つて、宗風遠く天下に播す。未後に、^①太源をして差して席を繼
がしめ、又通幻を呼んで囑するに宗柄を以てし、^②無端、^③大徹、^④實峰
等の諸子に分々に遺囑し訖つて、鐘を聲して、偈を説いて化す。偈に云く、
⑤「皮肉を合成す、九十一年、夜來舊に依つて、身を黃泉に横ふ」と。

永澤靈禪師傳

禪師諱は寂靈、字は通幻、洛陽の人。幼にして、孤、祖母に依つて長す。
自ら軀の世營に堪へざらんことを觀じて、徑に叡嶽に登つて披剃す。神
姿英敏、經書、目を歴るれば便ち通曉す。常に、^①止觀の法門に於て深く
之を磨研す。稍疑つて心を教外に發し、乃ち出で、峨山禪師を總持に訪ふ。
山、問ふ、「甚よるか來る。」云く、「叡嶽山。」云く、「何事をか求めんと欲す。」
云く、「我れ久しく止觀の法門を疑ふ。」山云く、「妄想すること莫れ。」師、疑
情愈々熾なり、遂に寢食を忘るゝに至る。山、其の器なるを知り、熟々

し、鼻と臍と對せしめ、正身
端坐するをいふ。
②垂語。垂示、垂誡などと略ん
ど同じ、師家、學人の爲に教
示の語を垂るゝを云ふ。
③編參。山川を跋渉して徧く天
下の善知識を參叩し、以て修
行辨道するをいふ。
④龍蛇を辨す。龍蛇は相似して而
も非なるもの、今は他の凡
聖、智慧を能く辨別すること
をいふ。
⑤鼎盛。豐盛の意。
⑥四衆。四部弟子、又は四部衆
ともいひ、比丘、比丘尼、優
婆塞、優婆夷のこと。
⑦神足。大智度論に、妙用測り
難きを神と名け、能く所依と
なるを足と爲す」とあり、智
德拔群にして、衆の頼みにな
るもの意にて、勝れたる弟
子といふ。
⑧太源。字なり、諱は宗真、加

詰るに身心脱落の因縁を以てす。師、一朝頓
悟して云く、「老和尚、人を瞞すること莫れ。」山
云く、「甚麼の道理をか見る。」云く、「倒に佛殿に
騎つて山門を出づ。」山、之を領く。自後、^①參
隨甚だ久しうして古今の因縁を會盡す。信衣
を受くるに暨んで、法を、永澤及び、^②龍泉に開
く。道望海外に重く、雲衆往來踵々として斷
えず。時に應安帝、詔を降して天下の宗柄
を賜ふ。焉に係つて洞上の一宗、規模肅然たり。
師の性極めて高尚にして人と話らず、常に一室
に處して世に和し相忘る。一日微疾あり、鐘を
鳴して衆に告げ、乃ち垂誡して云く、「諸人須
らく衆縁を屏息して、專一に己事を明めん
ことを要すべし。那邊に閑文字を、^③放下し、
這邊に浮名利を脱卻して、處に隨つて灑々落落々々

①賀佛陀寺の開山なり。
②越前祥園寺の開山なり。
③大徹。諱は宗令、肥前の人な
り、越中立川寺の開山なり。
④實峰。諱は真秀、能州の人、
備中永祥寺の開山。
⑤合。成皮肉、九十一年、夜來依
舊、横身黃泉。
⑥孤。幼にして父なきものをい
ふ、兩親なきものを稱。
⑦世營。世務經營の略、俗に「世
わたり」といふこと。
⑧經書。普通四書五經のことを
いへど、此は佛經典の意な
り。
⑨止觀の法門。止觀は摩訶止觀
の略、天台宗の所依、法門の
法は教法、門は通入の義、諸
佛の教法は衆生をして、能く
生死を脱して涅槃に入らしむ
る門なるが故に法門といふ。
今止觀の法門とは「天台の教

法」といふも同じ。
⑩頓悟。一超にして直ちに佛の
眞意を悟り、心地を開明する
をいふ。
⑪參隨。參問隨侍の意にて、師
家に隨侍して參學修行するこ
と。
⑫信衣。衣は佛衣にして製裝の
こと、傳法の信を表する爲の
製裝の意なり。即ち師より嗣
法したる證據として授けたる
製裝をいふ。
⑬永澤。兵庫縣有馬郡小野村に
在り、青原山と號す。
⑭龍泉。福井縣南條郡武生町に
あり。
⑮帝。後醍醐天皇なり。
⑯垂誡。垂示、垂誡と同じ、師
家より學人に對して示す所の
功夫辨道の用心などいふ。
⑰衆縁。吾人に對する諸の前後
のこと、諸縁といふも同じ
く、一切世間の善惡苦樂等の

たらば、汝に許す、眞に洞上の種草なることを。若し又不慙麼ならば吾が徒に非ず」と。筆を求め偈を書して云く、「閻浮來往、滿七十年、箇の轉身の處、雙脚天を踏む」と。書き訖つて、泊然として坐脱す。

最乘明禪師傳

禪師諱は慧明、字は了庵。相州の人に係る。幼にして建長に出家す。性、博大にして至理あり、見る者、^① 變縮せずと云ふことなし。偶々自ら念へらく、「參禪は、明師に遇はざれば恐らくは差別を成じ、徒らに勤苦を費さん。聞く、通幻禪師は永平の六葉、人の爲に、釘楔を抜くの力を有すと。日月、飄然たり、豈に、^② 株を守り、小岐に留まらんや」と。遂に發して永澤に過る。幻の門庭峻絶にして、來る者多くは入室を許さず、動もすれば年を歴て笠棲す。師、初めて到るに、幻、問ふ、「甚より來る。」云く、「相州。」幻云く、「路多少ぞ。」云く、「七百餘里。」幻云く、「草鞵若干底を踏破すや。」云く、「數を記せず。」幻、^③ 驀頭に打つて云く、「老僧が此の間、慙麼の飯袋子を著けず」と。師、言下に於て大悟す、便ち偈を説いて所悟を述べ。幻、^④ 印記して入室を許す、衆、愕然たり。次の日、幻、上堂して云

① 己事。自己一大事の略、見性悟道のこと。
② 那邊。は「あちら、這邊は「こちら」のこと、只だ對に用ひたるのみにて意味なし。
③ 放下脱却。放は「はなつ」と訓み、手より物を放ち捨つること、脱却は解脫の意にて、俗にいふ「もめける」こと、二語共に殆んど同義。
④ 閻浮來往、滿七十年、箇轉身處、雙脚踏天。
⑤ 轉身の處。轉は轉回の義、化を他界に遷すこと。
⑥ 泊然。私慾に薄き貌。
⑦ 博大。ひろく大いなること。
⑧ 變。懼なり。
⑨ 明師。道眼正明なる師の意。
⑩ 釘楔。釘は「くぎ」、楔は「くさび」のこと、二字共に煩悩執着に喩ふ。
⑪ 飄然。飛ぶ貌。

く、「這裏一頭の、鐵鼻牛有り、夜來、室に入つて老僧を一角す」と。下座す。乃ち師を、^① 差して第一座に處らしむ。久しうして信衣を受け、遂に相州に歸り、山を、^② 最乘に開く。足下に、^③ 大綱、^④ 無極の二同志を出し、洞上の宗風大いに東關に振ふ。毎に乗に示して云く、「諸禪子、己事を明めんと要せば、須らく七顛八倒の處に向つて薦取して始めて得べし。錯つて枯木寒灰裏に在つて死坐すること莫れ。我れ昔、先師の會中に在つて、棒下に箇の鼻孔を失卻し、今に到つて、^⑤ 摸不著」と。

大慈宗禪師傳

禪師諱は明宗、字は大綱、傳に其の氏族を失ふ。始め明了庵に最乘に謁し、便ち問ふ、「如何なるか是れ、^① 學人入頭の處。」明云く、「^② 近前

① 株を守る。轉非子に出づる故事、株を守つて免を待つことなり。昔野人田を耕し居たりしに、兎走り來り、株に觸れて死す。これを以て其の人耕を止め、毎日株を守るに、終に得ざりしといふ。臨機應變の才なく、舊習を墨守する義。
② 小岐。岐は「えだみち」のこと、教家等に喩ふる語。
③ 草鞵。草にて造つた鞵、即ち「わらじ」のこと。
④ 驀頭。驀は直と同じ、驀頭は齋口、驀地、驀然と殆んど同意にて、「まつしぐら」の意。
⑤ 飯袋子。子は助辭、只が飽食するのみにて、無爲無能なる人を、飯を入るる袋に喩ふ。人を罵る時に用ふる語。
⑥ 印記。印可と同意、師家が學人の所悟を點檢し、至當なるを認記するをいふ。
⑦ 鐵鼻牛。鐵の鼻を持てる牛のこと。其の心堅固なること鐵の如き大丈夫に喩ふ。
⑧ 差。差定にして指定の意。
⑨ 最乘。神奈川縣足柄上郡南足柄村にあり、大雄山と號す、應永元年の開創なり。
⑩ 大綱。諱は明宗、甲斐の人、初め驪山の拔隊に投じて出家し、後に慧明の法を嗣ぐ、晩年最乘寺中に大慈寺を創して閉居す。
⑪ 無極。字なり、諱は慧敬、武藏兒玉黨の後なり、俗姓は藤原氏、美濃補陀寺の開山。
⑫ 會中。會下といふと同じく、説法の會座に集まれる人々をいふ。
⑬ 摸不著。俗に「摸しあたらぬ」といふ程のこと。
⑭ 學人。佛道を參學修行する者をいふ。
⑮ 近前來。前へ集み來れといふ

來。師、纔かに近前す。明、^①托開して云く、「這裏汝が入頭の門無し。」師
起き來つて疑情頓に發し、日夕措かず。明、潛かに其の法器なるを知り、
遂に^②計し、寺法を犯すと言つて遽かに山門を追ひ出す。師、一念の恨心無
し。陰かに山下に就き^③徹屋して居す。六年の際、嘗て免を解かず、晝夜
唯だ一壁に坐す。工夫愈々綿密、遂に寢食を忘るゝに到る。一日、師、^④
牛欄に傍つて立つに、忽然として省あり。乃ち威儀を具して方丈に詣る。
明、叱して云く、「誰か汝を免して門に入らしむ。」云く、「這裏大いに入頭の
門を開く。」明、笑つて云く、「我が門、小賊の爲に破らる。」師、禮拜す。自
後左右に執侍し、日に玄奥に到る。晩に法を^⑤大慈に開くに、未だ幾なら
ずして道價遐速に聞ゆ。師、衆に臨むこと^⑥枯澹にして、一水一湯と雖も漫
りに放捨せず。躬ら米を炊ぎ、菜を擇ぶ。人、志將に衆を牧せんとする
を見て留り、常に法座を打圍する者、千指に満たすと云ふことなし。遂に
禪源を分ち一十二派を漲す。偶々^⑦微恙有り、鼓を撃つて衆に告ぐるに、
衆集る。師云く、「老僧、化緣既に畢ふ、汝等が爲に箇の遺囑を作さん」と。
拄杖を^⑧拈卓し、喝一喝して立ちながら逝く。

こと、學人の脚下點檢の際多
く此の語あり。
① 托開。胸を把りつめて、つき
放すこと。
② 計す。計略を以て陥入るるな
いふ。
③ 徹屋。借家すること。
④ 牛欄。牛小屋なり。
⑤ 大慈。神奈川縣足柄上郡南足
柄村に在り。
⑥ 枯澹。質素澹白なること。
⑦ 微恙。一寸した病氣のこと。
⑧ 化緣。衆生教化の因縁のこと。
⑨ 拈卓。つツ立てること。
⑩ 生緣。人は因縁に依りて生
る、此の生緣とは生れる因縁
を持ちたる土地をいふ。
⑪ 年志學。十五歳を云ふ。論語
に、「子曰、吾十有五、而志
于學。」
⑫ 承當。自ら會得領悟するをい
ふ。
⑬ 疊炊。飯を焚くこと。

最乘琛禪師傳

禪師諱は宗琛、字は吾實、甚許の^①生緣と云ふことを知らず。人と爲り
至性卓識、言必ず異あり。^②年志學ばかり、志、參禪に篤し。時々大綱禪
師に大慈に依つて遊び、毎に發問するに一大事を以てす。綱、都て答へず。
唯だ道ふ、「自ら^③承當し去れ」と。五七載の際、別に開論無し。一朝、師、
家に在つて掃除し、忽ち箒柄の石に觸れて折るゝに因つて省有り。直に去
つて綱に告ぐ。綱、之を領く。遂に脱白受具して役を^④疊炊に執り、日常
純眞、脇、席に至らず。一日、綱、^⑤庫下を過ぎ、師の米を洗つて鍋に投
ずるを見、乃ち問ふ、「鍋は是れ鐵作、飯は是れ米成、未審し、其邊の事を
か明む。」師云く、「鍋は他の鐵作に任せ、飯は他の米成に任せ」と。便ち水
を將つて地上に洒ぐ。綱、深く之を肯ふ。乃ち爲に印記して云く、「吾が宗、
汝に到つて興らん、容易に説くこと勿れ」と。便ち衣法を付す。師、俛仰
して受け去る。後、法を最勝に開き、大いに洞宗を唱ふ。師、上堂して云
く、「南林の竹、北地の木、東園の菜、西田の麥、是れ^⑥衲僧家眞活計の處
なり。汝等諸人作麼生か己事を明め去らん。」良久して云く、「只だ^⑦長連

① 庫下、庫院、庫裏等に同じ、
庫は物を貯藏する處、庫下は
寺院の厨房をいふなり、大寺
院には大庫裏、小庫裏の別あ
り、大庫裏は本尊の佛庫、小
庫裏は住僧の時食を調辨する
處、今時は僧房、廚房を并稱
して庫下といふ。
② 衲僧家。衲家といふも同じ、
衲は補綴の義にして、衲衣を
著せる僧を衲僧と云ひ、衲僧
の特稱なり。
③ 長連床。僧坐禪の床、長く
床を連れて衆僧の被位となす
が故に此の名あり。
④ 直下。其の儘にの意、又當下
と同じく直ちにの意に用ふ。
⑤ 痛語。「は」となり。
⑥ 呵々大笑。呵は笑ふ聲なり、
笑ふ時「あは、あは」といふ
に同じ。
⑦ 圓南。大業を成さんと企つる
を云ふ、莊子に出づ。

床上に向つて足を伸べ、安眠して。直下に須らく無事にし去るべし。若し是れ眼を開いて、寤語する底の漢有らば、老僧爲に三十棒を與へん。時に雲岫、衆を出で、云く、「和尚早く一頓を喫し了れり」と。師、呵々大笑して下座す。

廣嚴龍禪師傳

禪師諱は宗龍、字は雲岫、雲州の人。家、世々神職を以て富む。兒たりし時、父に隨つて田畦を過ぐ。偶々蛙の死したるを看、乃ち父に問うて云く、「蛙何ぞ躍ることを得ざる。」父云く、「既に死せり。」云く、「人も亦死すること有りや。」父云く、「有り。」云く、「如何ぞ免れ得ん。」父云く、「我れ聞く、佛法を悟る者、免るゝことを得ると。」云く、「兒が心、佛法を悟らんことを欲す、如何ぞ悟ることを得ん。」父、之を異なりとす。乃ち念はく、「此の兒凡ならず、志、奪ふべからず」と。遂に鰐淵寺に投じて出家せしむ。年未だ志學に登らず、圖南に志有り、乃ち發して諸方に參決す。後、瓌禪師に最勝に謁す。機語相契ひ、璨容るゝに、第二座の職を以てす。參隨年有り、密に心印を得。晩に山を、廣嚴に開き、洞家の正脈連環として

①機語。神機の語句。大明錄に云く、「文義俱に明かなる者之を理と謂ひ、言を忘じ獨り契ふ者之を機と謂ふ」と。山居雜錄に「機語相投じて入室を容す」と云へり。

②第二座。今は六頭首の中の書記を第二座といふ。

③廣嚴。山梨縣東八代郡御代咲村にあり、妙龜山と號す。

④四種の賓主。これ臨濟の創説する所にして、本來の意義は賓は學人、主は師家、この兩者相對したる時の態容を四種に分類したるものなれども、此は之を正偏にあてはめて説明せるなり、而して其の説明に依るに、其の内容は四種の賓主(賓中主、主中賓、賓中賓、主中主)といはんよりは、同じく臨濟創始の四料簡(奪人不奪境、奪境不奪人、人境兩俱奪、人境俱不奪)に近き。

誤らす。一夕、門人文英を呼びて入室せしめ、乃ち囑して云く、「我が道は四種の賓主を以て傳ふ。或時は正、或時は偏、或時は偏正雙明、或時は偏正雙泯」と。便ち手を以て空に向ひ、一點して云く、「此の一點、偏に非ず正に非ず、從上の佛祖總に摸不着。汝向後破芽の頭を蓋ふ有らば、須らく容易に人を得ること莫るべし。老僧久しからず」と。遂に衣法を付す。便ち偈を書して疾を告ぐ。三日にして終ふ。

天寧英禪師傳

禪師諱は文英、字は一華。初め雲岫禪師に廣嚴に謁す。岫、一見して潛かに法器を知り、差して炊爨に著かしむ。師、日用純篤なり。一日岫、庫房を過ぐるに、師の孤り菜を擇るに逢ふ。岫云く、「汝、此に在ること多少時ぞ。」云く、「一年餘。」岫云く、「菜を擇び米を洗ふの外甚麼の所務か有る。」云く、「力めて工夫を用ふ。」岫云く、「工夫甚麼の事をか圖る。」云く、「作佛を欲す。」岫云く、「作佛甚麼の用處ぞ。」師、茫然たり。岫、便ち摩頂して云く、「眞の擇菜の漢子」と。師、是に於て心憤し、志を勵して日夕寝ねす。偶々岫、上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ衲僧出身の處ぞ。」岫云

如し。

①從上。これまでと云ふ意。

②庫房。庫院、庫裏、庫下といふに同じ。

③作佛。成佛といふに同じ、佛になること、即ち佛の悟を開くことなり。

④摩頂。頭をなでること。

⑤眞の擇菜の漢子。漢子は人を輕蔑せる時の呼稱、子は勸字、胡人が支那の中國の人を罵り稱したるに始まる。眞の擇菜の漢子とは「本當の菜よりの小僧」といふ程の意にて、迷悟取捨等の二見に拘はるものに擬していふなり。

⑥柳絮。柳樹に生ずる花の如きものにして、春の頃に亂れ飛ぶ。

⑦大事了畢。一大事因緣を悟り畢りたる事、即ち大悟徹底せること。

⑧參請。參問し請益すること、

く、「風、柳絮を吹いて毛毬走り、雨、梨華を打つて黃蝶飛ぶ」と。師、傍に在つて脱然たり。晩に到り、威儀を具して方丈に詣る。岫云く、「箇の擇菜の漢子、大事了畢せり」と。師、禮拜す。自後左右に隨侍し、心を極めて參請す。遂に岫の歿するに到つて山を天寧に開く。一僧あり、來り參す。便ち問ふ、「如何なるか是れ 和尚の家風。」云く、「禪影雙肩竹の如くに瘦せ、道心一片松と與に閑なり。」僧云く、「乍ち客有つて來る時如何。」云く、「破瓶茶熟す、君須らく喫すべし、寒竈、香空しうして我れ炊くに懶し」と。師、人と爲り朴篤、偉修を喜ばす。清標孤操、攀づべからず。

萬松健禪師傳

禪師諱は高健、字は無敵、甚許の人なるかを知らず。偶々英禪師を天寧に訪ふ。英、師の朴實を愛し、機語針芥の相投するが如し。師、乃ち留つて堂に歸し、自ら一錫と一鉢とを束ね、高く壁上に掛けて坐す。二時の粥飯、大小便利の外、未だ嘗て單を下らさず。冬夏唯だ一衲を著け、寒暑と雖も、絶えて増減せず。一住二十年、宛も一日の如し。一夕、英、師を呼び來り、法衣を拈出して云く、「者箇は雲岫老人底、我れ彼に在つ

學人が師家に隨侍して尋問を發し、師家の提撕を受くることなり。

和尚。梵語に烏菴陀耶、親教師、力生等と譯す、阿闍梨と共に授戒の師たるものの稱なりしが、中古以來單に高僧の尊稱に用ふ。

家風。一家の風儀のこと。

道心。菩提心のこと、即ち佛道を修行して佛果を得んとする心ないふ。

二時。朝及び晝なり。

單。單位の略、僧堂の坐位のこと、單は名單の義。

那寒海。那は盛、大なり、海は濕氣多く蒸し曇きを云ふ、極寒極暑のことをいふ。

者箇。這箇と同じく、「この」の意なり。

恁麼人。斯の如き人といふ義にて大事了畢の人をいふ、那人といふも同じ。

没踪跡。没蹤跡に同じ、没は絶なり無なり、痕跡なきこと、恰も世人に知られぬやうにすること。

道人。出家して佛道を吾身に體得したる人。

遷代。かはるゝなり。

卓庵は庵室を構ふるを云ふ。

樓。高峻の貌。

密從。來ニ草屋、未ニ日望ニ人煙、當ニ午拾ニ林葉、向ニ宵烹ニ澗泉、覆ニ雲寒納厚、擁ニ葉古林禪、檐外青黃色、令吾知一年。

已躬下の事。脚下の一大事といふも同じ、佛道のことをいふ。

宗匠。宗師と同意。

著。意味を強める助辭。

善知識。智徳業に優れて能く人を教ふるの力ある人ないふ、此は即ち三種の善知識の中、教授の善知識をいふなり。

て衆の爲に、菜を擇び米を洗ふを以て傳へ得たり。老僧、時迫れり、汝に付せんと欲す、得てんや否や。云く、「某、恁麼人に非ず。」英云く、「我れ汝が恁麼人に非ざることを貴ぶ。今日より直に去つて没踪跡の處に向つて箇の道人を撰出し、遷代流傳して我が法を斷絶せしむること莫れ」と。遂に付す。師唯然す。自後庵を士山の麓に卓して居し、號して萬松と云ふ。世路を棧絶して、足、閫を越えざるもの又二十年、乃ち「嚮に草屋に來りしより、又未だ目をもつて人煙を望まず。午に當つて林葉を拾ひ、宵に向はんとして澗泉を烹る。雲を綴つて寒衲厚く、葉を擁して古林禪かなり。檐外青黃色、吾れをして一年を知らしむ」の詩有り。晩に法を英祐に付し畢つて、乃ち庵を焼いて去る。其の所在を知る者無し。

長安祐禪師傳

禪師諱は英祐、自ら受天民と稱す。豊の後州の人なり。卅歲にして出家し、常に己躬下の事を以て念と爲す。年志學ばかりに、出で遊方し、到る所の叢林偉異を以て稱す。凡そ三十餘員の宗匠に參じ、僉其の風骨を詣んす。一日、道、駿州を過ぐるに、偶々健禪師の士山の下に庵する

を聞き、師、念へらく、「凡そ僧の行脚する者は、明師に逢はんことを欲すればなり。何ぞ尋訪を憚らんや」と。乃ち徑に就いて參尋す。急水灘頭、枯木巖前、難行数十里ばかりにして到る。健、師の到るを見、面壁して坐定す。師、背に就いて拜訟して云く、「弟子数十里、特に來つて和尚を禮す、請ふ、慈悲我が爲に面せよ。著、健、顧みず。師云く、「若し面せずんば和尚を打殺せん。」健、又顧みず。師、既に眞の善知識なることを知り、乃ち心計し、復子を挿んで出で去る。門外より密に歸り、纔かに牆壁を隔て、黙して出定を窺ふ。健、其の計に墮することを知らず、漸く起つて門を出づ。師、乍ち牆邊より出づ。健、愕然として走り入る。師、後を追つて便ち問ふ、「如何なるか是れ山中の佛法。」健云く、「溪頭溪尾水猶ほ水、庵南庵北山也た山。」師、脱然として信服す。乃ち威儀を具して禮拜す。誓つて左右に侍し、汲水採菓、日夕親給、已に十二載を経。一日、健、師に謂つて云く、「我れに破綻の衣有り、重きこと千斤。汝、若し荷負せんと欲せば、須らく力を腕頭に全うして始めて得べし。老僧既に往かん、且く持ち去れ」と。遂に付す。師、涙を落して拜受す。晚に一檀那の堅く

①復子。復は襪なり、包袱をいふ、子は助辭、俗にいふ「風呂敷」なり、雲水僧は行脚の時、自己の行李物を復子に包みて背負うて行く、これより雲水僧の荷物を復子といふ。
②出定。定は禪定なり、禪定より出づることにて、坐禪より起つをいふ。
③破綻。綻は「ほころぶ」と訓ず、やぶれほころびたるをいふ。
④荷負。荷は「になふ」と訓ず、負擔といふに同じ。
⑤檀那。梵語、施と譯す、此は施主のこと。
⑥江湖。江は支那揚子江を指し、湖は洞庭湖を指す。此は諸方の意。
⑦了日。大事了畢の日の意。
⑧受業。業は佛道を行ふ作業の義、弟子が師より親しく道業を受くるをいふ。得度の師を

請するに因り、山を長安に開いて居す。諸方歸する者雲の如し。毎に衆に示して云く、「參禪は須らく明師に逢ふことを要すべし。已に明師に逢ふことを得ば、又須らく心を一處に制して、年久しく月深からんことを要すべし。漫りに軟暖に便し、草鞵を破つて、江湖に來往せば、甚年か了日有らん」と。

東長湖禪師傳

禪師諱は玄朔、字は龍湫。其の生緣暨び受業を記せず。遍歴の際、禪師の道望を聞き、特に來つて禮謁す。祐、差して巾瓶に侍せしむ。日常勤篤にして參窮忽にせず。一日、祐試むるに牛過窓樞の話を以てす。師、茫然たり。祐云く、「恁麼に參禪せば徒らに飯錢を費すのみ」と。師、是に於て志を勵し、時中憤々として心未だ穩かならず。乃ち佛前に詣り、誓つて云く、「大事未だ明めずんば絶えて飲食せず」と。既に唇を沾さざるもの一句餘。偶々同行の僧の永平語録を讀むを聞き、「赤心片々誰か知得せん、笑殺す黃梅路上の兒」といふに至つて、忽然として大悟す。自後、祐の左右を離れず、遂に席を長安に繼ぐ。一衆悅服す、道行を以て世

「受業の師」といふ。
①遍歴。遍參歴遊の意。
②巾瓶に侍す。巾は手巾、瓶は水瓶にて、師の側に侍し、手巾水瓶を捧げて事へることをいふ。
③牛過窓樞の話。五祖演、佛眼遠に示して曰く、譬へば水牯牛の窓樞を過ぐるが如し、頭角四蹄都て過ぎ了る、其麼に因つてか尾巴過ぐるを得ざる。檀傳燈錄五祖章、宗門裏藤集上に出づ。
④同行の僧。志を同じくして修行を共にする人をいふ、同參といふも同じ。
⑤赤心片々。赤は空の義にて少しもいつはりなき心、即ち「まごころ」といふこと、赤心の分明なるをいふ。
⑥一に多種あり、二に兩般なし。法の本體は平等差別を超越せるをいふ。一は一味平等

に重んぜらる。師、上堂して云く、「一に多種有り、二に兩般無し、中間の句子如何が算へ去らん。去年の年險は米も無く麥も無し、今歳の歳豊は菜も有り菓も有り」と。下座す。晩に山を東長に開いて移るに、檀護衆服、宛も長安の時の如し。

安國播禪師傳

禪師諱は全播、字は天蒼、信州海野氏の家に生る。幼にして穩仁、笑を以て常となす。生れて啼哭の聲を聞かす、又言ふことなし。郷人喚んで啞子と作す。偶々佛像を看るに因つて、始めて言ふこと有り、父母喜躍して、問うて云く、「爾既に能く言ふ、往年奚ぞ默然として過ぎし。」云く、「兒日用應對の談を聞くに、多くは是れ流俗の鄙事なり。是を以て言はざるのみ」と。父母驚異す。遂に聽して出家せしむ。凡そ南遊の際、僉宿徳を以て之を重んず。適々朔禪師を長安に訪ふ。朔、一見して乃ち其の生知を知り、一句の辨驗を須たすして、差して第一座に處らしむ。一夕、朔、師を喚び來らしめて、謂つて云く、「老僧疾有り、起つべからず、箇の歿を以て傳へて汝に及ばさん」と。遂に衣法を付し、竟つて乃ち逝く。師、已

の體、多種は千差萬別の相、二は差別の相、無兩般は平等の體をいふ。法の本體は平等即差別、差別即平等にして、高き一異の名相を絶す、此の意的を了知する時は、物々全眞、頭々是れ道なることを得るなり。
①啞子。おし、口のきけぬものをいふ。
②宿徳。宿は善宿、徳は有徳の義。
③生知。生れながらに知ることを、聖人は生知安行なりといふ、中庸に出づる語。
④頂相。上半身の肖像畫のこと。
⑤函丈。方丈に同じ。類書纂要の叙に、「師、席を別つて拜遠函丈といふ、函は容なり、凡そ講問の席間に一丈の地を容し、其の解説に便にして以て指畫に足ることを欲するなり」とあり。
⑥莽年。滿一ヶ年なり。
⑦心願。結願。方十年、一茅初結得。安師、開爐少附。濕薪火、誤莫。揚。麓。出。我。煙。
⑧結。結は弓を包む章蓋、轉じて「つむむ」の義に用ふべく、らましかくることなり。
⑨安禪。安らかに坐禪をする意なり、又坐禪を直ちに安禪といふことあり。
⑩兒稚。幼者、「ちのみ」のこと。

むこと能はず、席を繼いで住す。未だ嘗て自位を正さず、先師の頂相を函丈に設け、朝夕諸衆と同じく作禮す。莽年に至つて始めて止む。此に係つて徒衆、大いに服し、經遊の者連環として絶えず。師、毎に院事を謝せんことを念ひ、遂に席を懷州に繼がしめて遁る。晩に山を安國に開き、以て終老の地と爲す。便ち「心、箱藏を願つて方に十年、一茅初めて結んで安禪を得たり。爐を開いて少しく濕薪の火を附く、誤つて簾を揚げて我が煙を出すこと莫れ」の詩有り。

高照禪師傳

禪師諱は周潭、字は懷州、兒稚より朔禪師に長安に依つて薙染し、乃ち師事す。朔、歿して後、又繼いで、役を衣孟に天蒼に執り、凡そ二師に侍すること三十餘歳、深く已躬下の事を窮む。蒼、常に眞の出家兒と稱す。偶々蒼、茶話の序、衆に示して云く、「佛法は生怨家の如く、汝近傍の處無し。箇の中、箇の漢有り、出で來つて冤を棒頭に結ばば、老僧箇の臭布棍を與へて住院し去らしめん。」師、衆を出で、云く、「人々盡く衝天の志有り、寧ろ如來の行處に向つて行かん」と。便ち拂袖して出で去

①衣孟。衣は三衣、孟は鉢孟、衣鉢といふに同じ、蓋し僧の錦帛類をいふ、これ衣鉢侍者の掌る所なり。
②生怨家。生冤家に同じ、怨は「うらみ」と訓む、怨敵の義、生は熟の反對にて新の義、新しき讎敵、例へば父母の敵讎の如きをいふ。
③臭布棍。棍は棒に同じ、ふん

る。翁、左右に指して云く、「渠が志氣に非ずんば、争か老僧が臭布棍を得ん。久しうして法を得、長安に出世す。師、人と爲り極めて嚴正、凛々として馴近すべからず。偶々、寺範を犯す者有れば、力めて之を擯く。嘗て云く、「幸に先師我をして此の院に主せしむ、豈に敢て放蕩を以て樂と爲さんや」と。聞者、悚然たり。晩年に法を續翁に付し、西堂に退休す。遂に山を高照に開いて叢規専ら長安に則る。

龍江傳禪師傳

禪師諱は宗傳、字は續翁、奥州の人に係る。其の姓氏暨び剃度受業を失す。人と爲り強直にして言行甚だ鄙し。到る所の叢林、喚んで傳野夫と稱す。性、極めて聰敏にして好んで詩文を能くす、人以て知ることなし。一日遊方して道、鎌倉を過ぎ、偶々建長寺に到る。諸徒、師の鄙野なるを見て失笑戲言す、乃ち高吟自得、傍に人無きが若し。漫りに一律を書して師をして之を目せしむ。師、目竟つて便ち知る、詩句漸く成つて、清味未だ熟せざることを。卒に三律を賦して之に答ふ。諸徒、愕乎として節を擊つに及ばず、乃ち座を避けて去る。後、潭禪師に長安に謁す。潭、試みるに、「僧、雲門に問ふ、「不起一念、卻つて過有りや也た否や。」門云く、「須彌山」と云ふを以てし、師をして下語せしむ。凡そ七八轉契はず、潭、垂誡して云く、「佛法は識情の所通に非ず、豈に汝が意根下に向つてト度して、珍言華句、以て相答ふることを容れんや。若し實に此の段の大事を會せんと欲せば、須らく汝が聰敏學得を放下して始めて得べし」と。師是に於て勵志、従前の學得、文字、冊子等を以て一時に燒卻し、心を極めて參窮す。已に兩月を經、手舞ひ足踏むことを覺えざるに到る。一夕堂に在つて、經行、忽ち頭を以て露柱に撞著して大悟し、直に方丈に奔る。潭云く、「傳野夫、大事了畢せり」と。師、禮拜す。住後、衆に示して云く、「我れ先師の會中に在つて、頭を以て露柱に撞著してより、直に今に至るまで痛未だ已ます」と。晩に山を龍江及び最福に開き、横に二枝の法を出す。

長安播禪師傳

禪師諱は要播、字は亘天、總の上州平氏の家に出づ。神性清逸、絶えて俗塵と和し侶はず。日常、閑窓に坐し、噓然として樂しむ。父母携へて郡

どしのことなれど、此は強姿を斯くさげしみていふ。
①如來。佛十號の一、梵語、多陀阿伽度の譯、如は眞如の義、即ち眞如より現はれ來れる覺者の義、又如去來來の義にして、如々不動にして、娑婆世界に來り、衆生の根機に應動するが故に如來といふともあり。
②寺範。範は規範の義、即ち寺の規則をいふ。
③悚然。おそるゝ貌。
④西堂。西座ともいふ、西は實位なるが故に、前住人此處に居るなり。
⑤節を擊つ。拍子をとること。
⑥須彌山。梵に須彌樓、妙高山と譯す、印度の古説に依れば、一世界の中央に須彌山あり、周圍に七金山八海を有し、一切の生類皆これに依りて生成し、日月諸天また之に依りて回轉すといふ。

依りて回轉すといふ。
②下語。古則公案、又は須古、垂示、上堂等の法語に對して、自己の見解を呈露するたに語を下すをいふ。
③識情。凡夫の情識分別をいふ。
④意根下。意根は六根の一、又は意界、意根界ともいふ。
⑤ト度。「うらなひはかる」と、凡夫の情識を以て是非善惡等を分別思慮するをいふ。
⑥經行。坐禪の時、坐風を防ぐため、或は睡眠を除くために、僧堂内の單間を一定の時間、徐ろに歩むをいふ。
⑦露柱。法堂、佛殿等にある丸柱のこと。
⑧閑窓。閑は「しづか」と訓す。噓然。噓は息を緩くはくこと、平靜の貌。
⑨教寺。禪院に對して云ふ語、五時八教等の教相判釋を宗と

の 教寺に投じ、聽許して出家せしむ。學、顯密の宗要に通じ、憶談甚だ遠く、到る處講經を以て重んぜらる。一日、禪者の義を詰るに逢ひ、乃ち悔いて心を禪觀に改め、遂に遊歴して洞濟の叢社に容りたり。凡そ一百餘處の禪關を扣き、終後に續翁に長安に參す。翁、師の漸く門に入るを見、颯聲に一喝に喝出す。師、頓足して倒る。纔かに起立するに當つて豁然として大悟す。便ち偈を説いて云く、
④ 虚空一聲喝、驀地に死屍活す。衲僧入頭の門、觸處盡く通達。翁、爲に印記す、焉に因つて衣を更む。影響一十七年、日に玄奥に到る。後、翁の席を龍江に移すに及んで、合寺の耆德等、諸の護法と同じく、師を請じて席を補はしむ。師、未練を以て辭す。之に逼るに再三するに及んで始めて應ず。志將に衆を牧せんとする者、毎に超師の作有り。師、上堂して云く、「金鷄鐵卵を生じ、石牛玉兒を懷く。這の裏消息有り、幾人か眞機を發す」と。下座す。

長安龍禪師傳

禪師諱は神龍、自ら大雲子と號す。出處を知る者無し。人と爲り高尚にする寺の意にして、禪宗以外の寺を總稱す。

① 顯密。顯教と密教にして、佛教全體といふも同じ。
② 禪者。禪人と同じく、禪を修する人をいふ。
③ 叢社。叢林と云ふに同じ。
④ 頓足。足をばたきするのと。
⑤ 虚空一聲喝、驀地死屍活、衲僧入頭門、觸處盡く通達。
⑥ 驀地。地は助字、「ちきに」と云ふ程の意、驀然に同じ。
⑦ 未練。「未だ練れず」といふことにて、修行未だ足らずの意なり。
⑧ 作。作略、作用の意。
⑨ 眞機。眞實の妙機の意。
⑩ 大言。大言壯語のこと。
⑪ 挂搭。挂は錫杖を掛け、搭は鉢盂を搭ぐるの略にて、叢林僧堂に安居するをいふ。
⑫ 年不惑。四十歳を云ふ。

して口の大言を以て樂しむ。所到の處、衆の爲に惡み去られすと云ふことなし。凡そ過ぐる所二十餘院、僉挂搭を求むれども容さず。偶々年不惑許りに、始めて播禪師を長安に訪ふ。播、一見して師の志氣を知り、乃ち容して挂搭せしむ。趙州、婆子を勘するの因縁を擧げて試む。師、播の志、將に衆を牧せんとするを觀て、深く信服す。他遊に心せず、敬を盡して參窮す、脇席に至らざること年有り。一日、普請して柴を搬び、力を極めて擔を擧ぐるに因つて猛省す。急に方丈に走つて播に告ぐ。播、爲に印記す、乃ち法を付し寺務を主らしむ。未だ幾ならざるに檀護衆服、先師に一倍せり。其の田園を添へ其の堂宇を新にし、以て大いに長安の道場を興す。毎に衆に示して云く、「佛法は正師の鉗鎚に遇ふことを貴ぶ。我れ一たび先師の示誨を聞いて、口耳共に喪し、直に今に至つて、冷湫湫地なり。汝等諸人容易に年を山中に算すること勿れ。」晩に法を門人に付し畢つて、衆を辭し出で去り、終に所在を失す。今現に富川に塔するものは、後人其の徳を重んじて、權に設けて以て供養すと云ふ。

長安壽禪師傳

① 趙州婆子を勘する因縁。從容錄第十則に、臺山路上に一婆子あり。凡そ僧有り、臺山路什麼の處に向つて去ると問はゞ、婆子云く、驀直去。僧纔に行く。婆云く、好箇の阿師、又恁麼にして去れり。僧、趙州に擧示す。州云く、待て爲に勘過せん。州、亦前の如く問ふ。來日に至つて上堂に云く、我れ汝が爲に婆子を勘破し了れり」とあり。趙州は從諗禪師のこと、臺山は五台山のこと。
② 普請。大衆を普く請じて勞役作務すること。
③ 堂宇。宇は家屋のこと、専ら寺院のことに用ふ。
④ 鉗鎚。鉗は金を挟むもの、鎚は金鎚のこと、鍛冶屋が鐵を鍛へるには、鐵を火に焼いて金挟みにて之を挟み、金臺の上に載せ、金鎚を以て打つて

禪師諱は譽壽、字は齡山、房州の人。幼にして長安に離塵し、播禪師に隨つて薙髮圓戒す。性、極めて聰敏にして好んで看讀を事とし、博く内外の典籍を窮む。一朝自ら歎じて云く、「出家は成佛を以て本と爲す、我れ其人ぞや、漫りに看讀を事とせば、典籍盡すべからず。」是に於て専ら禪觀に心有り、乃ち辭して諸方に參決す。又歎じて云く、「師を尋ねて遊歴すること天下大半、徒らに心力を勞して、行脚甚の功か之れ有らん」と。乃ち還る。播問ふ、「汝此を離れて幾許年ぞ。」云く、「十年餘。」播云く、「甚の處にか往來する。」云く、「天下半なり。」播云く、「甚邊の事をか明め得たる。」師、無對。播云く、「我れに草屨錢を還し來れ。」師、忽然として省有り。自後應用無事にして、時中廢無し。偶々播の神龍をして席を補はしむるに到り、師、龍の爲に記室を典り、十年其の職を改めず。一日、龍、師に謂つて云く、「老僧、先師の爲に歿せらるるを以て、確乎として此の院に老いたり。汝又我に歿せられて須らく命を此に終るべし」と。遂に法を付して出で去る。是に於て檀越及び耆德等、力を協せて師を延く。師、素より孤操有り、攀づべからず。凡そ經遊の者、年を踰ゆれども馴れ近づく

設へるなり。此は師家が學人を嚴練する手段に喩ふ。
冷湫々地。湫は「さまし」と訓す。地は助字、湫々地は冷の形容詞、煩惱の熱氣一點も無く、寒潭死水の如くなるをいふ。
離塵。俗塵を離るゝの意にて、出家するをいふなり。
内外の典籍。内道、外道の典籍のこと、内道は佛教、外道は佛教外、例へば儒教などを指す。
參決。參問、決擇の意、諸處の知識に參問して、疑義を決擇するをいふ。
草屨錢。草鞋錢に同じ、俗に「わらぢ」を穿かざるべからず、その「わらぢ」を買ふ錢のことなり。
記室。書記のこと、此は就中

こと能はず。末後に衆を集めて垂誡して、乃ち偈を書して坐化す。偈に云く、「夜眠日走、五十六年、眼目を瞎する處、箇の大禪を得たり。」

長安悅禪師傳

禪師諱は田悅、字は長巖、其の郷黨を詳かにせず。卯歲にして長安に脱白し、乃ち播禪師に師事す。性、素より枯淡にして、志、頭陀を好み、柴を搬び水を汲み、米を乞ひ炭を化し、凡そ二十年の際、苦行衆に抜く。播、常に稱して再來の頭陀と云ふ。後播の神龍をして席を繼がしむるに至り、師、龍の爲に典座と作る、苦行舊の如し。一日、龍、庫下を過ぐるに、偶々師の躬ら米を滴ふに逢ふ。便ち問ふ、「米裏甚麼の塵埃ぞ。」云く、「糟粕無盡。」龍云く、「既に是れ無盡、何ぞ故に滴ふことを得ん。」師、聞いて脱然として立つ。時に壽書記、龍の傍に侍し、云く、「悅典座始めて米を滴ふことを得」と。師、言下に於て頓悟す。偈を説いて云く、「多年有垢を滴ふて、今日無塵に到る、斗上滿量の米、看來れば本精神」と。龍、欣然として云く、「汝が師は壽兄なり、後來副貳轉化して、須らく吾が宗を興すべし。」又龍の壽書記をして、位を函丈に正さしむるに因つて、師、

内記即ち書狀侍者のこと、住持往復の書狀等を掌る役なり。
① 確。石多く堅き貌、即ち停住不動のことなり。
② 夜眠日走、五十六年、瞎眼目。處、得二箇大禪。
③ 頭陀。梵語、譯して抖擻といふ、煩惱の垢塵を抖擻するの意なり。十二頭陀と稱し、種種の苦行をなすが故に、苦行の意にも用ふ、此は即ち苦行の意なり。
④ 頭陀。此は迦葉を指す、迦葉は能く頭陀行を行ひ、頭陀第一とも稱せらるゝ程なるが故に、迦葉の異稱として用ふるなり。
⑤ 典座。六知事の一、大衆の齋粥を司る役なり、但し典は「つかさどる」と訓み、座は座位なれば、元典座は床座を典る職の名なりしも、中頃に變

命を奉じて第一座に居す。久しうして長安に出世す。開堂拈香、的かに壽禪師の法乳に酬ゆ。

長安承禪師傳

禪師諱は田承、喚んで嫡宗と云ふは衆中の讚稱なり。傳に甚許の生緣かを記さず。始めて悅禪師に長安に參す、便ち問ふ、「如何なるか是れ學人用心の處。」悅、兩手を展開して云く、「請ふ心を持ち來れ。」師、茫然たり。悅、曇面に一掌して云く、「那箇の心をか用ひんと要する。」師、言下に旨を領す。乃ち拄杖を踏折して一住十九年、篤爾として足闔を越えず。乃ち千里師を尋ねて富川に到る、用心處無し始めて安禪、知らず幾箇か蒲團の破るゝことを、一住方に休す十九年」の偈有り。悅、常に左右に謂つて云く、「承は我が嫡宗」と。故に衆中嫡宗を以て稱す。悅、歿して後、諸の護法、師を請じて席を補はしむ。師、薄慧を以て辭す。之を再三するに「承は我が嫡宗」の語を以てす。師、落涙して又辭するに及ばず、乃ち先師の頂相を方丈に設け、朝拜夕揖、宛も生けるに事ふるが如し。自ら偏位に住して身を終るに至る。

- ① 多年滿三有垢、今日到三無塵、斗上滿量米、看來本精神。
- ② 斗上。斗は量器の總稱、「ます」のことなり。
- ③ 欣然。喜ぶ貌。
- ④ 副貳。輔佐の意。
- ⑤ 篤爾。志篤き貌。
- ⑥ 千里尋師到富川、用心無處始安禪、不知幾箇蒲團破、一住方休十九年。
- ⑦ 嫡宗。嫡は「よつぎ」と訓す、正系又は正統の意なり。
- ⑧ 偏位。賓位といふがごとし、終身謙遜して主位に坐せざることをいふ。
- ⑨ 童年。幼時といふに同じ、童は未冠の男女をいふ。
- ⑩ 無羈の客。無羈は束縛せられざること、客は「ひと」と訓す、人に同じ。
- ⑪ 法話。佛法の説話の意。

金龍適禪師傳

禪師諱は僊適、自ら古山人と稱す、武州の人なり。童年にして出家す。人と爲り偉博にして眼以て人を蓋ふ。自ら念へらく、「僧は無羈の客、豈に古株を守つて空しく小岐に留らんや」と。遂に關南の志を募つて、出でて東關の諸名利に遊ぶ。凡そ到る所の叢林、法話を以て其の坐を傾けすと云ふこと無し。人、指目して飽參と爲す。末後に承禪師に長安に謁す、赤脚露頂、米を舂き園を鋤くこと二十年、一節にして移らず。一日、承の陸堂して、「達磨東土に來らず、二祖西天に往かず、箇の中銀山鐵壁、春來れば鳥啼き華笑ふ」と擧するを聞いて、忽爾として省有り。直に方丈に詣つて印記を請ふ。承問ふ、「後來人有つて洞上の宗乘を問はゞ、甚麼を以て答へん。」云く、「蘆華異色無く、白鳥汀洲に下る」と。承、深く之を肯ふ。乃ち囑して云く、「我が宗、汝に到つて大いに興らん。只だ恐る人を得ること難からんを」と。師、拜して退く。承、歿して席を繼ぎ、長安に出世す。未だ幾ならずして名譽叢林を動かす。時に大相國忠公、師の道價を嚮いて、武陵の金城に供養す。師、公の爲に法話す。公、喜んで厚

- ① 飽參。飽は充滿の義、充分に參學したる意にて、見性悟道せしをいふ。
- ② 陸堂。陸は「のぼる」と訓す、上堂と同じく法堂に陞りて演法するをいふ。
- ③ 汀洲。水中の沙地のあらはれたる處。
- ④ 大相國忠公。相國は百官の長、我が國にては太政大臣の異稱、此は將軍秀忠公をいふなり。
- ⑤ 武陵の金城。江戸城をいふ。
- ⑥ 亞相。大納言の唐名。
- ⑦ 哲匠。賢哲なる宗匠の義にて、非常に優れたる人のこと。
- ⑧ 驚馬。最も鈍き劣れる馬をいふ。
- ⑨ 自若。動ぜざる貌。
- ⑩ 竹篋。宗師家の學人接待に用ふる具なり、長さ一尺五六寸、竹を以て「へ」の形に作

く珍帛を賜ひ、送つて山に歸らしむ。晩に越三州の刺史、亞相利常卿、金澤に於て大禪院を創め、號して天徳と云ふ。將に哲匠を訪求して住持たらしめんとし、卿、遂に相國忠公に聞す。公、師を請じて住持せしめんことを命ず。卿、士をして堅請す。師、答へす。是に於て公自ら師に告ぐるに、卿の請意勤めたることを以てす。師、已むことを獲す、遂に往いて開法し、大いに洞宗を興す。僧問ふ、「如何なるか是れ和尚の家風。」云く、「輩を嗜んで釋迦を罵り、酒に酔つて彌勒を打す」と。師の性、素より儻修を喜ばず。常に一鷲馬を畜へ、用つて乘輿に備ふ。人相笑へども獨り自若たり。會々微疾有り、自ら起つべからざるを知り、乃ち一枝の竹篋を封じて門人高察に長安に與へ、自ら題して云く、「老僧滅後一過量の人有りて、大いに吾が風を振はん。汝代つて箇の無鼻の黑蛇を傳へて用以て證と爲せ」と。書き訖つて端坐して化す。

金龍穩禪師傳

禪師諱は恩穩、字は龍睡、自ら南山老人と稱するは別號なり。加州の人、卅歳にして州の常松寺に依つて薙髮す、天性寛仁にして、面に瞋色無く、

り、藤を巻き多く漆を以て塗る、現今には常に用ふることに少なく、首座法戰の時に用ふ、蓋し竹篋は首山禪師頃より多く用ひられたるが如し。
⑤ 過量。格外拔群の人。
⑥ 風骨。風儀骨格の意。
⑦ 自負。うぬぼれること。
⑧ 出世。出家したるものが再び世間に出づるの意にて、已に修行の功成り、人天教化の任に堪ふるに至つて、山林に止住せず、再び世間下つて衆生を教化するをいふ。而して説法教化は多く寺に於てなされるが故に、寺院の住職となるを出世といふに至れり。
⑨ 玄關。玄妙なる道に進み入る關門といふこと、奥義といふほどの意。
⑩ 參請。參問し請益すること、學人が師家に隨侍して尋問を發じ、師家の提擧を受くることなり。

見る者馴れ近ぶかすと云ふこと無し。嘗て遊方の日、七八員の哲匠に參じて其風骨を會し、法に異味無しと云うて、自負し、崇先並に龍門に出世す。毎に衆叩に隨つて開論すること五七年、住持の體例を得たり。一夕、師、念へらく、「參禪は、小を以て足れりと爲さば、恐らくは未聞の處有らん。頃聞く、黃檗琦禪師、明より來朝して長崎に居すと。至人遙かならず、當に玄關を扣くべし」と。乃ち發して彼に到る。入室參請すと雖も、異言通せざるを以て、未だ諸訛の處を盡さず。只だ自ら工夫を用ふること綿密、已に三年を経れども嘗て所入なし。師、歎じて云く、「吾が此の生、佛法の緣未だ熟せず、漫りに心力を勞して又何の益ぞや」と。辭し去る。時に加の天徳席を虚しうす、檀越暨び衆等、師を延く。師、緣に隨つて止息す。一朝、殿に進んで禮佛し、東の方、日影の樹枝上に在つて煉くを見、俄かに眸を轉するの間、豁然として省有り。便ち偈を説いて云く、「三十年來空しく神を費す、閑塵拂ひ去つて卻つて塵を成す。頭を擧ぐれば觸目遮掩無し、萬象森羅、特地に新なり」と。師、又念へらく、「悟處、決擇を缺かば、法に於て何の益か之れ有らん」と。遂に徒を領じて察禪師に

① 殿。佛殿なり。
② 三十年來空費。神、閑塵拂去却成塵、擧頭觸目無遮掩、萬象森羅特地新。
③ 神。精神、即ち心のこと。
④ 特地。地は助字、特別の義にて、「とりわけ」といふこと。
⑤ 決擇。擇は「えらぶ」と訓む、決定簡擇の義。
⑥ 獨榻。榻は椅子なり。
⑦ 叢。預言のこと。
⑧ 京師。京都のこと。
⑨ 黃檗。山城國宇治郡宇治村に在り。
⑩ 機縁。機は時機、縁は因縁と熟字し、機會因縁のこと。
⑪ 象山瑄。木庵性瑄のこと。
⑫ 寬文の庚戌。靈元天皇、寛文十年（西紀一六七〇）に在り。
⑬ 關山。我が郷國の四境をめぐる山、轉じて故郷のこと、此

長安に謁す。察、一見して、獨榻を以て之を待ち、乃ち法を付するに先師の遺囑を以てす。師、拜受して院に歸る、未だ幾ならずして四衆雲の如くに輻り、果して適の識する所の如し。一日師、京師に行化す。道、黄檗を過ぎ、再び琦禪師を訪ふ。琦、喜び迎へて香を別庵に炊く。次の日、機縁有り、偈を贈るに「收卷珍藏綿密々、機に對して放出すれば一番新なり」の句を以てす。象山瑄、琦の傍に侍り、師に寄するに、「鐵額銅頭際會を忻ぶ、風蹄電足機縁を展ぶ」の句有り。寛文の庚戌、師、印を關山に顧る。印、禮を執つて相見し、詰るに此の事を以てす。機語俱に契ふ。別れに臨み、印が手を執つて云く、「時至れり、手を袖にすること莫れ」と。是に於て印始めて師有ることを知る。

① 是即ち江州のこと。
② 機語。機縁及び語句のこと。

源流の傳略終

月坡禪師行實

侍者 元曠 元機 元實等拜撰

禪師諱は道印、字は月坡、江州大津の人、姓は源、本貫は佐佐木の一葉。祖父郷黨に逆らふに因つて、遁れて民間に陷る。母は大倉氏。一夕夢みらく、欄に倚つて菊華を採ると、覺めて娠むこと有り、九月重陽の日を以て生る、實に寛永丁丑の年なり。幼にして孤、母に事へて孝志有り。年八歳にして優壽印禪師に謁して雜髮、尋で竹龍遵公に依つて業を受く。嘗て書を得、句讀を習ふに、師、訓を待たずして大半其の義を解す。一日五燈會元を讀み、兜率室中の三語に至つて疑情頓發す。日に工夫を用ふれども未だ綿密ならず。偶々中華の文公、行化して竹龍に到る。諸徒請益す。文、洞山水を過ぎるの因縁を擧げて試む。師、獨り茫然たり。嘗て念へらく、「參禪、師を缺かば豈に株を守つて兔を待つに異ならんや」と。自ら志を勵して辭し去る。師、素より古朴にして儻修を喜ばず、

① 行實。行狀、行業、行跡等といふに同じ。一生の言行、履歴を記したる文書のこと、俗にいふ「言行録」に同じ。
② 撰。撰述の意、康熙字典に、「辭を勵し事を記すを撰といふ」とあり。
③ 本貫。原籍地のこと。
④ 葉。ひこばえ、即ち一族の意。
⑤ 寛永丁丑。寛永は後水尾帝の年號、丁丑は寛永十四年（西紀一六三七）に當る。
⑥ 五燈會元。大川普濟の著、二十卷、七佛より南嶽下十五世徳山子湏に至る、即ち印度相

冬夏一直履、内外一袈裟。日常質篤にして文な
らず、到る處野賤を以て謾らる。師、確乎とし
て移らず、只だ自ら難險を平易なりとし、勞苦
を安樂なりとし、腰包して獨り南にす。凡そ經
遊する所二十餘院、門庭僉文字の議學を以て高
ぶり、其の開論する者は、只だ紙上の語のみ。
師、歎じて云く、「師を尋ねて、伶仃すること天
下既に半なり、拄杖頭未だ嘗て佛法を會する底
の人を撥著せず。而今叢林實に其の人無きか」
と。自後行脚、心生鐵を咬むが如くす。偶々
播州に到つて雲晴寺に夏坐す。恩道者なるもの
有り、衆中に陸沈す。性、實朴にして語少
し。日夕孤然として禪坐す、師、常に友とし好
し。清話の間、百丈野狐を接するの因縁を
以て詰論す。師、自ら徹底無きことを知り、慙

承より東土の六代及び五家七
家の列祖を網羅す。
①兜率室中の三語。兜率は宋の
隆興府兜率院の從悅禪師、實
峰克文の法嗣、元祐六年壽四
十八にて寂す。
續傳燈錄二に、「室中三語を
設けて以て學者を驗す。一に
曰く、撲草瞻風、只だ見性を
圓る、即今上人の性、甚麼
の處に在るや。二に曰く、自
性を識得して方に生死を脱
す、眼光地に落つる時作麼生
か脱せん。三に曰く、生死を脱
得するは即ち去處を知る、四
大分離して甚麼の處に向つて
か去るや」とあり、或は之を
兜率の三關といふ。
②請益。學人が宗師家に對して
公案、古則に就いて審問し、
又其の他の法問の垂請にて自
己を益するをいふ。
③洞山水を過ぎるの因縁。五燈

會元神山堂に、師、洞山と興
水を渡る、山云く、踏つて脚
を下すこと莫れ。師云く、踏
らば則ち水を過ぐることを得
す。山云く、不錯底の事作麼
生。師云く、長老と水を過ぐ
とあり。洞山は良价禪師、神
山は僧密禪師のこと、共に雲
嚴曇晟の法嗣。
④伶仃。ひよろ／＼として獨り
行く貌。踰躄と同じ。
⑤生鐵を咬むが如くす。生鐵は
まじり物なき鐵をいふ、生鐵
を咬むが如くとは、意志堅固
にして切々なるをいふ。
⑥陸沈。陸地の中に沈み居る
義、才徳ありて世に知られず、
埋れて居ることをいふ。
⑦百丈野狐を接するの因縁。從
容錄第八則に、「百丈上堂、常
に一老人有りて法を聽き、衆
に隨つて散じ去る。一日去ら
ず。丈乃ち問ふ、立つ者は何

愧憤發して、月を踏え寢食を忘る。忽ち鐘聲杵に隨つて發する際に于て、
死甦一回して頓に根源を窮む。便ち偈を説いて所解を述ぶ。恩、爲に印記
し、囑して云く、「我れ昔三四員に參じて、密に此の事を傳ふと雖も、福薄
きを以て絶えて人の爲にせず。子、向後一禪師に嗣いで須らく洞上の家風
を振ふべし」と。師、甘心して辭し去る。直に黃檗に到つて隱元琦公、暨
び木庵瑄公、①即非一公に調し、遂に留つて堂に歸す。次の日、自ら修行
の因由、悟證の見識を書し、瑄に呈して焉を目せしむ。瑄、目覩り欣然と
して休す。密かに左右に謂つて云く、「此の僧、②巴鼻子有り」と。相傳へ
て衆中略ぼ焉を知る。琦の席下一千餘指、師、獨り衆中に指目せらる。此
の時叢林輿暖に便りして、飲食を以て宗風と爲し、機縁を以て戲論と爲す、
師、獨り之を疾み、乃ち衆を厭うて辭し去る。徑に③比良山に上り、茅を
獅子原に結んで居す。性、素より枯淡を樂しみ、煨芋烹泉、④孤然として
自適す。偶々⑤蓮池の崇行録を閲し、百丈海の「一日作さざれば一日食
はず」の語因縁に至つて、遽かに涙を揮つて云く、「古人法の爲に躬を忘るる
こと既に是の如し、我れ甚人ぞや」と。乃ち市に就いて農具を買ひ求む。

人ぞ。老人云く、某甲過去迦
葉佛の時に於て曾つて此の山
に住す、學人有り、問ふ、大
修行底の人却つて因果に落つ
るや也た無や、他に答へて道
く、不落因果と、野狐身に墮
すること五百生、今請ふ和尙
一轉語を代はれ。丈云く、不
昧因果。老人言下に於て大悟
す」とあり、百丈は百丈山懷海
禪師のこと。
①即非一公。即非如一禪師のこ
と。隱元隆琦の法嗣、支那福
清縣の人、隱元と共に來朝
す。
②巴鼻子有り。巴は尾、鼻は首、
或は云ふ巴鼻は「牛の鼻づら」
なり」と、或は單に鼻のこと
なりと、要するに俗に「つか
まへ所も有る」と云ふ程のこ
と、子は助字。
③比良山。江州に在り。
④孤然。持みなき貌。

即日より作務し、山を斫り田を畚り、麥を種る麻を栽う。日用農を生業とする者の如し。後、瑠公、席を黃檗に繼ぐに及んで、復び往いて焉を訪ふ。瑠問ふ、「近年甚麼の處にか在りし。」云く、「比良山に住庵す。」瑠云く、「庵中の事作麼生。」云く、「佛祖の縛を截斷して、常に吹毛の劍を磨す。」瑠云く、「庵外の事又如何。」云く、「朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む。」瑠休す。次の日、師を送るに、「一輪皎潔として峰巔に挂る。照徹す三千及び大千。影、寒江に落ちて波靜かなる處。摩尼性朗かにして太だ昭然」の偈有り。一夕、師、郡長の爲に減さる。性、素より卒急にして不羈なり。勇んで庵を離て、出づ。偈を壁間に書して其の志を表す。郡長悔いて留むれども復らず、遂に頭を掉つて去る。偶々一善信有り、師の道風を重んじ、便ち蟬丸翁が舊隱を會坂山に補つて、以て坐具の地と作さんことを請ふ。師辭するに及ばずして留る。金龍穩禪師久しく道行を聞き、特に加州より過り訪ふ。師、禮を執つて相見し、詰るに此の事を以てす。穩、遽かに師を識ることの晩きことを恨む。別に臨み、師の手を執つて云く、「時至れり、手を袖にすること莫れ」と。師、唯然たり。寛文の中、

●運池の崇行録。雲棲の疎安、蓮池大師の號あり、編門崇行録の著者なり。
●名劍の別稱。刃の先へ兎の毛を擬して之を吹けば、忽ち截ると云ふ程の銳利なること。
●一輪皎潔挂峰巔、照徹三千大千、影落寒江、波靜處、摩尼性朗太昭然。
●三千及び大千。三千大千世界の事、長阿含經に出づ。須彌山を中軸として日月、四大洲、六欲天乃至梵天等を附屬せる一團を一世界となす。而して千の須彌山、千の日月、千の四大洲、千の梵天、千の六欲天の集合體を指して小千世界といひ、この小千世界をまた一千集めたるを大千世界といひ、大千世界を一千集めたるを大千世界といひ、小千、中千、大千を合して三千大千世界といふ。

師、元古佛の塔を永平に拂ふ。乃ち偈を賦して祖宗を興さんことを誓ひ、遂に留つて記室を典す。住持慧輪明公、毎に見て喜慰勞問す。偶々衆と師の爲に半座を分たんことを議す、衆議、草の偃すが如し。乃ち伏して師を請ふ、師、未練を以て答へず、上皇、詔を降すに暨んで始めて受く。院事既に罷んで、闕に赴き、恩を謝し覺つて歸る。時に穩禪師、書を達して數々請す。師、已むことを得ず、特に往いて焉を訪ふ。穩、迎へて入室せしむ。師、纔かに門に跨る。穩、便ち問ふ、「聞く、師、獅子原に在つて獅子を弄し得たりと。試みに一箇を弄出せよ、看ん。」云く、「弄出することとは即ち難からず。只だ恐る、人の驚動せんことを。」穩云く、「但だ弄出せよ、看ん。」師、禪牀を掀倒して出で去る。穩、大笑して云く、「窟を出づるの、金毛全威を振ひ得たり」と。便ち請じて第一座に處らしむ。是の時黃龍席を虚しうす、檀越等誠を致して師を延く。師、素志を以て辭す。之を強ふること再三すれども起たす。是に於て檀越等、州の太守に聞し、堅迎するに國請を以てす。師、辭するに語なく、乃ち往いて住持の體例に依る。延寶の間、州中大いに饑饉するに逢ふ。師、憫んで四衆の爲に説法す、

●寒江。寒き冬の江。
●摩尼。摩尼珠のこと。摩尼は梵語、如意と譯す、此の珠の體は青黃赤白黑等の五色を離る、而も五色の物來れば、能く映じて毫も味まず、ことなし、且つ之を所持すれば福徳圓滿にして、意の如くならざることなき無上の寶なり。佛性は本來諸相を離れ、而も緣に隨つて身心の相を現す、且つ之を識得すれば、無碍自在の境界を得るが故に、摩尼珠を佛性に喩ふ。
●坐具の地。住處のこと。
●唯然。隨順の貌。
●記室。書記のこと。
●闕。宮城の門をいふ、宮中のこと。
●比良山獅子谷に棲みたるを以て此の語あり。
●禪牀。僧堂内に於ける坐禪する場處、住持人なれば椅子、

緇素雲集すること三萬指に滿つ。日に贖金を納めて米を買ひ、粥を作つて力めて窮乞に施す。水戸の侯、參議源君は佛儒兼ね崇び、學、内外の典籍に通ず。偶々師の山居の詩帙を覽て深く其の風操を愛し、乃ち岱宗の席を虚にして數々請す。師、敢て答へず。君、禮を高賓に執り、力を盡して禱ふ。師、遂に往いて止息す、門庭一に百丈の古規に則る。君自ら山に入りて道を訪ひ、禮を以て黄金及び珍菓を與へ、焉を賑はす。師、煎點を以て待たず、語世故に及ばず、只だ面するに疎茶一盞、禪偈二章のみ。年、未だ期に至らずして、新たに法堂を建て、國の爲に開堂す。江湖の龍象、翕然として轉まる。已に千指に餘り有り、列宇を崇成し、什物を辨置するの外、贖錢五十萬を剩し、永く捨て、結制の資に備ふ。偶々穩禪師の書到る、未だ封を開かずして其の趣を知り、遽かに起つて穩を金龍に省覲す。穩、師に謂つて云く、「雲巖の路將に絶えんとす、須らく沙彌を打するの棒頭を露はすべし」と。便ち席を虚にして西堂に退く。時に師、水戸の請に應じて現に岱宗の衆を董す、此に係つて久住すること能はず、遂に日を限つて受く。合國の緇素見んことを願つて先を争ひ、香を袖

- ①雲納なれば單位なり。
- ②掀倒。掀は手を以て高く擧ぐるをいふ。倒は「たふす」なり、高く差上げて投げ出すをいふ、又「はれかへす」の意ともなす。
- ③金毛。金毛獅子兒の略、大丈夫の漢の意。獅子は百獸の王と稱せられ、最も偉大なる力を有するものなり。禪僧修行の純熟して機鋒銳利なるものに喩ふ。
- ④擧越。梵語、施主と譯す。六度の中の布施を行ふ人、又檀家ともいふ。
- ⑤詩帙。帙は書物を被ふ布なれども轉じて書物の義に用ふ、詩帙は詩の本のことなり。
- ⑥風操。風采節操の意。
- ⑦百丈の古規。百丈懷海禪師定むる所の古清規のこと。
- ⑧煎點。煎煎煎熱の食物を以て點心すること。或は云ふ、煎茶を點する意なりと、又云

にして歸する者、稻麻竹葦の如し。士大夫の經遊間無く、屢、常に戶外に滿つ。延寶の末東阜越公東渡す。偶々師と武陵に清談するに、感悟流涕、互に舊識の如し。越、師に贈るに、「汪洋たる萬派本同源、祖道重ねて興して法筵を啓く、五位弘通して妙用を施す、新豊の一曲君が傳ふるを貴ぶ」の偈有り。其の大事を激揚し、語言に游泳することは、備に三會の語録に存せり。著す所の詩偈集共に世に行はる。師は天性慈愛、風韻奇逸、純誠人に出で、言行倫を絶す。日常法に依つて住し、節目、令有つて嚴かなり。犯す者は面折し、服すれば口諭す。己に克つて禮に復すれば、輕語綿絮、引き去るに處無し。機に投じ見に觸るれば、高風錢壁、攀緣すべからず。儉を一室に移めて、施を萬世に布く。獨居すれども法則に越えず、群遊すれども怪力を語らず、此れ師の平生の大槩なり。其の精微に到つては、筆墨の形容すべきに非ず。

- ①ふ、茶を煎じ菓を點するなりと。披露の變態をいふ。
- ②翕然。集まる貌。
- ③什物。寺院に備付りある公用の器物にて、住持人等の私右にあらざるものをいふ。
- ④結制。九旬安居の制を結ぶをいふ。
- ⑤雲巖の路。雲巖とは支那湖南省雲巖山のこと、藥山の法嗣曇晟の居して法幢を立てたる所なり。此は其の雲巖の路といひて洞宗を指すなり、洞山は雲巖の法嗣なればなり。

- ⑥沙彌。梵語室羅末尼羅の音譯の訛、勤策男、息慈と譯す。初めて落髮して佛法に入れる男子のこと、但し今は見性以前の凡ての僧を指す意なり。
- ⑦稻麻竹葦。頗る多數なることをいふ。
- ⑧武陵。江戸のこと。
- ⑨汪洋。大きくして廣き貌。
- ⑩五位。洞山の五位説を指す。
- ⑪新豊の一曲。洞山の家風に擬す。
- ⑫三會の語録。黃龍、岱宗、金龍の三會ならん。

附録

右は月坡禪師初會の佳韻に和す

東阜心越

宗風丕振有千年

豈止鸞膠續斷絃

曲調更新常溢耳

餘音盡在指頭邊

支桑雖隔久相通

血脈冥符繼此宗

妙叶正偏俱解得

虛空粉碎不虛空

①支桑。支は支那の略、桑は扶桑の略、支那と日本といふこと。

②血脈。傳法相續のこと。釋迦牟尼佛より歴代の佛祖、傳法相續して絶えざること、恰も先祖より父母子孫と血統相承するが如くなるに喩へて云ふ。轉じて傳法相承の系譜をも血脈といふ、法脈といふに同じ。

③冥符。符は符節のこと。

④本來人。天然のまゝに少しも人為を加へざる姿の意にて、人々自己本來具有の心性をいふ、此は其の心性を徹見せる人の意なり。

⑤汪洋。廣く大なる貌。

⑥祖道。祖師道のこと、祖師の

教をいふ。

⑦五位。洞山所作の五位を指す。

⑧新豐の一曲。洞山の家風に喩ふ。

⑨遷延。期せずして相會ふこと。

⑩東武。東の國、武蔵の國。

⑪月明に鸞を藏す。銀盤に雪を盛ると對句、平等の中に差別あり、同中に異なることを示す語、明月の中に鸞の居るは、共に白色なる點に於ては同類なるも、明月は明月、鸞は鸞にて、全く齊しきものに非ず、銀盤と雪とも、又々斯の如し、寶鏡三昧にある句。

⑫乍別。しばらく別るゝこと。

萍蓬兩地意何親

觀面少時分袂去

主即主兮賓即賓
他鄉卻遇本來人

東阜心越

月坡禪師の再晤を懷ふこと有り

汪洋萬派本同源

五位弘通施妙用

雪夜、月坡禪師を懷ふこと有るに、面せるが如し

邂逅應知夙有緣

月明藏鸞立中妙

乍別忽驚寒已盡

祖道重興啓法筵
新豐一曲貴君傳

東阜心越

不期東武共譚禪

銀盤盛雪妙中玄

寸心遙懷夜如年

指出金毛一白晝眠

國譯月坡禪師語錄卷之二終

請 啓

伏以、沒底淨瓶、躍倒逢場快活、越格之機、叱殺瀉山、幾頭猿猴、爛柄鋤斧、運用積年煨煉、住山之風、追倒青原一角麒麟、久仰分化遊方之正風規、偶見撒手到家之好消息、恭惟、曹洞正宗三十七世上月下坡印公大禪師、以無所住爲所住、以無所爲作所爲、折拄杖子、閱世似風渡空、破蒲團邊、絢綠如月印水、了面目於未生前、挑禪燈於既滅後、人間蝶遊、悟世夢齊、昨夢根塵蟬脫、樂我空及法空、出嶺如覺一宿太實頭、訪道同存九至、尤徹困、德感王侯之撰、聲價千鈞、辯降魔外之權、言論百當、東求知音、橫吹鐵笛去、北懷終老、驀擔革囊歸、某等只願、寶車速迎、山門改觀、紀綱恢張、叢林復古、金龍山雖不靈、此我合城第一法窟、天德院誰爭領、幸師歷世無比道風、境勝人奇、力牛競相挽、天荒地老、法王起何遲、臨啓戰慄、未盡瞻依。

復 啓

伏以、秋風拂葉清冷、梧桐枝上、此非鳳凰奚得棲、春雨蒸香深沈、梅檀林中、唯有獅子而當住、恭惟、

金龍山天德禪院、幽都名藍、朔方靈趾、氣壓五嶽、雄風振方萬里、威布三越、禪派疏幾千流、役局皆龍子象孫、操白典鑿、宛如諸禪師安上座在於大瀉、擁護悉王臣宰官、插草布金、不下天

帝釋須達多於于鷲嶺不肖蒲團上坐堪破七箇家風正好磨甗作鏡布袋頭開不留一字日用只慣負石舂碓往年久飽五斗官獨甘有心學元亮今日漫任千鍾爵自愧無口笑董賢苟嫌諸方參新婦禪又欲千載免老婆責素識紙衲勝錦衣何失撒手到家之道幸得鈍斧作心印悔非繼踵住山之才臨書悚寒燒香布謝

月坡禪師語錄卷之一

住加賀州金龍山天德禪院語錄

侍者 元曠 元機 元實 等編錄

入門

延寶九年歲次辛酉天和九月初五日大檀那越三州刺史羽林管君暨合城諸宰官本院耆德聖衆等請師相接繼席於金龍山天德禪院爲第三代祖以本月十八日進院至

山門云此非昔年能解出得爭又今日能解入得喚云神通我被山門瞞喚云本然山門被我瞞畢竟如何東西揖罷舉頭望一對金剛笑又噴便進至

佛殿云過去佛何似現在佛死木佛何似活肉佛汝不度火且置未審如向屋裏坐得還稱真佛否丹霞來也低聲低聲遂展具禮拜至

伽藍云禪以識得心爲宗旨豈有寸土使汝護耶若是土地神這裏無處措腳便踏地一下云可憐生向山僧腳跟下藏身去矣至

祖師云一隊無面目箇箇得依樣畫葫蘆箇點將來無由展巾雖然與麼人事道中乃禮至方丈云好箇一室從上來指鹿作馬證龜作鼈坐斷幾人活舌頭今日新長老到來又作麼生

三坐道場年，老棒頭無力懶談禪，遂靠杖據座。

上 堂

即日合院耆德、聖衆暨內外護法宰官等請師開堂。

師至法座前，拈起請啓，示衆云：此是二千年前遺囑十方王臣，有力檀越底之陳曆，夜來被業風吹，九回散亂，落山僧手，諸人要見麼？遂附維那表白，維那宣疏畢，又指法座云：昔日天人師佛，分此座於多子塔前，獨坐金色頭陀，要與諸弟子作大依止。今日鈍置古錐，與此座於金龍山中，獨坐瞎屨比丘，未審要爲箇甚麼邊事？諸人還會，座屠龍無功，須還鈍置古錐，畫蛇添足，應任瞎屨比丘，遂陞座，拈香云：此一瓣香，爇向寶爐，端爲。

今上皇帝聖躬萬歲，伏願堯田春勛，萬邦伏授時之恩，舜苑秋成，百姓和遜，畔之德，又拈香云：此一瓣香，爇向爐中，恭爲。

大檀那越三州刺史羽林營君暨合城諸宰官內外護法居士等，只願位齊和叔，永鎮幽都之山河，令號陳民，長正仲冬之律氣，又拈香云：此一瓣香，爇向爐中，恭爲開山本院第一代，嗜葷罵釋迦，醉酒打彌勒，常騎一驚馬，人相笑之，獨自若矣。箇葷葷老古錐，只願師翁，驗衆如具佛法，爛卻眼兒，孫得人，共全馬駒踏殺機，又拈香云：此一瓣香，爇向爐中，恭爲大方明德，諸山專使暨合院耆宿聖衆等，只願少林一枝，五葉春回，空劫外，洞水千派，四海波歸，永平宗，又拈香云：此一瓣香，昔日塵積醜生，留在本院丈室鼠糞堆中，底山僧拾得，包秘革囊，東漂西泊，一十

二年，未嘗放棄。今日對衆第三番拈出，爇向爐中，供養傳曹洞正宗三十六世，現在丈室半欄，向空釘櫛，箇無鼻孔，老和尚用酬法乳之恩，遂斂衣就座。上首白槌云：法筵龍象衆，當觀第一義。師云：若論第一義諦，大衆未入門，山僧未上堂，向那時邊，領得下，猶如靈龜曳尾，箇中莫有傍分帝命，爲傳持，萬里山河布政，威底漢，試來相見，僧出衆問：一佛出世，千佛讚揚，靈山嘉會，儼然未散，一代藏中，便不問，如世尊未拈華，迦葉未微笑，正法眼藏，落在甚麼人邊？師云：千山勢到嶽邊止，萬派聲歸海上消，進云：和尚今日開堂，忽有向白槌前解聽法底，出來如何接得？師云：東邊露柱下，喝，西邊露柱行棒，進云：山門覆蔭王臣敬，法座屹然龍象圍，箇中定綱宗，底一句，又作麼生？師云：兼至去來與妙用，到兼何更逐言詮，進云：沒絃一種新豐曲，誰謾吾師彈得奇？師一卓拄杖云：且道，是甚麼曲調？僧擬議，師云：古院苔封人不到，松風聲裏絕知音，僧問：如何是公案現成一句？師云：堂上幾人或緇或素，進云：此外別有長處麼？師云：聽取便去。僧問：西來祖意，便不問，如何是東來佛法？師云：蒲肥鞞價下，竹瘦杖痕強，進云：灼然灼然，師云：作麼作麼？僧擬議，師失笑而休。師乃云：山僧昔在江西，伐得一條白棒，扶桑國裏，借力橫行，到處信手受用，初住黃龍，下第三頓，接得土面灰頭底，中在岱宗，下第二頓，接得驢腮馬顏底，且如今日，下第一頓，要接銅頭鐵額底，拈卓拄杖云：假使有釋迦彌勒，同時出來，談玄論妙，猶是土面灰頭底，這裏無分下棒，假使有德山臨濟，一門入來，罵雨打風，又是驢腮馬顏底，這裏無分下棒，假使有格外禿僧，千箇萬箇，一時打筋斗來，翻身一時拂袖去，又未銅頭鐵額底，這裏無分下棒，箇中有箇漢，閃電機裏辨端倪，許汝有分喫一頓，其或未然，更舉一則通箇消息。

舉青原思禪師，令石頭持書與南嶽讓和尚云：汝達書了，速回。吾有箇錮斧子，與汝住山，頭至彼，未呈書便問，不慕諸聖，不重己靈，時如何？讓云：子問太高生，何不向下問？頭云：寧可永劫受沈淪，不從諸聖求解脫，讓便休。頭廻至靜居，思問云：子去未久，送書達否？頭云：信亦不通，書亦不達。思云：作麼生？頭舉前話了，卻云：發時蒙和尚許箇錮斧子，便請取。思垂一足，頭禮拜，尋歸南嶽住山。諸人要識青原麼？只慣與賊過梯，卻得爲賊所敗。要識石頭麼？雖是賊知賊，奈爲抱賊叫屈。山僧恁麼一狀，領過青原父子無處拭汗。雖然與麼，山僧今日瞞卻鈍置老古錐，橫擔白棒，跋涉幾重江山，歸來且住此山，未審與青原父子相去多少？古德有一頌云：管毋中路事空王，策杖還須達本鄉。雲水隔邊君莫住，雪山深處我非忘。尋思去日顏如玉，嗟嘆來時鬢似霜。撒手到家人不識，更無一物獻尊堂。卓拄杖一下，上首結槌云：諦觀法王法，法王法如是。下座。

立頭首知事上堂，師乃云：開田成莊，以養賢良，積木成林，以聚龍象，直得作皇家之柱石，爲佛國之金湯。箇中若要永堅帝基，大興祖宗，直須事無細大，法忘收捨始得。所以吳起與士同食，午頭爲衆負米，恁麼真俗無二。凡聖合轍，帝風與佛風同振。官舍兼僧舍，共隆當與麼時，交爲肘臂，互作主賓，人人當職，箇箇辦事。底一句作麼生？舉圓照本禪師，初師永安昇公，昇道價重，叢林歸者如雲，本敝衣垢面，操井臼典炊爨，以給之夜，則入室參堂，昇云：頭陀荷衆良苦，亦疲勞乎？本云：若捨一法，不名滿足。菩提，必欲此生親證，其敢言勞，昇陰奇之，好箇老頭陀，答得奇特，箇點將來，無半提分。若是菩提，道既滿足，亦不是道，未滿足，亦不是，山僧若在，向他道，太勞。

生喫茶去，諸人還會麼？豎起拂子云：諸人於是會取，總無不是，假使墮地獄餓鬼，各受其苦，亦是菩提，無不滿足。假使在畜生修羅，各受其報，亦是菩提，無不滿足。乃至聲聞緣覺菩薩佛果，天上人間大地山河草木瓦礫，各得其處，亦是菩提，無不滿足。畢竟如何？携斧破柴四五束，提刀擇菜兩三莖，道人日用只如是。有甚菩提道可成，喝一喝下座。

東歸上堂，僧問：一百日以前，得得東關來，一百日以後，得得東關去，箇中還有不干去來底消息也否？師云：芭蕉葉上無愁雨，唯是時人聽斷腸。進云：某甲不會，子細指示。師云：七尺單前承當去，進云：恁麼宗風，永扇億萬年。師云：山僧被汝道著，師乃云：山僧六年前東遊常陽，既在天德，不知天德，六年後北歸加州，既知天德，不在天德，且道六年前既在天德，爲甚麼還不知天德？六年後既知天德，爲甚麼又不在天德？諸人還識落處麼？箇中有箇漢，向無錐卓處，入得透坐得斷，許汝參山僧禪，會箇千分一去矣。未審恁麼去就底，還有人比倫麼？莫是鷲嶺釋迦佛耶？且喜沒交涉，莫是毘耶維摩詰耶？且喜沒交涉，莫是湖南瞎長老耶？且喜沒交涉，便展兩手，撥開眉毛云：看看，依舊雙眉橫。眼底底，諸人於是識得，喚爲湖南瞎長老，也是喚爲毘耶維摩詰，也是喚爲鷲嶺釋迦佛，也是畢竟如何落著去也。舉臨濟大師示衆云：有一人論劫在途中，不離家舍，有一人論劫離家舍，不在途中，那箇合受人天供養？臨濟大師說得諸說，雖然與麼，舌頭長多少，山僧今日辭衆東歸，那邊迎待以賓儀，且置，如這裏相送以主禮，如何供養去矣。百鳥獻華一場懣懣，下座便出門去。

茶話

開爐日，合山大衆等，特設茶筵，伸住山賀儀，拜請茶話。師乃拈起茶盞云：此茶山僧昔年向無，何有曠漠野，獨脫然而摘得，蓋之以天，載之以地，炙之以日月，曝之以風雲，遂味之以虛空，然能包得革囊，秘藏珍美，春秋三十年，受用猶未盡，或時在趙州，和布衫量得，喚爲七斤，或時到洞山，同熟麻量得，喚爲三斤，正當今日，不啻論斤量，只使汝等諸人，如法煎出一鑊空茶，箇中有箇漢，不問百沸千沸，不管一啜兩啜，直視甘得禪味，冷暖自知，許汝山僧堂中，始喫茶人也。設或未然，更有一盞大醉人底事，親爲說話，昔文殊大士，與無著、喫茶次，拈起玻璃盞，問無著云：南方有這箇，不著云：無殊云：尋常將甚麼喫茶，著無對，大小文殊，雖無味，談能塞斷人口，奈爲自先濕穿唇了也，箇點將來，未真正喫茶人，若是真正喫茶，須向舌乾唇熱之時，或一瓶半瓶，或三盞四盞，隨分始得，且道如何隨分去矣，遂舉茶啜一啜云：諸人還會麼，莫道趙茶煎不得，誰家爐底火無煙。

佛事

薦天德院乾運大姊點茶

師拈起茶盞云：一莖草上建梵刹，有力方堪稱作家，禪味點來供半盞，空茶何用著唇牙，雖然與麼，此半盞茶，恭點出，不免供養天德院乾運大姊，用酬插草之恩，未審如何，如酬恩一句，若何說

得大樹成陰天下甲，叢林鬱密樂龍蛇，遂點茶。

薦陽廣院前羽林將巖大居士拈香

師拈香云：此一瓣香，昔佛在靈山，付囑十方國王，有力檀越，轉傳及一大三千，令河沙群類穿卻鼻孔底，山僧分得餘香，秘在布袋頭，已一十二年，今日恭拈出，不免供養陽廣院前羽林將巖大居士，用酬檀護之德，未審占得香風底，一句作麼生，晚香吹送秋風靜，華淨東離一朵霜，遂蒸爐中。

詩偈七言律

延寶辛酉之秋，師偶自海東步，省南山老人於金龍，老人喜迎，乃同大檀越羽林營君，請留師繼席三世，是時師應水戶請，現董岱宗衆，係此不能久住，遂限日以住，因說偈表志。

返本還源路不差，從來無住是吾家，院矜美麗禪中虱，道抱疑團盃裏蛇，青海暫浮泡世界，紅爐何止雪生涯，偶登藜杖壁間堯，明月堂前露柱華。

其二

一於祖上喚君王，底事半生眠客牀，有法求邊都旅寓，無錐卓處卽家鄉，昔年漫做顏如玉，今日還慙鬢似霜，撒手懸崖歸去後，且昏奉重向尊堂。

其三

未到何嘗勞問尋，舉州皆道大叢林。松圍境致千年碧，草鎖堂前一丈深。爐火煉金煙淡淡，香風凝恨月沈沈。新豐曲斷知音少，下指爲誰彈古琴。

其四

古殿苔封人不登，獨凭欄畔伴枯藤。途中可憐千般客，物外堪休一箇僧。玄路踏翻空寂寂，禪塵拂罷任騰騰。腕頭力乏老猶懶，莫怪無心挑祖燈。

其五

分化一方方十年，恨嘗無路可棲天。門前預恐老婆責，海外何參新婦禪。世夢半生遊伴蝶，塵緣幾處脫如蟬。當軒歷坐金龍寺，不識又消多少眠。

海東而歸省親本師老和尚

萬里海東多少難，買舟買馬問平安。語中甘蜜知腸苦，句裏含冰覺齒寒。逢別十年心自寂，冤親一日指空彈。衲僧幸領圓成法，何學蜚螻轉糞丸。

面大檀越羽林菅君賦此而簡

文經武緯兩天真，正是王家柱石臣。恩溢闕民寬似海，仁施毛氄溫如春。安邦常用調羹手，重道時呼護法神。佛國須憐荒廢極，憑君欲見一番新。

又

元來佛法付王侯，有力須扶老比丘。官舍舍優君大德，僧途途絕我安遊。折薇江北十年雨，浮筏海東千里秋。今日幸堅檀護約，何時結草謝恩由。

遊山有感

堂前一丈草離離，真正宗風誰敢疑。龍臥猶腥深洞雨，鶴歸彌秀舊棲枝。應門童子髮如雪，守塔弟兄苔蒸碑。操節毋言無似我，歲寒松笠碧瑤璃。

訪本多安房老居士賦簡

一條藜杖寄生涯，萬里風雲是我家。尋故敲門金澤月，迷途穿履武陵華。昔年漫說年猶嫩，今日還愁日已斜。自愧老來君見笑，肩龐麤布爛袈裟。

過大乘寺訪正和尚

東海歸來路萬千，傍尋禪友話雲煙。遠公蓮社結空跡，顏子瓢簞樂小賢。山圃須栽醫俗藥，市廊誰得買閑錢。吾家亦有風光好，伴蝶夢遊終百年。

一夕偷閑沒絃庵

閉門客食不隨群，只恐風塵污袴裙。見脫一身猶外物，商量萬事付浮雲。秦中奔野多追鹿，世上負山誰愧蚊。林隱家寬雖獨處，半欄明月沒人分。

訪本多主殿信士賦簡

十歲海東耕野田，工夫枉費鑿頭邊。言詩口畔常生醜，見月眼中如帶煙。老去是僧何稱佛，化來非鶴孰呼僊。對君慙愧風流少，笑倒瓦瓶茶一筵。

禪起

高堂冷徹道迢真，用得蒲團著著親。心滅萬波平地盡，眼空諸有太虛泯。風驚巢鶴卷雲葉，雨

訪定僧敲竹筍，今日枯禪禪榻外，露瀟秋氣轉清新。

薦鐵心禪師

渾身鑄作鐵心肝，定力老來人轉難，頭上戴鞦游法界，洞源浮筏涉禪澗，百年槐夢眼前覺，一世芳名耳裏殘，我欲師師師不得，對靈話出舌根寒。

應請於大乘寺兼簡出道兄

萍逢此處話生涯，午後腸寒慵啜茶，老骨慙癩新圃竹，破顏讓笑古巖華，人間萬事好隨分，蝸屋半檐堪納些，一趣對君消息盡，何愁秋日到西斜。

偶成

生本非鯤何欲鵬，困魚止漚分方勝，種栽心足苑多荒，坐臥禪餘屋幾層，悟去一身華上露，休來百念湯中水，頭陀素不願成佛，只任人呼粥飯僧。

雪後示徒

象王狂起峨眉巔，粉碎虛空舞普賢，春復寒林枯木蓄，歲豐山圃麥芽妍，憐韓擊節藍關句，詰龐慵參藥嶠禪，試撥冷灰著柴見，勿言竈下火無煙。

重過生緣

力竭長途倦步遲，只疑騎馬夢中歸，行尋親友失門徑，偶遇舊交忘姓氏，元是衲衣何化鶴，勿言木孔罕浮龜，溪邊獨有老婆在，來喚儂家小厮兒。

東海道中

千里吟行詩未成，吾奴可喜布囊輕，嘯空雲雨隨他去，夾路山華爲孰清，孤枕夜難浮蝶夢，旅牀曉却聽猿聲，閑遊初識這回勝，嘗爲風光不動情。

題富士山

山與群山勢不同，一峰獨立半天中，僊壇雪積千秋日，龍洞雲橫萬里東，脚踏三州無向背，氣吞四海振雄風，行人何念官行急，駐馬幾回望碧空。

過武陵訪故舊

相遇知音樂在茶，萍踪無意話生涯，千鍾不羨董賢爵，五斗還憐元亮家，誰覺黃皮愁裏皺，漫驚白髮夢中加，幾回拍手笑休後，起見寒梅數朶華。

武陵偶成

自幼爲僧樂出家，浮雲流水是生涯，探幽金澤七年雨，忘路武陵千里華，臭布禪中常感虱，空茶盃裏豈疑蛇，江湖誰與話消息，只見扶桑人似麻。

遊深川宿村亭

借箇單丁一夜休，世間出世念如瀉，破茅檐下誰安分，古樹陰中獨樂幽，頻笑衲僧求作佛，又憐紳士願封侯，武陵城裏何邊寺，鐘送西斜月半樓。

別後依韻雪夜有懷兼寄酬心越禪師

萍逢何料宿生緣，靦面無心話樂禪，白雪和歌聲外曲，青篇擊節句中玄，閑塵蟬脫共雲水，夢世蝶遊齊晚年，約老林間空別去，不知枕藉甚山眠。

詩偈七言絕

送冽律二禪人歸家省母

賣糶何似買糶親，可愧睦州陳道貧。若錯臨行論孝滿，無私足下惹埃塵。

初會心越禪師賦此而喜

新豐曲斷已千年，且喜道兄來續絃。彈指未成神調妙，清音何必在琴邊。

其二

胡言漢語路方通，相遇全提舉。祖宗問到西來閑意旨，一聲笑倒太虛空。

其三

破顏無語此心親，一句未嘗分主賓。清會且須終日去，異風互愛異州人。

和心越禪師再晤之韻兼述懷

俱談辯慧湧如泉，再會何慙九至筵。一曲調高人不賞，沒絃今荷孰家傳。

曉過小高原

霜明荒草踏無痕，影白西斜月一村。風送鐘聲何處寺，曉行駐馬小高原。

願文

禮佛安樂行願文

歸命、靈山獨尊佛，及歷代諸大祖師，我今頂禮酬法乳，唯願慈悲鑑誠詞。末法弟子某甲等，幸得爲僧衆中尊，直截愛纏顯實相，永脫財色入空門。不歷階級交聖衆，不假修證成法身。父母無得而爲子，王侯不得而爲臣。觸事合宗常自在，隨處作主最裕寬。約身雲水依身淨，了心虛空用心安。情不附物物自空，物不礙情情自保。報應盡如影如泡，作用又何惡何好。任性逍遙無斷續，隨緣放曠樂去留。或向孤峰頂上立，或入十字街頭遊。或在國士筵中坐，或過野老村裏行。飛行三昧自具足，神通六種本圓成。彌縷百結遮寒足，脫粟一炊忘饑休。自己都無塵可播，目前更無法可求。四時萬物盡成行，二儀三光皆無私。祖道從來只如是，佛法現前又何疑。娑婆界中卽寂光，草木叢林無不佛。況是人人大丈夫，豈應自輕而退屈。假使虛空有盡日，我箇安樂行無窮。願以上來勝功德，回向無邊法界宮。

啓

復某甲禪師賀住山啓

伏以真石頭下兒孫，厚在家饋餅之夙志。實土民家父子，繼種田搏飯之高風。恭以某甲禪師，口皮邊禪不說一字，已躬下道重似千金。調高績新豐斷絃曲，機全解虛空無舌言。入定如那伽，倒笑樂山之閑坐。所務無階級，何愧青原之不爲。不肖恰如盲龜無值木孔，大似睡螺不知佛與。數行寄啼，特辱書成聯玉。千般有恨，自愧劍去刻舷。而今雲橫秦嶺，知家何在。此日雪擁藍關，奈馬不前。故勞雙魚聊復卑啓，冀備二虎備充笑資。

寄某甲禪師賀年旦啓

伏以堯天平舜日永麟鳳舞野千變萬化皆樂無爲時洞雲遠濟水深龍象遊方三到九至不訪絕學道此因有力宗師任大法萬鈞重方逢荒涼祖苑回一華五葉春恭惟某甲禪師橫吹無孔笛賞和少林脫空歌倒擲破沙盆不假諸方提挈手振宗風於扶桑六十州墜禪範於塵沙五百劫大家望風而假衆山推穀而公不肖冷灰未豆爆寒谷何冰消但願貌下聲名與春雷同轟德光連暖日共耀

書

寄東阜越禪師書

我國祖道弗振二百餘年獨有黃檗琦老人興起濟北一宗東渡已三十年其往來法席者僅不過千萬之一二而今洞上一宗雖入不乏其傳甚久風範漸衰弟不敏續祖燈無德據師位幸有道兄之東渡豈不作得力之歡哉但願終令道兄東遊之計其奏新豐斷絃曲道兄倘得龍天之推出莫吝顧臨岱宗山雖不靈半檐風月弟亦不惜

寄皓臺流和尚書

雖未識面屢思如故偶逢默子到千里倍渴望已聞道兄結盟於東阜越公厚助法猷方足見至誠如弟三年前知有越公然而不及裁書問候起居以嗣承未明凡聖難計也今弟詳聞越公法系係壽昌五世與我永平共出洞上之門庭雖土異源遠奕葉聯芳誰懷秦心於是弟特

聞水戶侯計令越公移居東武只願事成新話西來意旨雖別致尺一於越公緒餘多端聊不遑盡事請道兄口諭

志

傳法正宗志

傳以不傳而爲傳也法以無法而爲法也所以道我宗無語句實無一法與人此非不傳傳無法法奚敢堪稱真傳實法乎哉昔祁原學安丘孫崧崧以書相分原得書不讀云夫學者以智高者通書何爲哉藏書於家游學四方學成以書還崧解不傳書之意崧服其敏又徐曠學於大學時沈重講授門弟子常千人曠所質問數日辭去或問其故云先生所講紙上語耳若與境彼所未見尙何觀重知之憚其能是人間流俗之學尙有不傳之奇才況於教外宗旨別傳道行耶世尊拈華付微笑頭陀磨師分髓與斷臂比丘豈此有傳哉又豈無傳哉只如火與火合如空與空混黃梅於曹溪青原於石頭船子於夾山洞山於雲居皆以道眼得人傳法永亂耳我永平一宗與嘉禎寬元之始熾永仁應永之間衰永亨寬正之末墜文明長享之下已墜之風孀孀然不斷二百餘年今時禪學者之弊宛如碓砅之亂玉以技詞蔓說爲辨博以鉤章棘句爲迅機以認取意識爲至要以懶惰自放爲了達縱雖至愚奚不知其不可耶然而尙紛乎不愧何也可大笑也爲其弟子者心非師而諂以敬爲其師者實賺弟子而費以法師弟子相共誑卻宗門甚於盜跖動觀檀賤之厚薄料屋樓之華否移居改師如星火然矣道士儒

子之輩每難吾佛必論至於此余得法之日誓不類此類風一十二年之中三坐道場嗣香三
酬南山老人之法乳此所以余傳不傳傳法無法法也嗚呼舉世只知笑余舉世還不知被余
笑伏冀以余此笑有人繼聲相引直到當來幾千萬世分付彌勒又令彌勒加一笑矣此日方
丈無事乃志以傳余後世兒孫也

月坡禪師語錄卷之一終

月坡禪師語錄卷之二

住加賀州金龍山天德禪院語錄

侍者 元曠 元機 元實 等編錄

源流傳略

永平元禪師傳

禪師名道元京兆人姓源村上天皇之裔也卯歲出家依橫川公圓戒度既圓年未幾閱大藏
二次一日有志教外乃出參謁建仁西公暨淨妙勇公遂得法而係黃龍十世偶聞人稱宋地
禪風即隨商舶直入大宋行問入道捷徑派無際於天童瑛浙翁於徑山元靠於萬年寺卓公
於小翠巖僉不契矣自念日宋兩地未有知識過我者初留錫於天童衆議以異域位列新戒
師不樂乃以表聞上三度遂終其志於是聲振遐邇次年適逢淨禪師來住天童師喜迎焉淨
一見器重之師投誠入室午子力參脇不至席一夕淨過堂見一僧坐睡云此事須脫落身心
始得恁麼只管打睡何年有今日事便脫履打之師在傍豁然領旨次日詣方丈淨笑云脫落
脫落時福州廣平侍淨之傍云非細也外國人得恁麼大事師禮拜自後服勤最厚盡得其蘊
偶至告辭促東歸淨付以洞上宗旨暨芙蓉袈裟法衣云汝須速歸只要分化無斷絕師俛仰受

焉。遂歸開化於城南深草。諸方推尊之。云日域曹洞第一祖也。師上堂云。山僧歷叢林不多。只是等閑見天童先師。當下認得眼橫鼻直。不被人瞞。便乃空手還鄉。所以一毫無佛法。任運且延時。朝朝日東出。夜夜月沈西。雲收山骨露。雨過四山低。畢竟如何。三年逢一閏。鷄向五更啼。下座。晚築永平精舍於越州。而居未幾。四衆嘗至。叢規一則太白。蕭如最初扶桑矣。時寬元上皇降詔賜紫方袍。號佛法禪師。內臣持勅而至。師謝恩竟。力辭數次。上皇不許。遂收獻。偈云。永平雖山淺。勅命重重重。却被猿鶴笑。紫衣一老翁。上皇嘉歎久之。師性極好幽隱。別結茅茨於玲瓏巖下。爲退休之室。乃有西來祖道我傳東。釣月耕雲慕古風。世俗紅塵飛不到。深山雪夜草庵中。三間茅屋既風涼。鼻觀先參秋菊香。鐵眼銅睛誰辨別。越州九度見重陽。等之詩。平副帥時賴。重師之道。價數招以名藍。不就。久之。師自往訪焉。副帥迎送執弟子禮。又隨問道受戒。師踰年而歸。末後呼門人懷昇來。嚀遺囑了。書偈坐化。云。五十四年照第一天。打箇跏趺跳觸。被大千。嘆。渾身無處覓。活陷黃泉壽五十。有四臘三十有七。建塔永平。號云承陽。

永平昇禪師傳

禪師諱懷昇。字孤雲。洛陽人。姓藤。出九條相國爲通之末也。自幼不喜俗居。初師橫川圓能。雜染圓戒。學敎家宗要。而有聲。一日歎云。俱舍成實三論。法相之四宗。皆爲有爲學。止觀淨土之二門。未究奧玄。方知此非出世之舟航。遂捨參覺。晏於多武峯。問見性成佛之旨。晏深器之。次謁元禪師於東山。元舉一毫穿衆穴之因緣。詰之。師訥然信伏。遂無心他遊。乃更衣而留。未幾元移深草。師隨行。日常看窮。起居不忽。一日在堂。丁展鉢之間。忽然領悟。便具威儀入室。元問

此漢明甚邊事。師云。不問一毫。如何是衆穴。元笑云。穿了也。師禮拜。遂乞執役衣盂。一見二十年。不退座傍。只除病暇一十餘日而已。一日元謂師云。我使子先執寺務者。欲令法久住也。雖子之歲長。我當能永年大弘吾宗。子其勉之。師於此開堂演法。元聽其提唱。爲之解頤。元既沒。師繼席。牧衆晨夜寒暑。未嘗有懈倦之色。且以荷負宗敎爲己任。一衆悅服。常不墜半百。碩臣重宦。歸嚮修禮。由是洞上一宗。蔚然大振。晚付法徹通。親囑了。書偈坐逝。師性素剛硬。而堪苦行。動延徒出郡之中濱。頭陀行化云。

大乘介禪師傳

禪師諱義介。字徹通。越州人。姓藤。將軍利仁之遠孫也。幼而依懷鑒於波著。師事學通。淨土三部首楞嚴。見性義等受具之後。辭而遊方。初謁元禪師於深草。性剛潔。作務及修禪。日常不群。偶聞元上堂。舉是法住法位。世間相常住。春色百華紅。鷓鴣柳上鳴。忽爾有省。未幾隨元移永平。師乞當水頭。躬擔水於八曲嶺。爲衆出力有年也。元以堪其苦行。差當典座。又兼監寺。晝夜照管百事。不倦。間用工夫。過於衆人。元每稱真作道人。後及昇之繼席於永平。師爲之輔佐之。一日詣方丈。昇問身心脫落。作麼生會得。師云。將謂胡鬚赤。更有赤鬚胡。昇頷之。尋以古今差別因緣。密加研練。久之得法。志將大振。宗遂橫身鯨波。遠遊宋地。行覽禪風於浙之東西。其堂室並仲物。凡叢林所宜有者。逐一自圖而歸。昇喜迎。讓席主山門。師開堂演法。大興永平宗風。晚革加大乘敎寺。爲禪席。而住。師居常臨衆敬嚴。門庭尤高。諸方仰之。喚云洞上中興。末後擊鼓告衆。付法紹瑾。及爲門弟子。說發心行腳之始末。畢。乃書偈云。七顛八倒。九十一年。蘆華

雪覆午夜月圓

永光瑾禪師傳

禪師諱紹瑾字瑩山稱云佛慈禪師南帝之勅諡也越州人姓鳩婆羅兒時師拜和尚羅染既及介禪師繼席董永平之衆師爲介執役衣孟適入室次介問平常心將得來麼師擬進語介募口打師茫然於是疑情火熾一夕在堂坐定忽聞風聲就窓而過猛省介深肯之久之付法遂繼席於大乘全超師之機者有年也中開山於永光而居王臣歸嚮化盛一世矣一日謂門人明峰云靈山有分坐首座曹溪有分化首座今日永光這裏又爲分說首座遂偈付衣法云永光燈下烈燭人照破劫空氣象新凸出明峰難藏匿全功轉側露全身自後師對衆不嘗鼓兩片皮晚革總持律席任作禪院久飽院事乃讓席峨山橫分一枝法也師性素樂行腳遂解職畢遊方破笠瘦藤到處接衆歸者如市

總持碩禪師傳

禪師諱素碩字峨山能州人姓源冷泉亞相之末也神性穎脫清標拔俗卅歲脫白徑上叡嶽建壇具戒常遊講席窮台家之宗要偶謁瑩山禪師於東宮山一見器之乃謂云好箇法器何不更衣參禪師云我有母恐闕侍養山云昔商那和修捨一閣浮提以入吾宗豈將瓊末之世務忽莫大法道耶遂自脫直襪與之師欣然拜受乃隨移總持時中純親須臾不離一日山上堂師出衆問一氣不通處爲甚麼難道山云也道不道師警爾有省擬開口山云不是叱退師從此志氣俊快超邁不群一夕山與師翫月次問汝識月有兩箇麼師云不識山云不識月有

兩箇此非洞上種草師於是勵志歷年結跏坐如鐵幢一日山過堂垂語云或時教伊揚眉瞬目便是或時不教伊揚眉瞬目便是師於言下大悟乃具威儀述所悟山肯之謂云古人得旨之後南去北來朝磨夕碎未嘗自慢汝自今日直去徧參諸方來師卽日拜辭所到叢林渾無不辨龍蛇久之遂歸省山喜逐云今日始堪爲洞上種草師便掩耳山云老僧力乏借汝隻手扶起箇破沙盆便付法師受竟收衆總持叢規鼎盛專則天童之嚴令未幾四衆雲歸常遠萬指大唱洞宗付法神足二十五員各分化一方宗風遠播天下末後使太原差繼席又呼通幻囑以宗柄無端大徹實峰等諸子分分遺囑訖聲鐘說偈而化偈云合成皮肉九十一年夜來依舊橫身黃泉

永澤靈禪師傳

禪師諱寂靈字通幻洛陽人幼孤依祖母長自觀軀不堪世營徑登叡嶽披剃神姿英敏經書歷目便曉通焉常於止觀法門深磨研之稍疑發心教外乃出訪峨山禪師於總持山問從甚來云叡嶽山云欲求何事云我久疑止觀法門山云莫妄想師疑情愈熾遂至忘寢食山知其器熟詰以身心脫落之因緣師一朝頓悟云老和尚莫瞞人山云見甚麼道理云倒騎佛殿出山門山頷之自後參隨甚久會盡古今因緣暨受信衣開法永澤及龍泉道望重於海外雲衆往來踵躡不斷時應安帝降詔賜天下之宗柄係焉洞上一宗規模肅然師性極高尚與人說話常處一室和世相忘一日有微疾鳴鐘告衆乃垂誠云諸人須要屏息衆緣專一明己事那邊放下閑文字這邊脫卻浮名利隨處灑灑落落許汝真洞上種草若又不恁麼非吾徒矣求

筆書偈云：閻浮來往滿七十年，箇轉身處雙腳踏天，書訖泊然坐脫。

最乘明禪師傳

禪師諱慧明，字了庵，係相州人也。幼出家於建長，性博大而有至理，見者無不贊縮矣。偶自念參禪不遇明師，恐成差別，徒費勤苦，聞通幻禪師者，永平六葉，有爲人拔釘楔之力，日月飄然，豈守株留小岐也。遂發過永澤，幻之門庭峻絕，來者多不許入室，動歷年筮棲，師初到，幻問從甚來，云相州，幻云：路多少，云：七百餘里，幻云：草屨踏破若干底麼，云：不記數，幻竊頭打云：老僧此間不著恁麼飯袋子，師於言下大悟，便說偈述所悟，幻印記許入室，一衆愕然。次日幻上堂云：這裏有一頭鐵鼻牛，夜來入室一角老僧，下座乃差師處第一座，久之受信衣，遂歸相州，開山最乘，足下出大綱無極二同志，洞上宗風大振，東關每示衆云：諸禪子要明己事，須向七顛八倒處薦取，始得錯莫在枯木寒灰裏死坐，我昔在先師會中，棒下失卻箇鼻孔，到今摸不著。

大慈宗禪師傳

禪師諱明宗，字大綱，傳失其氏族也。始謁明了庵於最乘，便問：如何是學人入頭處，明云：近前來，師纔近前，明托開云：這裏無汝入頭門，師起來，疑情頓發，日夕不措，明潛知其法器，遂計言犯寺法，遽追出山門，師無一念恨心，陰就山下，就屋而居，六年之際，不嘗解免，晝夜唯坐一壁，工夫愈綿密，遂到忘寢食，一日師傍牛欄而立，忽然有省，乃具威儀詣方丈，明叱云：誰免汝入門，云：這裏大開入頭門，明笑云：我門爲小賊所破，師禮拜，自後執侍左右，日到玄奧矣。晚開法大慈，未幾道價聞遐邇，師臨衆枯澹，雖一水一湯，漫不放捨，躬炊米擇菜，人見志將收衆而留。

常打圍法座者，無不滿千指，遂分禪源，漲一十二派，偶有微恙，擊鼓告衆，衆集，師云：老僧化緣既畢，與汝等作箇遺囑，拈卓拄杖，喝一喝立逝。

最勝璨禪師傳

禪師諱宗璨，字吾寶，不知甚許生緣也。爲人至性卓識，言必有異，年志學許，志篤參禪，時依大綱禪師於大慈而遊，每發問以一大事，綱都不答，唯道：自承當去也。五七載之際，別無開論矣。一朝師在家掃除，忽因帚柄觸石折，有省，直去告綱，綱頷之，遂脫白受具，執役爨炊，日常純真，腸不至席，一日網過庫下，見師之洗米投鍋，便問：鍋是鐵作，飯是米成，未審明甚邊事，師云：鍋任他鐵作，飯任他米成，便將水大洒地上，綱深肯之，乃爲印記云：吾宗到汝而興，容易勿說，便付衣法，師俛仰受去，後開法最勝，大唱洞宗，師上堂云：南林竹，北地木，東園菜，西田麥，是衲僧家真活計處，汝等諸人作麼生明己事去也，良久云：只向長連床上伸足，安眠直下，須無事去，若是有開眼寤語底漢，老僧爲與三十棒，時雲岫出衆云：和尚早喫一頓了也，師呵呵大笑下座。

廣嚴龍禪師傳

禪師諱宗龍，字雲岫，雲州人，家世以神職而富，兒時隨父過田畦，偶看蛙死，乃問父云：蛙何不得躍，父云：既死，云：人亦有死麼，父云：有，云：如何得免，父云：我聞悟佛法者得免，云：兒心欲悟佛法，如何得悟，父異之，乃念此兒不凡，志不可奪，遂投鰲淵寺出家，年未登志學，有志圖南，乃發參決諸方，後謁璨禪師於最勝，機語相契，璨容以第二座之職，參隨有年，密得心印，晚開山廣嚴洞家正脈，連環不誤，一夕呼門人文英入室，乃囑云：我道以四種賓主而傳，或時正，或時偏。

或時偏正雙明、或時偏正雙泯、便以手向空一點云、此一點、非偏非正、從上佛祖總摸不著、汝向後有破茅蓋頭、須莫容易得人、老僧不久、遂付衣法、便書偈告疾、三日而終。

天寧英禪師傳

禪師諱文英、字一華、初謁雲岫禪師於廣嚴、岫一見、潛知法器、差著炊爨、師日用純篤也、一日岫過庫房、逢師孤擇菜、岫云、汝在於此多少時、云、一年餘、岫云、擇菜洗米之外、有甚麼所務、云、力用工夫、岫云、工夫圖甚麼事、云、欲作佛、岫云、作佛甚麼用處、師茫然、岫便摩頂云、真擇菜漢子、師於是心憤、勵志日夕不寢、偶岫上堂、僧問、如何是衲僧出身處、岫云、風吹柳絮毛毬走、雨打梨華黃蝶飛、師在傍脫然、到晚具威儀、詣方丈、岫云、箇擇菜漢子、大事了畢矣、師禮拜、自後隨侍左右、極心參請、遂到岫之歿、開山天寧、有一僧來參、便問、如何是和尙家風、云、禪影雙眉、如竹瘦、道心一片、與松閑、僧云、乍有客來時如何、云、破瓶茶熟、君須喫、寒竈香空、我懶炊、師爲人朴篤、不喜偉侈、清標孤操、不可攀矣。

萬松健禪師傳

禪師諱高健、字無敵、不知甚許人也、偶訪英禪師於天寧、英愛師之朴實、機語如針芥相投、師乃留歸堂、自束一錫、與一鉢、高掛壁上而坐、二時粥飯、大小便利之外、未嘗下單、冬夏唯著一衲、雖祁寒溽暑、絕不添減、一住二十年、宛如一日矣、一夕英呼師來、拈出法衣云、者箇雲岫老入底、我在彼爲衆、以擇菜洗米、傳得老僧時迫、欲付汝、得也否、云、某非恁麼人、英云、我貴汝非恁麼人、自今日直去、向沒踪跡處、撰出箇道人、遞代流傳、莫斷絕我法矣、遂付師、唯然、自後卓庵於士山之麓而居、號云萬松、棧絕世路、足不越閩者又二十年、乃有嚮從來草屋、未目望人煙、當午拾林葉、向宵烹澗泉、綴雲寒、衲厚、擁葉古牀、禪檮外青黃色、令吾知一年之詩、晚付法英、祐畢、乃燒庵而去、無知其所在者。

長安祐禪師傳

禪師諱英祐、自稱受天民、豐之後州人也、卅歲出家、常以己躬下事爲念、年志學許、出而遊方、所到叢林、以偉異而稱、凡參三十餘員之宗匠、僉諳其風骨也、一日道過駿州、偶聞健禪師庵、士山之下、師念、凡僧行脚者、欲逢明師也、何憚尋訪耶、乃就徑參尋、急水灘頭、枯木巖前、難行數十里許、而到健、見師之到、面壁坐定、師就背拜、詎云、弟子數十里、特來禮和尙、請慈悲爲我面著、健不顧、師云、若不面、打殺和尚、健又不顧、師既知、真善知識、乃心計插複子、出去、門外密歸、纔隔牆壁、默窺、出定、健不知、墮其計、漸起出門、師乍自牖邊出、健愕然走入、師追、後便問、如何是山中佛法、健云、溪頭溪尾水猶水、庵北庵南山也、山師脫然信服、乃具威儀禮拜、誓侍左右、汲水採葉、日夕親給、已經一十二載、一日健謂師云、我有破綻衣、重千斤、汝若欲荷負、須全力腕頭始得、老僧既往矣、且持去、遂付師、落淚拜受、晚因一檀越之堅請、開山長安、而居、諸方歸者如雲、每示衆云、參禪須要逢明師、已得逢明師、又須要制心一處、年久月深、漫便梗暖、破草屨、來往江湖、甚年了日也。

東長朔禪師傳

禪師諱玄朔、字龍湫、不記其生緣、暨受業、遍歷之際、聞祐禪師之道、望特來禮謁、祐差侍巾瓶、

日常勤篤，參窮不忽，一日祇試，以牛過窻樞之話，師茫然，祇云：「怎麼參禪，徒費飯錢而已。」師於是勵志，時中憤憤，心未穩，乃詣佛前，誓云：「大事未明，絕不飲食，既不沾唇者，一旬餘，偶聞同行僧讀永平語錄，至赤心片片，誰知得笑，殺黃梅路上兒，忽然大悟，自後不離祇之左右，遂繼席長安，一衆悅服，以道行被世重矣。」師上堂云：「一有多種，二無兩般，中間句子，如何算去，去年年險，無米無麥，今歲歲豐，有菜有菓，下座。」晚開山東長而移，檀護衆服，宛如長安之時也。

安國播禪師傳

禪師諱全，播字天翁，生於信州海野氏家，幼而穩仁，以笑爲常，生不聞啼哭之聲，又無言，鄉人喚作啞子，偶因看佛像，始有言，父母喜躍，問云：「爾既能言，往年奚默然而過？」云：「兒聞日用應對之談，多是流俗鄙事，以是不言耳。」父母驚異，遂聽出家，凡南遊之際，僉以宿德重之，適訪朔禪師於長安，朔一見，乃知其生知，不須一句之辨驗，差處第一座，一夕朔喚師來，謂云：「老僧有疾，不可起，以箇殃傳及汝，遂付衣法，竟乃逝，師不能已，繼席而住，未嘗正自位，設先師之頂相於函丈朝夕，同諸衆作禮，至其年，始止，係此徒衆大服，經遊之者，連環不絕，師每念謝院事，遂繼席懷州，而遁，晚開山安國，以爲終老之地，便有心願，韜藏方十年，一茅初結，得安禪，開爐少附，濕薪火，誤莫揚塵，出我煙之詩矣。」

高照潭禪師傳

禪師諱周潭，字懷州，兒稚依朔禪師於長安，薙染，乃師事，朔歿後，又繼執役衣，孟於天翁，凡侍二師三十餘歲，深窮已躬下事，翁常稱真出家兒矣，偶翁茶話之序，示衆云：「佛法如生怨家，汝無近傍之處，箇中有箇漢，出來結冤棒頭，老僧與箇臭布棍，住院去也。」師出衆云：「人人盡有衝天志，寧向如來行處行，便拂袖出去。」翁指左右云：「非渠志氣，爭得老僧臭布棍，久之得法，出世長安，師爲人極嚴正，凜凜不可馴，近矣，偶有犯寺範者，力擯焉，嘗云：「幸先師令我，主此院，豈敢以放蕩爲樂哉。」聞者悚然，晚年付法續翁，退休西堂，遂開山高照，叢規專則長安。

龍江傳禪師傳

禪師諱宗傳，字續翁，係興州人也，失其姓氏，暨剃度受業，爲人強直，言行甚鄙，所到叢林，喚稱傳野夫，性極聰敏，好能詩文，人以無知焉，一日遊方道過鎌倉，偶到建長寺，諸徒見師之鄙野，失笑戲言，乃高吟自得，傍若無人，漫書一律，教師目之，師目竟便知，詩句漸成，清味未熟，卒賦三律答之，諸徒愕乎，不及擊節，乃避座而去，後謁潭禪師於長安，潭試以僧問雲門，不起一念，卻有過也，否，門云：「須彌山，令師下語，凡七八轉，不契，潭垂誠云：「佛法非識情所通，豈容汝向意根下卜度，珍言華句，以相答耶，若實欲會此段大事，須放下汝聰敏，學得始得，師於是勵志，以從前學得文字冊子等，一時燒卻，極心參窮，已經兩月，到不覺手舞足踏，一夕在堂經行，忽以頭撞著露柱，大悟，直奔方丈，潭云：「傳野夫，大事了畢，師禮拜，住後示衆云：「我在先師會中，從以頭撞著露柱，直至於今，痛未已，晚開山於龍江，及最福橫出二枝法。」

長安播禪師傳

禪師諱要播，字亘天，出於總之上州平氏家也，神性清逸，絕和塵俗，不侶，日常坐閑窻，噓然而樂，父母携投郡之教寺，聽許出家，學通顯密之宗要，憶談甚遠，到處以講經所重，一日逢禪者

詰義乃悔改心禪觀遂遊歷容洞濟之叢社凡扣一百餘處之禪關終後參續翁於長安翁見師之漸入門勵聲一喝喝出師頓足而倒纔當起立豁然大悟便說偈云虛空一聲喝驀地死屍活衲僧入頭門觸處盡通達翁爲印記因焉更衣影響一十七年日到玄奧矣後及翁之移席龍江合寺耆德等同諸護法請師補席師以未練而辭及逼之再三始應志將牧衆者每有超師之作也師上堂云金鷄生鐵卵石牛懷玉兒這裏有消息幾人發真機下座

長安龍禪師傳

師諱神龍自號大雲子無知出處者爲人高尚口以大言而樂所到之處爲衆無不惡去也凡所過二十餘院僉求挂搭不容偶年不惑許始訪播禪師於長安播一見知師之志氣乃容挂搭舉趙州勘婆子之因緣試焉師觀播之志將牧衆深信服不心他遊盡敬參窮脇不至席有年矣一日普請搬柴因極力舉擔猛省急走方丈告播播爲印記乃付法主寺務未幾檀護衆服一倍於先師也添其田園新其堂宇以大興長安道場每示衆云貴佛法遇正師之錯鈍我一聞先師之示誨口耳共喪直至於今冷湫湫地汝等諸人勿容易算年山中矣晚付法門人畢辭衆出去終失所在也今現塔于富川者後人重其德權設以供養云

長安壽禪師傳

禪師諱壽字齡山房州人幼離塵長安隨播禪師薙髮圓戒性極聰敏好事看讀博窮內外典籍一朝自歎云出家以成佛爲本我甚人也漫事看讀典籍不可盡於是專意禪觀乃辭參決諸方又歎云尋師遊歷天下大半徒勞心力行腳甚功之有乃還播問汝離此幾許年云十

年餘播云往來甚處云天下半播云明得甚邊事師無對播云我還草屨錢來師忽然有省自後應用無事時中無礙偶至播之教神龍補席師爲龍典記室十年不改其職也一日龍謂師云老僧以爲先師所歎確乎老於此院汝又被我歎須終命於此遂付法出去於是檀越及耆德等協力延師師素有孤操不可攀也凡經遊之者驗年不能馴近矣末後集衆垂誡乃書偈坐化偈云夜眠日走五十六年瞎眼目處得箇大禪

長安悅禪師傳

禪師諱田悅字長巖不詳其鄉黨矣卅歲脫白長安乃師事播禪師性素枯淡志好頭陀搬柴汲水乞米化炭凡二十年之際苦行拔衆播常稱云再來頭陀後至播之教神龍繼席師爲龍作典座苦行若舊一日龍過庫下偶逢師躬漚米便問米裏甚麼塵垢云糟粕無盡龍云既是無盡何故得漚師聞脫然而立時壽書記侍龍之傍云悅典座始得漚米師於言下頓悟說偈云多年漚有垢今日到無塵斗上滿量米看來本精神龍欣然云汝師壽兄也後來副貳轉化須興吾宗又因龍之教壽書記正位函丈師奉命居第一座久之出世於長安開堂拈香的酬壽禪師之法乳也

長安承禪師傳

禪師諱田承喚云嫡宗衆中讚稱也傳不記甚許生緣始參悅禪師於長安便問如何是學人用心處悅展開兩手云請將心來師茫然悅驀面一掌云要用那箇心麼師言下領旨乃踏折拄杖一住十九年篤爾足不越閭矣乃有千里尋師到富川用心無處始安禪不知幾箇蒲團

破一住方休十九年之偶悅常謂左右云承我嫡宗故衆中以嫡宗而稱悅歿後諸護法請師補席師以薄慧而辭再三之以承我嫡宗之語師落淚不及又辭便設先師頂相於方丈朝拜夕揖宛如事生矣自住偏位至終身也。

金龍適禪師傳

禪師諱僊適自稱古山人武州人也童年出家爲人偉博眼以蓋人自念僧無羈之客豈守古株空留小岐哉遂募圖南之志出遊東關諸名利凡所到叢林無以法話不傾其坐人指目爲飽參末後謁承禪師於長安赤腳露頂春米鋤園二十年一節不移一日聞承陞堂舉達磨不來東土二祖不往西天箇中銀山鐵壁春來鳥啼華笑忽爾有省直詣方丈請印記承問後來有人問洞上宗乘以甚麼答云蘆華無異色白鳥下汀洲承深肯之乃囑云吾宗到汝大興只恐難得人也師拜退承歿繼席出世長安未幾名譽動叢林時大相國忠公嚮師之道價供養武陵大城師爲公法話公喜厚賜珍帛送歸山晚越三州刺史亞相利常卿於金澤創大禪院號云天德將訪求哲匠住持卿遂聞相國忠公公命請師住持卿使士堅請師不答於是公自告師以卿之請意勸師不獲已遂往開法大興洞宗凡衆自江湖輻湊略隸名於籍者暨五千餘指矣僧問如何是和尙家風云嗜葷罵釋迦醉酒打彌勒師性素不喜儻侈常畜一駑馬用備乘輿人相笑之獨自若矣會有微疾自知不可起乃封一枝竹篋與門人高察於長安自題云老僧滅後有一過量人大振吾風汝代傳箇無鼻黑蛇用以爲證書訖端坐而化。

金龍穩禪師傳

禪師諱愚穩字龍睡自稱南山老人別號也加州人卅歲依州之常松寺薙髮天性寬仁面無曠色見者無不馴近也嘗遊方之日參七八員哲匠會其風骨法無異味自負出世崇先並龍門每隨衆叩開論五七年得住持之體例一夕師念參禪以小爲足恐有未聞之處頃聞黃檗琦禪師自明來朝居長崎至人不遙當扣玄關乃發到彼雖入室參請以異言不通未盡諸訛處只自用工夫綿密已經三年嘗無所入師歎云吾此生佛法緣未熟漫勞心力又何益乎辭去時加之天德虛席檀越暨衆等延師師隨緣止息一朝進殿禮佛東見日影在樹枝上而妹俄轉眸之間豁然有省便說偈云三十年來空費神閑塵拂去卻成塵舉頭觸目無遮掩萬象森羅特地新師又念悟處缺決擇於法何益之有遂領徒謁察禪師於長安察一見以獨榻待之乃付法以先師之遺囑師拜受歸院未幾四衆雲輻果如適之所識也一日師行化京師路過黃檗再訪琦禪師琦喜迎炊香別竈次日有機緣琦贈偈以收卷珍藏綿密對機放出一番新之句象山瑄侍琦之傍寄師有鐵額銅頭忻際會風蹄電足展機緣之句寬文庚戌師願印於關山印執禮相見詰以此事機語俱契臨別師執印手云時至莫袖手也於是印始知有師也。

月坡禪師行實

侍者 元曠 元機 元實 等拜撰

禪師諱道印，字月坡，江州大津人。姓源，本貫佐佐木一葉，因祖父逆鄉黨，遁陷民間矣。母大倉氏，一夕夢倚欄採菊華，覺有娠焉。以九月重陽日而生，實寬永丁丑年也。幼孤，事母有孝志。年八歲，謁僊壽印禪師，薙髮，尋依竹龍遵公受業，嘗得書習句讀，不待師訓，大半解其義。一日讀五燈會元，至兜率室中三語，疑情頓發，日用工夫未綿密，偶中華文公行化到竹龍，諸徒請益，文學洞山過水，因緣試焉。師獨茫然，嘗念參禪缺師，豈異守株待兔耶？自勵志辭去，師素古朴，不喜儻侈，冬夏一直襪，內外一袈裟，日常質篤不文，到處以野賤而謾，師確乎不移，只自平易難險，安樂勞苦，腰包獨南，凡所經遊二十餘院，門庭僉以文字議學而高，其開論者，只紙上語耳。師歎云：尋師伶仃天下，既半拄杖頭未嘗撥著會佛法底人，而今叢林實無其人耶？自後行腳，心如咬生鐵，偶到播州，夏坐雲晴寺，有恩道者陸沈衆中，性實朴語少，日夕孤然禪坐，師常友好矣。清話之間，以百丈接野狐之因緣詰論，師自知無徹底慙愧憤發，踰月忘寢食，忽于鐘聲隨杵發之際，死甦一回，頓窮根源，便說偈述所解，恩爲印記，囑云：我昔參三四員，雖密傳此事，以福薄絕不爲人，子向後嗣一禪師，須振洞上化風，師甘心辭去，直到黃檗，謁隱元琦公暨木庵瑄公，即非一公，遂留歸堂。次日，自書修行因由悟證見識，呈瑄目焉，瑄目竟欣然而休。密

謂左右云：此僧有巴鼻子，相傳衆中略知焉。琦之席下一千餘指，師獨被衆中指目，此時叢林便輒暖，以飲食爲宗風，以機緣爲戲論，師獨疾之，乃厭衆辭去，徑上比良山，結茅獅子原而居。性素樂枯淡，煨芋烹泉，孤然自適，偶閱蓮池崇行錄，至百丈海一日不作一日不食之語，因緣遣揮淚云：古人爲法忘躬，既如是我甚人也，乃就市買求農具，即日作務，斫山畚田，種麥栽麻，日用如生業農者也。後及瑄公繼席黃檗，復往訪焉。瑄問：近年在甚麼處？云：比良山住庵。瑄云：庵中事作麼生？云：截斷佛祖縛，常磨吹毛劍。瑄云：庵外事又如何？云：朝朝日東出，夜夜月西沈。瑄休，次日送師，有一輪皎潔挂峰巔，照徹三千及大千，影落寒江波靜處，摩尼性朗太昭然。之偈，一夕師爲郡長見，撼性素卒急不羈，勇離庵而出，書偈壁間，表其志。郡長悔留不復，遂掉頭去，偶有一善信，重師之道風，便補蟬丸翁之舊隱於會坂山，以請作坐具地，師不及辭而留，金龍穩禪師久聞道行，特自加州過訪，師執禮相見，詰以此事，穩遽恨識師之晚，臨別執師手云：時至，莫袖手也。師唯然，寬文中，師掃元古佛之塔於永平，乃賦偈誓與祖宗，遂留典記室，住持慧輪明公，每見喜慰勞問，偶與衆議爲師分半座，衆議如草偃，乃狀請師，師以未鍊，不答。後暨上皇降詔，始受院事，既罷赴闕，謝恩竟歸。時穩禪師達書數請，師不得已，特往訪焉。穩迎入室，師纔跨門，穩便問：開子在獅子原，弄得獅子，試弄出一箇看。云：弄出，即不難，只恐人驚動。穩云：俱弄出看。師驚掀倒禪牀出去，穩大笑云：出窟金毛，振得全威，便請處第一座。是時黃龍虛席，檀越等致誠延師，師以素志辭，強之再三不起，於是檀越等聞州之大守，堅迎以國請，師無語辭，乃往依住持之體例，延寶之間，州中逢大饑饉，師憫爲四衆說法，縑素雲集，滿三萬指，日納

賤金買米作粥力施窮乞水戶侯參議源君佛儒兼崇學通內外典籍偶覽師之山居詩帙深愛其風操乃虛岱宗之席數請師不敢答君執禮高賓盡力而嚮師遂往止息門庭一則百丈古規君自入山訪道禮與黃金及珍菓賑焉師以煎點不待語不及世故只面疎茶一盞禪偈二章而已年未到葺新建法堂爲國開堂江湖龍象翕然而輾已有餘千指崇成列宇置辨什物之外剩贖錢五十萬永捨備結制之資偶稔禪師書到未開封知其趣遽起省覲稔於金龍稔謂師云雲巖路將絕須露打沙彌之棒頭便虛席退西堂時師應水戶請現董岱宗衆係此不能久住遂限日而受合國縑素願見爭先袖香歸者如稻麻竹葦士大夫經遊無間屢常滿戶外延寶之末東阜越公東渡偶與師清談於武陵感悟流涕互如舊識越贈師有汪洋萬派本同源祖道重興啓法筵五位弘通施妙用新豐一曲貴君傳之偈其激揚大事游泳語言備存三會語錄所著詩偈集共行于世矣師天性慈愛風韻奇逸純誠出人言行絕倫日常依法而住節目有令而嚴犯者面折服則口諭克己復禮輒語綿絮無處引去投機觸見高風鐵壁不可攀緣務儉一室布施萬世獨居不越法則群遊不話怪力此師之平生大槩也到其精微非筆墨可形容矣

附錄

右和月坡禪師初會佳韻

東阜心越

宗風丕振有千年豈止鸞膠續斷絃曲調更新常溢耳餘音盡在指頭邊

支桑雖隔久相通血脈冥符繼此宗妙叶正偏俱解得虛空粉碎不虛空

萍逢兩地意何親主即主兮賓即賓觀面少時分袂去他鄉卻遇本來人

有懷月坡禪師再晤

東阜心越

汪洋萬派本同源祖道重興啓法筵五位弘通施妙用新豐一曲貴君傳

雪夜有懷月坡禪師如面

東阜心越

邂逅應知夙有緣不期東武共譚禪月明藏鷺玄中妙銀盃盛雪妙中玄乍別忽驚寒已盡寸心遙憶夜如年何時慰我浮杯客指出金毛白晝眠

月坡禪師語錄卷之二終

國譯狂雲集

解題

狂雲集は大徳寺一休和尚の一代の偈頌を蒐集したるものなり。此の書に三種の既刊本あり、其の一は寛永十九年の版本にして、從來世上に流布するもの多くは是れなり。次に續群書類從文筆部に所收の狂雲集は、内容寛永の刻本と同じく、たゞ續狂雲詩集を加へたるのみ。今一は東京民友社出版の本集は、是れ亦續群の所收本と大同小異なり。今次國譯に際しては、寛永の刻本を底本となし、校合には民友社本に據れり。

宗純字は一休、別に狂雲子と號す。應永元年(紀元二千零五十四年)正月一日に生る。母藤原氏は、後小松帝のために愛寵せられ、その娠めるに速び、諧せられて宮を出で、師を民間に産む。齡六歳にして京の安國寺像外鑑の下に投じて童役を執り、十二歳にして壬生の清叟仁に謁して教乘を聴き、又建仁の慕哲龍梵に依りて詩を作るの法を學び、毎日一首を課と爲す。後に棄て、西金寺の謙翁に參じ、高風に服膺して執侍すること六年、翁の寂するに速び、江州堅田に走り、華叟曇和尚の會下に投す。叟拒んで容れず、即ち漁舟に宿し、或は露地に臥して懇求すること旬日、遂に相見を許さる。一夕鶉鳴を聞

いて、脱然として領悟し、所見を呈す。叟曰く、「此は阿羅漢の境界、作家の境界にあらず」と。師曰く、「某は只だ此の境界を喜び、作家分上を喜ばず」と。叟領いて記を授け、又傳來の印書を以て之に付す。蓋し授受の妄ならざることを表するなり。師便ち地に擲つて出づ、此れより放曠漫遊して定處あることなし。京の尸陀寺、酬恩庵、泉州の慈濟、松樓兩寺は、其の卓錫の地なり。後小松帝讓位の後、召して宮に入れ、常に法要を問ひ、寵遇甚だ厚し。稱光、後花園の二帝相繼いで崇信す。初め稱光帝、未だ東宮を立てず、叙心猶豫す、師密に奏して曰く、「天曆の數正に彦仁親王にあり、時失ふべからず」と。帝喜んで云く、「朕が儲定まれり」と。親王立つ、是れを後花園帝とす。故を以て師は三帝の後を承けて、至る所、衆常に席に盈つ。文明六年の春、同門の耆宿、勅を奉じ來つて、大徳寺に視察せんことを請ふ。師二偈を作つて恩を謝し、自ら警めて終に住せず、但だ風書紫袍を賜ふのみ。七年城州薪の里に門人等壽塔を作る、師勝して慈楊といふ。同十三年十一月初め疾を示し、二十一日偈を書して曰く、「須彌南畔誰會我禪、虛堂來也、不直半錢」と。瞑目して化す。壽八十八、門人全身を昇いて慈楊の塔下に瘞む。滅後三年、門人師の肖像を圖し、入明の客に託して讚を彼の地の名卿に需む。四明の張應麒、仍つて讚して云く、

學通儒典、道闡禪宗、爲叢林之表率、致譽望之尊崇、源源才思、落落心骨、觀止水一而自安、行藏有定、取狂雲一以爲號、變化無蹤、是宜下衍兒孫之昌盛、續燈燭於海東上也耶。

成化乙巳秋七月既望

都臺後人四明仕隱張應麒 焚香拜讚

師は當時祖意を會せずして、濫に大寺に主たる者を憤り、常に跡を混じて威儀に拘らず、城邑聚落を巡行して縑素を論す。又木劍を腰にし、尺八を吹き、偈頌を賦し、和歌を詠じ、頗る其の言行を恣にして風狂の如くす。然も華叟の病に侍しては自ら穢を雪め、又大徳の火後、四方を勸化して法堂を建て、龍翔寺の頽廢するを慨き、縁を募つて舊觀に復するが如き、尚に是れ大信根の所作なり。若し其の細節に至りては、一休年譜に詳かなれば今爰に録せず。

國譯狂雲集上卷

① 虚堂和尚を賛す

育王の住院世皆乖く、法衣を放下して破鞋の如し、臨濟の正傳一點無し、一天の風月吟懐に満つ。(一本放下を抛下に作る。)

② 大燈國師行狀の末に題す

大燈を挑げ起して一天に輝く、鸞輿譽を競ふ法堂の前、風餐水宿人の記する無し、第五橋邊二十年。

③ 如何なるか是れ臨濟下の事。 五祖演

曰く、「五逆雷を聞く。」

機先の一喝鐵圍崩る、五逆元來衲僧に在り、桃李春風清宴の夕、半醒半醉酒繩の如し。(繩を一

① 虚堂は智愚禪師、四明象山の人なり、運庵巖に参じ、大いに契悟する所あり、南宋咸淳五年寂し、臨濟下揚岐方會の流なり。

② 大燈國師の行狀。是れは大燈錄の終りに附せる行狀にて春作禪興の作なり、其の行狀の終に題せられしもの。偶の意に謂ふ、春作は盲坊主なり、國師が天子の歸依を受けられし事ばかり麗々しく書き立てて、第五橋邊二十年を恥と思ふて載せず、何と云ふ手落なりや」と。風餐水宿、頭陀乞食を發揮せられたる作なり。

③ 五祖演。白雲守端の法嗣。雲門宗。青原下雪峰義存の法嗣の雲門文偃の唱道する所。

④ 雲門の公案。例へば「乾屎橛、例一説、須彌山」の如く滔々たる奔流に向つて、雙手能く之れを一決するの概あり、故に紅旗閃爍と評せらる、間に髪を入れず、一閃光の霹靂に忽然大悟を貴ぶ。

⑤ 碧巖集に「雲門大師、八十餘の善知識を出す」と是れなり、以て其の宗風の盛なるを知るべし。

⑥ 雲門、機に應じて往々一字の酬應を用ふ、故に叢林之れを目づけて一字關といふ。例へば、「如何なるか是れ雲門の劍、曰く、「祖、」「如何なるか是れ支中的、曰く、「變、」「如何

本滝に作る。

「如何なるか是れ 雲門宗。」演曰く、「紅旗閃爍。」

華旗風暖かにして春臺に動く、八十餘員師席開く、一字關分 三句體、

幾人か眼裏に紅埃を着く。

「如何なるか是れ 滄仰宗。」演曰く、「斷碑古路に横ふ。」

慧寂は釋迦靈祐は 牛、披毛作佛也た風流、古碑路斷ゆ長溪の客、萬世の

姓名黄葉の秋。

「如何なるか是れ 法眼宗。」演曰く、「巡人夜を犯す。」

一滴の 曹源一滴深し、巡人 闇々夜沈々、青山滿目是れ何の法ぞ、家醜

猶ほ捧心を學ぶが如し。

臨濟の 四料簡

奪人不奪境

百丈滄山名未だ休せず、野狐の身と水牯牛と、前朝の古寺僧の住する

無し、黄葉秋風共に一樓。(僧を一に人に作る。)

奪境不奪人

何なるか是れ吹毛劍、曰く、

「體」の如し。雲門接化の法の

一に數へらる。

①函蓋乾坤、目機鋒兩、不涉世

縁の三句、皆接化の機關とし

て用ひらる。

②五家七宗の一、滄山靈祐、仰

山慧寂を以て祖となす。

③滄山の宗案に、「老僧百年後、

山下檀越の家に向つて、一頭

の水牯牛となり、左脇下に於

て五字を書して曰く、「滄山僧

某甲」と、この時若し喚んで滄

山となさば、又是れ水牯牛、

喚んで水牯牛となさば、又是

れ滄山僧某甲、且く道へ、喚

んで甚麼となさば即ち得て

ん。仰出でて禮拜し去る。」

④羅漢桂琛の法嗣法眼文益の唱

道せし宗旨をいふ。

⑤曹溪の水深きは六祖の流れを

汲むをいふ。

⑥喧しきをいふ。

臨濟の兒孫誰かの傳、宗風滅卻す 瞎驢邊、

芒鞋竹杖風流の友、曲椽木牀 名利の禪。

人境俱奪

雉鷄龜焦身 迤邐、并汾信を絶して話頭圓かな

り、夜來滅卻す詩人の興、桂は折る秋風白露の

前。

①人境俱不奪

道ふ莫れ再來錢半文と、姪坊酒肆に功勳有り、

祇だ人の相如が渴を話すに縁つて、腸斷す琴臺

日暮の雲。(縁を一に因に作る。)

陳蒲鞋

諸人を賣弄し諸方を瞞す、徳山臨濟沒商量、

拈槌豎拂吾が事に非ず、只だ要す聲名の北堂に

屬せんことを。

岩頭船居の圖 二首

國譯狂雲集 上巻

①臨濟慧照大師の爲人の施設。

料簡は標準といふが如し、深

玄なる宇宙の眞理を説明する

四種の範疇、即ち奪人不奪境、

奪境不奪人、人境俱奪、人境

俱不奪これなり、これ參學者

の針南なりと。

②人を奪つて境を奪はず、法の

獨立を示す語なり。即ち一法

立する時は、萬法其の内に接

し、人法の別なく、主客の兩

親なし、法々絶對にして此の

間に何物の出頭をも放さず、

即ち人を奪つて萬法に一如た

らしむるの施設なり。

③百丈禪師の野狐の公案、無門

關に出づ。

④人の獨立を示したる語なり。

人とは自己にして、一切萬法

を以て、直ちに自己の露現な

りとするなり、古人が「盡大

地沙門の一隻眼」といふこれ

なり、尅符、此の意を頌し

會昌以後僧形を毀る、一段の風流、何似生、棹を舞して未だ爲人の手を懐にせず、杜鵑月に叫んで夜三更。

蒲葉半は凋む江漢の秋、生涯受用扁舟に在り、乾坤一箇の閑家具、年代波を撈つて情未だ休せず。

二祖を賛す

大唐今古禪師没し、斷臂の虚傳人知らず、只だ許す、南山道宣が筆、恰も痛所に針錐を下すが如し。

栽松道者を賛す

周家當處に出生し來る、法の爲に身を喪す徒に苦なる哉、宿昔何の時の徳本をか植う、栽松老漢也た黃梅。

松源和尚の三轉語

り。臨濟、僧問ふ、「如何なるは是れ人境俱奪。」師曰く、「竝粉信を絶し、獨り一方に處す」と答ふ。

① 客觀の境の存立を放開して、一切を自由ならしむる積極の手段なり、即ち放行の作略とす。臨濟、僧問ふ、「如何なるかこれ人境俱不奪。」曰く、「王寶殿に登り、野老謳歌す」と。又梵符、頌して曰く、「人境俱不奪、思量意偏せず、主賓言異ならず、問答理俱に全し、澄潭の月を踏破し、碧落の天を穿開す、妙用を明むること能はず、淪溺無縁にあり。」

② 主賓言異ならざるをいふなり。

③ 普原下、龍潭崇信の法嗣、徳山宣鑑禪師なり。

④ 何似生は支那の俗語、恁麼、

甚麼、作麼生などと同じ、何ぞ、如何といふ程の意なり。

① 太祖慧可、賊に遺ひて臂を斫られたるも、法を以て心を御し、痛苦を覺えず、火を以て斫所の血を焼き、帛を斷じて裏み、食を乞ふこと故の如く、曾て人に告げず、後林法師、又賊に臂を斫られ、叫號通夕す、可、爲に治裏し、食を乞ふて林に供す、林、可の手の不便なるを怪み、之れを怒る、可の曰く、「餅食前に在り、何ぞ自ら裏まさる」と。林の曰く、「我れ臂なし、可、知らざるか。」可の曰く、「我れ亦臂なし、復た何ぞ怒るべけん」と、唐の南山道宣律師の筆になる續高僧傳にあり。世此の斷臂を、可自ら雪中に斷ちて達磨に示すといふ、故に之れをいふなり。

② 五祖大滿弘忍禪師の異名、舊

① 大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さざる

鬼窟黒山の禪を商量して、神力の金剛目前に現す、普天の下是れ王士、脚を擡ぐる句中公案圓かなり。

② 口を開く、甚に因つてか舌頭上に在らざる

③ 三寸の舌頭禍門を開く、河沙の諸佛轉た多言、夜來百勞五更の月、奈ともせず聲々夢魂に祟ることを。(月を一に目、或は日に作り、祟を崇に作る。)

④ 明眼の禪僧、甚に因つてか脚跟下紅絲線不斷なる

⑤ 二三四七諸禪師、衆を領じ徒を匡して心絲を亂す、錢に因つて癖有るは是れ和嶠、娘生脚下血淋漓。

虚堂和尚の三轉語

己眼未だ明かならざる底、甚に因つてか虚空を將つて布袴と作して着く。

畫餅冷腸飢未だ盈たす、娘生の己眼見て盲の如し、寒堂一夜衣を思ふ意、羅綺千重暗に現成。

説に曰く、「四祖大醫禪師、牛頭山に居る、山中に老僧ありて松を植う、人呼んで栽松道者となす、曾て四祖に請ふ、「法道開くことを得べきや。」曰く、「汝已に老ゆ、聞くことあるも、夫れ能く化せんや」と。儻し能く再來せば、吾れ尙ほ汝を待つべし」と。乃ち去つて水邊に行き、周家の女子の衣を洗ふを見、搦して曰く、「宿を寄することを得るや否や。」女曰く、「我れに父兄あり、往いて之れを求むべし。」曰く、「諸せば我れ即ち行かん。」女之れを首肯す、僧策を回らして去る、女歸つて懐ち孕む、父母大いに之れを感みて逐ふ、女一子を生む、不祥として水中に棄つ、明日之れを見るに、流に浜つて上る、氣體鮮明なり、大いに驚いて之れを擧ぐ、童となりて

地に割して牢と爲す底、甚に因つてか
者箇を透り過ぎざる。

何事ぞ春遊興未だ窮らず、人心は尤も是れ
客盃の弓、天堂成就し地獄滅す、日は永し落花
飛絮の中。

海に入りて沙を算ふる底、甚に因つて
か針鋒頭上に足を翹つ。

土を撒し沙を算へて深く功を立つ、針鋒に足を
翹つて神通を現す、山僧が者裡無能の漢、東海
の兒孫天澤の風。

大燈國師の三轉語

朝に眉を結び、夕に肩を交ふ、我れ何
似生。

透關更に一重の關有り、例に隨ひ條に依る攀づ
可からず、奇菓の 荔子天上の味、名は天寶よ

母に隨つて食を乞ふ、邑人呼んで無生兒と爲す、今の五祖大師これなり」と、後黃梅に居る。

松源年二十二にして靈石妙に謁し、徑山に大慧果に見ゆ、後應庵に參じ、大いに得所あり、隆興二年白蓮精舍に得度し、諸尊宿の門を叩き、慶元元年詔を奉じて靈隱寺に住す、語錄二卷あり。

大悟底の人などに同じ、又力量の大なる人にもいふ。

俱舍世間品に「黒山の地下獄あり」と。鬼窟は死人の入り暗黒界、動きのとれぬ、自由のきかぬことにいふ。

言必ずしも口を開くを須ひず、以身説これ尊し、無言の月其く其の明を輝かす、之れによりて萬靈を度す、人も正にかくの如くなるべき。

口は却つて之れ禍の門、如か

寸回の終日愚なるには、
① 足下の縛纏纏絆を断たざるといふが如し。

② 六祖及び達磨を云ふ。
③ 寂滅現成にして涅槃の現成するをいふ。

④ 客、盃中の弓影を見て蛇となす、遂に病む、後其の弓影なるを知り、即ち愈ゆ」と。天堂地獄迷悟の内に入り。

⑤ 大德寺開山宗峰妙超禪師、花園上皇特に勅して興禪大燈國師と賜ふ。

⑥ 荔子は熊眼肉をいふ。
⑦ むきだしの柱、目に見えて居る柱、燈籠、橋壁、瓦葺などの語と共に、無情又は非情の意を現はす代表語に用ふ。露柱に問取し去れ」といふが如き是れなり。

⑧ 幽深玄妙の理なり。
⑨ 生死煩惱の羂絆を脱するなり。

り人間に落つ。(子を一に支に作る。)

露柱盡日往來、我れ甚に因つてか動かざる

草鞋脚瘦せて知音没し、露柱同行我が吟に伴ふ、錢に靈神有り十萬貫、
杜鵑血に啼いて春心に託す。

若し箇の兩轉語を透得せば、一生參學の事畢んぬ

二十餘年曾て苦辛す、乾坤誰か是れ我が般の人、參じ來つて直に 幽玄の
底に徹す、 歇し去つて獨り要路の津に登る。

靈山 徹翁和尚の最後の垂示を擧して、以て徒に示す。其の垂示に
云く、「正法眼藏人に付する無し、自ら荷擔して 彌勒下生に至

る。噫。」

古佛靈山名虚しからず、當來の彌勒是れ同居、兒孫一箇の狂雲子、邪法大いに興つて殃餘り有り。
(「虚し」を一に「空し」に作る。)

牢關の一句工夫を費す、百鍊の精金再び爐に入る、話して當來來劫の曉に到る、只だ愁ふ枕上に夢魂
無きことを。

凡そ參禪學道の輩は、須らく日用清淨なるべし、日用不淨なる可からず。所謂、日用清淨と

は、一則の因縁を究明して、無理會の田地に到つて、晝夜工夫怠らず、時々根源を切斷して、佛魔も窺ひ難き處、分明に坐斷して、往々に名を埋め跡を藏し、山林樹下に、一則の因縁を擧揚し、時に無雜純一なり矣、之れを日用清淨の人と謂ふなり。然り而して吾れは善知識と稱して、杖拂を擎げ、衆を集めて法を説き、人家の男女を魔魅し、心に名利を好んで學者を室中に招き、玄旨を悟らしめんと道ふ。參せしむる者、相似模様の閑言語、教へしむるもの、片箇の情なり。這般の輩は非人なり、寔に日用不淨の者なり。佛法を以て度世の謀と爲す、是れ世上榮街の徒なり。凡そ身あれば着すと云ふこと無く、口あれば食はすと云ふなし。若し此の理を知らば、豈に世に街はん哉、豈に官家に諛はん哉。是の如きの徒は、三生六十劫、餓鬼に入り、畜生に入りて、出期無かる可し。或は人間に生るゝも、癩病の苦を受け、佛法の名字を聞かず、懼る可し、懼るべし。(時々を一本に時今に作る。)

右靈山徹翁和尚、榮街の徒に示すの法語、其の後に題すと云ふ

工夫是れ涅槃堂に非ずんば、名利前に輝いて心念忙し、道ふことを信ず人間食籍の定、羊麀一椀橋皮湯。

元正

現成の公案天真に任す、風曆元を開く世界の春、今日山僧眼を換卻す、

① 欺瞞などに同じ。

② 自ら世に街ひ榮ゆるを求むるなり。

③ 萬法本閑なり、而して人自ら忙しきは名利、前に在るが爲なり。

④ 弊に同じ。

⑤ 風曆は一月元旦なり。

堂中の古佛一面門新なり。

桃花浪

隨波逐浪幾紅塵ぞ、又値ふ桃花三月の春、恨を流す三生六十劫、龍門歲々金鱗を曝す。(一本金鱗を腮鱗に作る。)

端午

千古屈平情豈に休せんや、衆人此の日酔つて悠々たり、忠言耳に逆ふ誰か能く會せん、只だ湘江の順流を解する有り。

冬至示衆

獨り門關を閉ちて方を省せず、這中誰か是れ法中の王、諸人若し冬來の句を問はゞ、日は今朝より一線長し。

佛誕生

三世一身異號多し、何人か今日誦訛を定めん、娑婆來往八千度、馬腹驢胎も亦釋迦。

佛成道

天上人間獨尊と稱す、今朝成道誰か恩を受く、分明なり衲子流星の眼、

① 宇宙は所現の萬法其の儘が悟の現れであるといふこと。公案は師家が學人を提擧するに用ひる警策なり。山房夜話に曰く、佛祖の機緣日づけて公案といふも又爾り、蓋し一人の臆見に非らず、乃ち靈源を會し妙旨に契ふ、生死を破り情量を超えて三世十方百千の開土と同稟の至理なり」と。公案の語の源に現れたるは、黃髮希運禪師の「昨日公案老僧休去」を以て始めとす。又廣義には至理の所在、大道の歸結するところを謂ふ。

② 傳説に「禹門三級の浪あり、三月に至る毎に、桃花の浪漲る、魚能く水に逆ひ躍つて浪を過ぎるものは龍と化し、風雷を起し、其の尾を焼いて天に登る」と。之れを騰出したるなり。

便ち是れ 瞿曇の孫。

佛涅槃

滅度す西天の老釋迦、他生に出世して誰が家にか到る、二千三百年前の涙、猶ほ 扶桑二月の花に洒ぐ。

達磨忌

毒藥數々加ふ賊後の弓、大千逼塞す佛心宗、西來意無し我れ意有り、熊耳山中落木の風。

大燈國師百年忌 二首

曩に青銅を覓むるに半文無し、恩に耐ゆる一句豈に群を驚かさん、祖師の遷化已に百載、空しく婆年を拜す婆子が裙。兒孫多く踏む 上頭の關、一箇の狂雲江海の間、大會齋還つて何の處にか在る、白雲飯を蒸す 五臺山。

種の別姓なり、瞿曇氏を釋氏と云ふより、釋尊を稱して直ちに瞿曇と爲すことあり。

扶桑は日本をいふなり、東方朝十州三島記に、扶桑は碧海の中に生じ、葉皆桑の如し、又椀子あり、樹長き者數千丈、徑三千圍、樹兩々根を同じうして偶生すと。支那人の我が國を扶桑と云ふは之れに原づく。日本にても矢張り二月拾五日には、涅槃忌に涙を洒いで當日を追想す。

梁の大通二戊申十月五日示寂す、故に其の日に、法會を勤修するをいふ。
陝州の東にあり、達磨を葬る所なり。
大燈國師の三轉語に、遼關更に一重の關ありと。
支那山西省代州五台縣、今の西安府の東北六百華里の地にあり、一に淨涼山、單に台山

五月五日をいふ、又端五とも書す、五節句の一なり。

楚人、戰國時代の人なり、懷王に事へ精忠無比なり、諫人令尹子蘭の爲に疎せられて、懷王の子襄王に至り、遂に之れを遷す、離騷の賦を爲り、沙を擲いて湘水に沈む。此の日五月五日即ち端午の日なり、楚人これを憐み此の日に至り、竹筒の中に米を入れて湘水に投じ、之れを祭るといふ。

冬至は最短の日、其の裡に最長を含み、一陽來復の時、既に之れを知るなり。
過去、現在、未來に於て、法報、應の三身あるをいふ。
到る處法身の實現なるをいふなり。
瞿曇彌、喬答摩ともいふ、梵音ヒーマタ (Gotama or Gautama)。地最勝と譯す、釋迦

僧 岩頭に問うて云く、「古帆未だ掛けざる時如何。」頭云く、「小魚大魚を呑む。」僧云く、「掛けて後如何。」頭云く、「後園の驢草を喫す。」

寒溫苦樂慚愧の時、耳朶元來 兩片皮、一二三分三二一、南泉手に信せて猫兒を斬る。

雲門、衆に示して云く、「古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「南山に雲を起せば、北山に雨を下す。」

小姑底に縁つてか彭郎に嫁す、雲雨今宵夢一場、朝に 天台に在り暮に南岳、知らず何の處にか 詔陽を見ん。(詔陽を一に昭陽に作る。)

苦中の樂

酒三盃を喫して未だ唇を濕さず、曹山老漢孤貧を慰す、直に身を火宅の中に横へて看れば、一刹那間萬劫の辛。

樂中の苦

此れは是れ瞿曇の曾て經し所、麻衣草座六年の情、一朝點檢し將ち來つて看れば、寂莫たり 靈山身後の名。

百丈野狐

とも云ふ。六朝時代より支那に於ける佛教上の一大靈地とし、文殊菩薩の靈顯を感得せんに爲に來詣するもの頗る多し、無著、文喜、五台山にありて典座と作る、文殊菩薩上に現す、無著遂に之を打して、「直健ひ釋迦老子來るも、我れ亦打せん」と。此の因縁によりて之れをいふのみ。
徳山宣鑑禪師の法嗣なり。
當然のことを當然にする何の不思議のことはない。
口のことをいふ。
南泉普願禪師、座下の雲水に對する提示なり。美事なる隨前、之れに比すべし。
雲門の古佛露柱の公案なり。
南山に低氣壓を起せば、北山驟雨あり、南山北山共に知らずして、疾風驟雨同時なるが如し。
支那浙江省台州府天台縣の北

千山萬水野僧の居、甲子今年五十餘、枕上終に老來の意無し、夢中猶ほ讀む小時の書。

聞聲悟道

擊竹一朝所知を忘す、聞鐘五夜多疑を絶す、古人立地皆成佛、淵明が端的獨り眉を擧む。

見色明心

憶ひ得たり寒山月を見るの題、眼睛地に落ちて衆生迷ふ、洛陽三月貴遊の客、閃爍たる紅旗殘照の西。

聞聲悟道、見色明心、雲門拈じて云く、

「觀世音菩薩錢を將ち來りて、胡餅を買ひ、手を放下して云く、元來是れ、饅頭と。」即ち觀音に現す奴婢の身、饅頭胡餅精神を谷ふ、舊時忘れ難し見聞の境、滿目山陽笛裏の人。

佛の説法の聲をきいて悟る人といふ意。

香嚴知閑禪師、武當山に庵を卓して憩止す、一日庭前を拂淨する次、小石の竹を擊ちて憂然響をなすに遇ひて、忽然大悟し、鴻山の印可を受く。

清夜の鐘聲をきいて、夢中の聲を喚びさます。

朗月の天にある、月光の地にある、是れ皆見性の種子なり、洛陽三月酒旗の店頭に飄るも又同斷。

從容錄八十二則にあり。

諸葛武侯、孟獲を征する時、羊豕の肉を交せて之れを包むに麴を以てす、人の頭に像りて、人の首に代へて神を祀りしことあり、これに基づく。

三十三應身の所なり。

丁度昔時の知親に逢ふ感ぜずるとなり。

大隨法胤禪師、長慶大安禪師

にあり、天台宗の根本地にして、智者大師の開く所、南岳は支那湖北省荊州府の附近にある山の名、陳の大建二年慧思禪師、門人四十餘人と共に此處に居す、後六祖の法嗣懷讓禪師又此所に居る。雲門の別名なり、雲門は韶州の地にあるを以てなり。洞山真价禪師の法嗣にして、元證大師と諡す。經に曰く、「三界無安猶如火宅」と。釋尊樂中の苦を觀じ給ひて、遂に出家し給ふ。臘月八日未明、明星の輝くを見て忽然として大悟し給ふ。釋尊、迦葉尊者に傳法衣鉢の靈地なり。不落、不昧、又は百丈墮野狐身の公案ともいふ。自ら野狐禪に比す、因果一如當體脱落をいふなり。

大隨庵邊に一龜有り、僧問ふ、「一切衆生

は皮骨を裹む、這箇の衆生、甚としてか骨皮を裹む。」大隨草鞋を以て背上に蓋ふ。衆生顛倒幾時か休せん、前頭を打着して又後頭、手に信せて猫を救ふ趙州老、草鞋戴き去る也た風流。(戴を一に載に作る。)

黄檗、佛を禮す

龕行の沙門鬼眼開く、身長七尺甚だ奇なる哉、知らず何の處にか黄檗を見ん、法を立つる商君法を破り來る。

臨濟机案 禪板を燒く

此の漢宗門第一の禪、奪人奪境、體中玄、安身立命那の處にか在る、劫火洞然大千を燒く。翠岩夏末に衆に示して云く、「一夏以來兄弟の爲に説話す、看よ翠岩が眉毛在り麼」

の法嗣。皮は身、骨は心、此の僧未だ心身不二を覺らず、故に心内に身あるや、身内に心あるやを一龜を借りて問ふ、心身滅して大眞現するを示すため、之れを覆ふ妙手なり。

南泉、猫兒を斬る前話を舉げて趙州に問ふ、州便ち草鞋を脱して頂上に於て戴いて出づ、南泉云く、「若し子在りしならば、恰も猫兒を救ひ得てん」と。此れと風流好一對なり。

黄檗希運禪、參學の頃、驪官齊安國師の會下に在つて首座となる、時に宣宗皇帝未だ位に即かざる以前、甥の武宗に逐はれ、香巖に就いて沙彌となり、驪官の會下にありて書記となり、黄檗と連單なりき。一日黄檗、佛殿に到りて禮佛す、書記即ち問ふ、「佛に

著いて、求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、長老禮を用ひて何かせん。」衆曰く、「佛に就いて求めず、法に著いて求めず、常に禮することは、事のごとし」といひをはりて、書記を一掌す、書記曰く、「大轟生。」黄檗曰く、「這裏是れ什麼の所在ぞ、細と説き、麤と説く。」更に又一掌す。

衛轍商君、刑名の學に通じ、秦の孝公に仕へ、變法の令を定め、遂に自ら法の爲に惠王の爲に車裂の刑に遇ふ。南君は法に没し、黄檗は法に淨ぶ。

坐禪の時、勢を除かんがために衆僧の蓄ふる板にして、或は手を案じ、或は身を靠らす器なり。

奪人奪境の所、正に劫火洞然、安心立命此の中にあり。

保福云く、「賊と作る人心虚る。長慶云く、「生也。雲門云く、「關。眉毛公案爛泥荆、保福雲門同道に行、長慶身を藏して還つて影を露す、小樓南畔月三更。

翠岩眉毛を示す圖

寶中主有り主中の寶、關字失錢生也親し、賊賊賊賊、拿不得、當頭姦黨是れ何人ぞ。

梅子熟す

熟處年年猶は未だ忘れず、言中に味有り孰か能く嘗めん、人斑初めて見る大梅老、疎雨淡烟青已に黄。(年々を一に年來に作る。)

盲

瞎瞞は受けす靈山の記、四七二三須らく愧慚すべし、豈に光影邊の事に墮在せんや、銅睛鐵眼是れ同參。

雙

拂を掛けて呵せらる百鍊の金、天生懷海耳根深し、眞聞眞箇何の處にか在る、爲に鼓す無絃一曲の琴。

啞

一句披かんと欲す吾が鬱襟、舌頭齧を挂へて笑ひ吟々たり、靈雲答へす長生の問、誰か識らず金言猶は心に在り。(長生を一に長慶に作る。)

船子釣臺の圖 二首

金鱗得難し急流の前、坐斷す釣臺三十年、絲線一たび通ふ名利の路、子陵は咲ふ可し、夾山の禪。

千尺の絲綸豈に收むるを得ん、一天の風月一江の舟、舟翻り人去つて名猶は在り、洙水何に因つてか逆流せざる。

賊

春風を惱亂して何の成る所ぞ、遊絲百尺多情を惹く、知らずんば桃花に問取し去れ、靈雲の雙眼睛を換却す。

清素首座を賛す

荔子食し罷んで吾が曾を記す、三十年來一箇の僧、杜牧の平生丈夫の志、老いて氣力無うして、昭陵を望む。(子を一に支に作る。)

兜率悅禪師を賛す

① 峰義存の法嗣、保福、從展、長慶、慧稜、雲門、何れも雲峰の神足なり。

② 補ふことを得ざるをいふ。

③ 大梅法常禪師、馬祖下の寮宿なり、曾て馬祖に參じて問ふ、「いかなるか是れ佛」と。馬祖曰く、「即心即佛」と。師言下に大悟し、それより大梅山に深居し、松實を食とし、荷葉を衣とし、只管打坐すること三十年なりき。一日馬祖故らに僧を使はして問はしむ、「和尚そのかみ馬祖に參見して何の道理を得てか此の山に住するや。」師曰く、「馬祖吾れに向つて即心即佛と言ふ、我れより此の山に住せり」と。僧曰く、「馬祖佛法近來別なり。」師曰く、「作麼生か別なる。」僧曰く、「馬祖曰く、非心非佛と。」師曰く、「道の老漢人を感亂すること了期あるべからず。さもあらばあれ非心非佛、我れは祇だ即心即佛と。」僧還りて馬祖に舉似す、馬祖曰く、「梅子熟せり」と。

④ 盲目の瞞をいふ。

⑤ 百丈懷海禪師、馬祖道一禪師の法嗣なり。

⑥ 無絃の琴、無孔の篋笛、鼓吹し得て之れを不聞裡に聽き來つて、始めて眞箇の消息を得るなり。

⑦ 鴻山靈祐の法嗣、桃花を見て悟道す。

⑧ 藥山惟儼禪師の法嗣。

⑨ 嚴子陵、光武帝諫議に拜す、受けず、富春山に耕釣す、今釣臺あり。

⑩ 夾山は船子の法嗣、善會禪師なり。

⑪ 「かげらふ」又「いと」と云ふ。沈約の詩に「遊絲空に映じて轉す」と。

⑫ 香嚴の擊竹、靈雲の桃花、天

素老は天生薄福の徒、佛魔公案的傳無し、鬱襟忽ち發す烈史の筆、永く辱づ楊雄莽が大夫。(二三句一本)的禪の門弟一人無し、思深うして報じ難し佛魔の語しに作る。又永辱を未辱、或は可惜に作る、可惜是なるに似たり。

圓悟大師の投機

沈吟す小鏡一章の詩、乾坤を發動して大機を投す、擊竹見桃若し相問はば、須彌脚下の赤烏龜。(問を一に比、又は間に作る。赤烏を石鳥に作る。)

松源和尚の塔銘を覽る

治父住持功空しからず、貧を祓ひて富と作す甚の家風ぞ、看來り數を省すれば錢猶は在り、識らず脚跟絲線の紅。(紅を一に功に作る。)

魚籃觀音を贊す

丹臉青鬢慈愛深し、自ら疑ふ雲雨夢中の心、千眼の大悲看れども見えす、漁妻江海一生の吟。

經卷不淨を拭ふ 三首

經卷は元不淨を除くの殿、龍宮海藏言詮を弄す、看よ看よ百則碧岩集、狼藉たり乳峯風月の前。

續編目見道の文、徒らに多情千金を逸し去ることを。

唐の京兆萬年の人なり、豪放にして奇節あり、詩をよくし、杜甫に對し小杜と稱す、その卒せんとするに當り、平生作る處の文章をことごとく燒き、自ら墓誌銘を作るといふ。

唐の太宗の陵なり。

兜率從悅禪師、寶峰克文禪師の法嗣、無盡居士は其の門人なり。

字子雲、蜀郡成都の人、辭賦を好み、成帝の時、相如に似たる者を薦むるあり、大吏を作る。王莽に仕ふ、王莽、後に反逆す、故にしかいふ。

臨濟下九世、五祖法演の法嗣。

香嚴、靈雲の因縁なり。

崇岳松源、徑山に大慧果に見え、後應庵に參じて大に得所あり。

弓影客盃多く腸を斷つ、夜來新病膏肓に入る、愧慚す我れ禽獸に及ばざるを、狗は尿す栴檀の古佛堂。

手に信せ拈じ來つて不淨を除く、作家面目露堂々、南山雲起り北山は雨、一夜落花流水香し。

大慧禪師碧巖集を焚く

妙喜老人千歳の名、宗門の潤色、太高生、子胥曾て吳王の戮を受く、惜む可し獨體の眼睛無きことを。

牛

異類行中是れ我が曹、能は境に依り也た境は能に依る、出生忘卻す來時の路、識らす當年誰が氏の僧ぞ。(我が曹を一に我が曾に作る。)

蛙

鯨鯢を釣るに慣れて笑一場、泥沙に歩を碾りて太だ忙々、憐む可し井底に尊大と稱す、天下の衲僧皆子陽。

尺八

一枝の尺八恨任へ難し、吹いて胡笳塞上の吟に入る、十字街頭誰が氏

あり。

觀音の應以三十三身得度者既皆現此而以說法の誓願に出づる一例を假説せるものとす。

首楞嚴に云く、一目三目四目九目はの如く、乃至、一百八目千目萬目八萬四千の清淨實目に因つて或は慈、或は威、或は定、或は惠、衆生を救護すること大自在を得たりと。

大海の中にある龍王の居所なり。瑜伽論記に、大海の中、婆伽羅龍王宮殿有り、縱廣正等八萬由旬、又須彌山特雙山中間、海内後難陀曼婆羅陀二龍王宮殿あり云々と。

響寶山の別名、響寶重顯禪師、此處に碧岩集を編む。

左傳に、晉公病む、醫を泰に求む、醫至る、病膏の下、背の上にあり、爲むべからずとあり、之れに基づく、不治

の曲ぞ、少林門下知音少なり。

傀儡

一棚頭上に全身を現す、或は王侯と化し或は庶民、目前眞の木概を忘卻して、痴人は喚んで本來の人と作す。

羅漢菊

茶褐黃花秋色深し、東籬の風露出塵の心、天台五百の神通力、未だ淵明が一片の吟に入らず。

菊 羅漢 楊妃同瓶

楊妃爛醉す一籬の秋、茶褐相交りて好仇を爲す、神通を失却して下界に居す、應身は天寶の辟陽公。

雪團

乾坤埋没して門關没し、收取して即今雪山と爲す、狂客時に來つて百雜碎大千起滅刹那の間。

嫌佛閣

德嬌韶陽門大いに開く、喚んで嫌佛の一樓臺と爲す、這般の知識邪法を説

く、問話の者は魔界より來る。(韶陽を一に韶陽に作る。)

鯨齋

古佛堂中露柱に交る、斬つて兩段と成して誦訛を定む、青山綠水一閑客、咲ふ可し岩頭の黒老婆。

竹幽齋

香嚴多福主中の賓、密々參禪要津に到る、六々元來三十六、清風動く處佳人有り。

陋居

目前の境界吾が權せたるに似たり、地老いて天荒れて百草枯る、三月春風春意没し、寒雲深く鎖す一茅廬。

如意庵 校割の末に題す

常住物を將つて庵中に置く、木杓箆籬壁東に掛く、我れに此の如きの閑家具無し、江海多年簑笠の風。

如意庵退院 養叟和尚に寄す

住庵十日意忙々、脚下の紅絲線甚だ長し、他日君來つて如し我れを問はゞ、

の病をいふ。

雲門云く、「古佛露柱と交はる、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて曰く、「南山雲を起し、北山に雨を下す」と。

南嶽下第十五世の祖、圓悟克勤に嗣ぐ。

大慧禪師をいふ。

高く止つて居る意、向上一色邊に止り居る者を評する語なり。

楚人なり、名は眞、吳王に仕ふ、吳王齊を伐たんとす、子胥之れを極諫す、王遂に之れに劍を給ふ、自ら到れ死す、舍人に告げて曰く、「我が眼を抉り、吳の東門の上に懸け、以て越寇の入りて吳を滅すを觀せしめよ」と。

鴻山、一日衆に示して曰く、「老僧百年後、山下檀越の家に向つて、一頭の水牯牛となり、左脇下に於て、五字を書

して曰く、「鴻山僧某甲」と、この時若し喚んで鴻山僧となさば、又是れ水牯牛、喚んで水牯牛となさば、又鴻山僧某甲、且く道へ、喚んで其塵となさば、即ち得てん。仰山出でて禮拜して去る」と。此の因縁を觀出したるものか。

破る、きしる。

胡人蘆葉を卷いて吹く、其の聲悲しと。

人形廻しなり。

木の「くひ」様のもの、人形をいふ。

東のまがき、東籬の君は菊をいふ、陶淵明が東籬に菊をうゑしよりいふ。

天台山の石橋は、古來五百羅漢出現の靈場として大いに崇敬せらる。

黄花淵明が詩に入ると雖も、茶湯の入りざるをいふ。

楊妃、唐の玄宗の寵妃なり、

魚行酒肆又淫坊。(「如し」を一に「若し」に作る。)

南江の山居に寄す

天下の禪師人を 賺過す、黒山鬼窟精神を弄す、平生杜牧は風流の士、吟
斷す 二喬銅雀の春。

偶作

昨日は俗人今日は僧、生涯 胡亂是れ吾が能、黃衣の下名利多し、我れは
要す兒孫の大燈を滅せんことを。

山路 讓羽

聲を呑んで透過す鬼門の關、豺虎蹤多し古路の間、吟情終に風月の興無し、
黃泉の境は目前の山に在り。(透過を一に閑過に作り、吟情を一に吟杖に作
る。)

山居 二首

姪坊十載興窮め難し、強ひて空山幽谷の中に住す、好境 雲遮る三萬里、
長松 耳に逆ふ屋頭の風。
狂雲は眞に是れ大燈の孫、鬼窟黒山何ぞ尊と稱せん、 憶ふ昔簫歌雲雨の

夕、風流の年少金樽を倒せしことを。(雲雨を一に雲南に作る。)

山中 典座に示す

歸宗の一味日興の餘、典座山中功虛しからず、 淨名 香積の飯を覓むる
を休めよ、何の時か饅に美雙魚有らん。

山中南江の書を得

孤峯頂上草庵の居、 三要印消して功未だ虚しからず、意はざりき玄中に
玄路有りとは、萬行涙を哀む一封の書。

山中より市中に歸る

狂雲誰か識らん狂風に屬するを、朝に山中に在り暮には市中、我れ若し機
に當つて棒喝を行せば、徳山臨濟面通紅。

昔一婆子有り、一庵主を供養して二十餘年を経、常に一の二八の女
子をして飯を送り給侍せしむ。一日女子をして抱定せしめて云はし
む。「正與廢の時如何。」庵主云く、「枯木寒巖に倚る、三冬暖氣無
し。」女子歸つて 舉似す、婆子云く、「我れ二十年只だ箇の俗漢を供
養し得たり。」追ひ出して庵を焼却す。

紅花をいふ。

好對といふに同じ。

唐玄宗の年號なり。

香殿、聖竹の聲をきいて大悟す、故に之れを云ふ。

此の佳人、是れ大悟底の因縁なり。

寺の什物帳なり、新舊交代の時、什物と自己の所有物とを區分明記して、疑なからしむるものなり。

釋宗頤、養叟と號す、大德寺に住す、後花園帝召して法を受く、宗慧大照禪師の號を賜ふ。

たぶらかすを云ふ。
杜牧之の赤壁の詩に曰く、折戟沙を沈めて恨未だ銷せず、自ら磨洗を將つて前朝を驗めす、東風周郎の興に便ぞすんば、銅雀春深うして二喬を鎖さん」と。赤壁の戦に曹操、周瑜の爲に破れ、二喬をとら

る。(二喬は二人の美女、喬公の兩女をいふ。)

「うらん」、苟且、曖昧、怪訝、あてにならぬ等の意あり。

往時を追想するなり。

六知事の一、衆僧の辨食を掌る役なり。

淨名は維摩居士なり、維摩經に曰く、「化菩薩滿鉢の香飯を以て維摩詰に與ふ、舍利弗、諸の大聲聞に語けて曰く、「仁者は如來甘露の美飯を食ふべし、大悲の所薰にして、意に限ることなし、之れ食し消せざらしむるなり、眞の聲聞あり、念すらく、此の飯少し」と、化菩薩曰く、「聲聞の小徳小智を以て、稱量すること勿れ、四海盡くるとあるも、此の飯盡くるなし、一切の人をして食せしむ」と。」

臨濟爲人の機關、第一要、第二要、第三要、又三玄あり、

老婆心賊の爲に梯を過す、清淨の沙門に女妻を與ふ、今夜美人若し我れに約せば、枯楊春老いて更に梯を生ず。

畫虎

觀面當機誰か一撈せん、寒毛卓竪老岩頭、恠しい哉備扶桑國に在り、寢々たる威風四百州。

宗新藏主、製墨以て業と爲す、偈以て之れを送る。(一本に「偈以て」の字なし。)

萬杵の霜花華頂の天、商量し來つて多錢に直らす、何ぞ須ひん知藏の經卷を書することを、小艶詩を題して少年を街はん。

病僧紹珠首座に示す

業識忙々劫空よりす、平生の伎倆今に到つて窮る、四百四病一時に發す、苦屈苦辛安樂の中。

宗春居士の 下火 行年三十七

彌勒釋迦也た馬牛、春風に惱亂して卒に何ぞ休せん、六々元來三十七、一聲の念讚鐘樓より起る。

第一、二、三、これなり。

①「かくの如き時如何」なり。

②婆子に告げるなり。

③一休の活禪、蓋し技に見るべし。

④觀面は「まのあたり」といふことなり。

⑤岩頭和尚、常に曰く、「死にあつて正に一吼すべし」と。

⑥唐の光啓中、中原賊起り、師を責むるに、供の饋ることなきを以てし、遂に刃を構するに、神色自若、大いに吼ゆること一聲了つて寂す、其の意氣又比すべき。

⑦知識に同じ、經藏を掌る後、今の圖書館長の如きもの。

⑧地、水、火、風、それれん、黃病、疾病、熱病、風病、各々百一を配し、合して四百四病となす。

⑨下炬に同じ、松火を以て火を點すること、火葬式最後の作

病中人の 曲様を送るを還す

法座上の禪は名利の基、諸方堅拂と拈鈍と、圓悟金山大病に遭ふ、苦吟す小艶一章の詩。

文安丁卯の秋、大徳精舎に一僧有り、故無くして自殺す。事を好むの輩、遂に之れを官に誣す。其餘殃に繋りて、囚禁に居るもの七五輩、吾が門の大亂と爲すに足る。時の人喧傳す焉。予之れを聞いて、即日迹を山中に晦ます、其の意蓋し忍びざるに出づるのみ。適々學者の京城より來り、本寺件々の事を説く、愈々慨嘆に堪へず。偈を作り懷を言ふ、時に 重陽に値ふ。故に九篇を成すと云ふ。(「本寺件々の事を説く、愈々慨嘆に堪へず」を一本「本寺件々の故を説く、愈々慨嘆に勝へず」に作る。)

地老い天荒る龍寶の秋、夜來風雨惡うして收め難し、他に對して若し是非の話を作さば、雲門關字の酬に彷彿たらん。

慚づ我れ聲名猶ほ未だ韜ます、參禪學道塵勞を長す、靈山の正法地を掃つて滅す、意はざりき 魔王の十丈高からんとは。

法にして、直骸を焚燒する燃料に火を點するなり、今は引導師、偈文を唱へて振炬を挽ち、點火の態を爲すのみ。

②一聲の念、誦合して即ち六六三十七、形骸滅して却つて一を増す、即ち不生不滅なり。

③曲録とも書く、四脇あり、兩脇を交叉して牀椅の如く、後

に寄り掛りを設く、今の安樂椅子の背の斜ならざる様のも

の。説法又は葬式注要等に用

ふ。

④九月九日、菊の節句を謂ふ。

⑤雲門文偃禪師、機に對して往

往一字の酬應を用ふ、故に之

れを一字關といふ。例へば、「如何なるか是れ吹毛劍。」曰く、「體。」如何なるか是れ

祖師西來の意。」曰く、「師」といふが如し。

⑥却つて魔王の爲、餘殃の國中に入るとは。

囚に停る一月老虛堂、身上の①逆遼斷腸するを休めよ、苦樂寒温箇の時節、黄花一朶重陽を識る。

清淨本然大千を現す、②現前の境界是れ黄泉、戦に慣ふ作家赤心露はる、眉間に劍を掛けて血天に澆ぐ。

正傳傍出して妄に相争ふ、曠劫の無名人我の情、人我擔ひ來つて擔子重し、空しく看る③蛺蝶一身の輕さを。

上古の道光今日明かなり、議論す臨濟正傳の名、屋前屋後樵歌の路、憶ふ昔山陽の笛一聲。

棒喝徳山臨濟の禪、商量す三要と三玄と、漢王印を鑄て却つて印を消す、胡亂更に參せよ三千年。(消印を一に消市に作る。)

近代久參學得の僧、語言三昧喚んで能と爲す、無能味有り狂雲の屋、折脚踏中飯一升。

風外の松杉亂れて雲に入る、諸方は衆を動し又群を驚かす、人境機關吾れ會せず、濁醪一盞酔つて醺々。

靈昭女を賛す

①「たちもとほる。」行き難く進まざる貌。

②大千世界をいふ、長阿含經に出づ。日月、須彌山、四天下、四王天、三十三天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天、梵世天、之れを一世界といひ、之れを一十合したるものを大千世界、之れを一十合して中千世界、之れを一十合して大千世界といふなり。

③赤肉團泥土に化し、始めて妙境の現前を見るを云ふ。

④作家は斯道に老練なる師家をいふ。

⑤蛺蝶一身の輕きに比す、徒らに人我を擔ふ棒、思慮分別の爲に重さを増すをいふ。

⑥これは鍋の飯一升と云ふ程の意。

⑦主觀及び客觀をいふ、臨濟四料簡に、人境俱奪、人境俱不奪あり。

策籬賣却して甚だ風流、①一句明々たり百草頭、相對して禪話を弄するに心無し、朝雲暮雨愁に堪へず。(堪を一に勝に作る。)

風鈴 二首

静の時は響無く動の時は鳴る、鈴に聲あるか風に聲有るか、老僧が白晝の睡を驚起す、何ぞ須ひん日午に三更を打するを。

見聞の境界太だ端無し、好し是れ清聲隱々寒し、②普化老漢の活手段、風に和して③搭在す玉欄干。

牛庵 齋名

某甲は④瀉山僧一頭、長溪路上即ち忘するや不や、閑中復た祖師の見無し、花は春風に屬し月は秋に屬す。(不を一に否に作る。)

半雲 齋名

膚寸無根碧空に點す、安身立名其の中に在り、夢魂昨夜⑤巫山の雨、吟斷す朝來一片の蹤。

六祖を賛す

隨身の擔子⑥鋤斧、知らず何の處の山翁ぞ、⑦南方の佛法會すや否や、

①龍蘿居士の女、常に隨つて、竹漣を裂して以て朝夕に供す、居士將に入滅せんとす、女靈昭をして、出でて日の早晩を視、午に及んで以て報せしむ、女遽かに報じて曰く、「日已に申す、而も餘あり」と。居士戸を出でて見ると、靈昭即ち父の座に上りて合掌して座亡す、居士笑つて曰く、「我が女鋒捷なり」と。七日の後、州牧于公、疾を問ふ次、居士謂つて曰く、「但だ願はくは諸の所有を空じて慎んで諸の所無を實とすること勿れ、好く世間に住せよ、皆影響の如し」と。言ひ訖つて公の膝を枕にして化す。

②龍蘿居士曰く、「明々たる百草頭、明々たる祖師の意」と。百草頭は一切萬象の意なり。

③鎮州普化、盤山賣積の法嗣、伴狂として言を出す度なし、

盧公老老盧公。

紹德藏主、地を規して居を下す、家徒に四壁立つ、^①扁して土庵と曰ふ、偈を作つて以て證と爲すと云ふ。
夏巢冬穴一身康し、帶水拖泥萬念忙し、稼穡艱難若し領略せば、梅檀の佛寺名利の場、^②「梅檀の佛寺名利の場」を一本「梅檀の佛寺利名の場」に作る。

大機居士小築を卜し、額して晴驢と曰ふ、因つて^③贅するに偈を以てすと云ふ。

大人の消息誰有つてか通せん、^④靈山記前の中に墮せず、臨濟の宗風地を拂つて滅す、紅塵紫陌鬧忽々たり。

箕笠 庵號
樵客漁人受用全し、何ぞ須ひん曲椽木牀の禪、芒鞋竹杖 三千界、水宿風殮二十年。
謹んで一休和尚の座下に録呈し奉る

狂風徧界曾て藏さず、吹き起す狂雲 狂更に狂、誰か識らん雲收り風定

る處、^⑤海東の初日扶桑に上る。

幻住の孫眞建九拜

和韻

慚愧す聲名の覆藏せざるを、伴歌爛醉我れ風狂、吟懷夜々中峰の月、幻住の僧に三宿の桑無し。

華叟老師光を掩ふて、而して後、既に二十餘年に泊ぶ。壬申の秋、^⑥救して大機弘宗禪師と謚す、仍つて禪詩を製して、大用養叟和尚に呈寄す。且つ^⑦賀忱を陳ぶと云ふ。(年を一に稔に作る。)

曾て塵寰を謝す五十年、芳聲美譽是れ何の禪ぞ、子胥日暮れて倒行し去る、^⑧觀面屍を辱かしむ三百鞭。「日暮れて」を一本「晩日」に作る。

^⑨懶瓚詔を辭す也た何ぞ似ん、^⑩煨芋烟鎖す竹爐の裏、大用現前眞の衲僧、先師の頭面に惡水を潑ぐ。

端師子を贊す

師子を弄する處正に心を明む、回頭に托せず口、^⑪暗の若し、讀誦 蓮經風雪の燭、漁歌一曲五更の吟。(處を一に床に作る。)

常に一鐸を振りて曰く、「明頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打」と。或は鐸を以て人の耳邊に付けて之れを振ふ、或は其の背を拊して剗顧の者あらば、手を展べて曰く、「我れに一錢を與へよ、非時にも食に遇ふて喫す」と。

① 打つ、たゞくなり。
② 瀉山、水牯牛によりてしか云ふなり。

③ 李白の楊貴妃の詩に曰く、「雲雨巫山枉げて斷腸」と。巫山の神女が朝に雲となり、夕には雨となりて來りし故事によるなり。

④ なた、芥の類なり。

⑤ 五祖に參じ、八月遂に黃梅の衣法を傳持して山を下る、五祖の指示により南方に遷れ、漁家にかくれ、後印宗法印の非風動、非幡動の旨を斷じ、遂に剃具すと。

⑥ 六祖をいふ。

⑦ 扁するは、即ち土庵と扁額するをいふ。

⑧ 贅するは、蛇足を添ふることにたり。

⑨ 世尊、靈山に於て迦葉尊者に傳へ給ふ時の、「我に不立文字教外別傳、正法眼藏涅槃妙心あり、爾に授く」とて禪法の奥旨を許し給ふ。而して又かかる言句の爲に提へられぬを云ふ。

⑩ 三千世界の間といふが如し。

⑪ 一休の得意、又思ふべきなり。

⑫ 眞心からの賀詞なり。
⑬ 懶瓚和尚は唐の德宗時代の人、河南府衛山石室の中に隠棲す。唐の德宗其の名を聞き、使を遣して之れを召す、使者其の室に至りて宣言す、「天子詔あり、尊者常に起つて恩を謝すべし」と。瓚方に牛糞の火

大德寺火後、大燈國師の塔に題す

創草百二十八年、看來れば今日 體中立、正邪
境法滅 卻して後、猶ほ是れ大燈大千に輝く。

渡江の達磨

脚下苦なる哉平地の波、誰人か梁魏に啓訛を定
む、西來道ふ莫れ大難の意、河廣傳へ聞く一革
過ぐと。

臨濟和尚を賛す

從來道業是れ 毘尼、 黄檗の棒頭に所知を忘
す、正傳的々克勤下、吟破す風流小艶の詩。

普化を賛す

徳山臨濟同行を奈せん、街市の風顛群衆驚く、
坐脱立亡敗關多し、和鳴隠々寶鈴の聲。

黄檗の三頓棒

棒頭打着す 羯磨の僧、痛處の針錐伎能を絶す、

を發いて煨芋を尋れて食す、
寒涕(水鼻)頤に垂る、未だ會
つて答へず、使者笑つて曰
く、「且く尊者に動む、涕を拭
へ。」環曰く、「我れ豈に工夫し
て俗人の爲に涕を拭ふことあ
らんや」といつて遂に、立た
ず。

② やきいもなり。

③ 暗は啞に同じ、「おし」なり、又
なく、さげぶの意もあり、此
所は啞を云ふ。

④ 法華經をいふ。

⑤ 古塔主の所立三玄の一なり、
即ち體中の玄、句中の玄、玄
中の玄を三玄といふ。古塔主
自ら稱して雲門に嗣法せりと
いふ、其の上堂の語に曰く、
「雲門匡眞大師、如今現存す、
諸人還つて見るや。」二休自ら
之れと好一對を爲す。

⑥ 達磨渡江の状態をいふなり、

又は蘆葉の達磨とも云ふ。即
ち達磨が一枝の蘆葉に乗り
て、楊子江を渡るの畫なり、
達磨梁の大通元年に支那に來
り、初めて梁武帝に相見し
て、問答應對するに、機宜投
合せず、依つて遂に江を渡り
て北の方魏の國に向つて去れ
り。傳燈に曰く、「葦一枝を折
つて楊子江を渡つて梁を去
る」と。

⑦ 毘奈耶とも云ふ、何れも梵音
(Vinaya)の音化なり、離行、
調伏、滅等の譯あり、三藏中
の律をいふ。

⑧ 臨濟、黄檗の三頓の棒を喫し
て、遂に辭して大愚の所に至
る、因つて前話を擧して、有
過無過を問ふ、大愚曰く、「黄
檗與麼に老婆なり、汝が爲に
微困なることを得たり、更に
這裏に來つて有過無過」と
云ふ。師言下に大悟す。

桃李春閨簾外の月、吟魂一夜十年の燈(僧を一に會に作る。)

脚下紅絲線

持戒は驢と成り破戒は人、 河沙の異號精神を弄す、初生の孩子婚姻の線、
開落す紅花幾度の春。(成を一に爲に作る。)

華叟和尚を賛す

靈山の孫言外の傳、密漬の荔支四十年、兒孫に箇の瞎禿漢有り、願ひ得
たり老婆新婦の禪。

自賛

華叟の子孫禪を知らず、狂雲面前誰か禪を説く、三十年來肩重し、一人
荷擔す 松源の禪。

風狂の狂客狂風を起す、來往す淫坊酒肆の中、具眼の衲僧誰か一拶、南
を畫し北を畫し西東を畫す。

大燈の佛法光輝没し、 龍寶山中今誰か有る、東海の兒孫千載の後、吟
魂猶ほ苦しむ 許渾が詩。

百丈が餓死 三首

① 徳山の棒、臨濟の喝、普化の
明頭打暗頭打、好三幅通也。
② 普化禪師、臨濟を辭し、一日
東門に遷化し、第二日南門に
遷化し、第三日西門に、第四
日自ら棺を擧げて北門外に出
で、錚を振つて棺に入つて逝
す、郡人奔走して棺を掲げて
看るに、已に見えず、只だ錚
聲の漸遠を聞くのみと。
③ 羯磨、梵語、譯して作法、又
は衆といふ、四法を具すべ
し、又三種ありと、得戒の
師、證據の師の意なり。
④ 脚下の纏綿、即ち修業の戒律
等を云ふ、却つて戒律に苦め
らるゝ様にては、他生は驢馬
と生るゝならん、戒によらず
自ら戒にあたるは、蓋し人間
界に生をうけんと。
⑤ 恒河沙の數程の數多の名目の
戒、實に精魂を戲弄すること

爲人の苦行也天然、大用分明 即ち現前、一日作さざれば必ず食はず、
大人の手段作家の禪。

古人の 受用幾 か艱を嘗む、是れ尋常談笑の間にあらず、飽食痛飲飯袋
子、又衣翫水又遊山。(一本、艱を難に作り、笑を笑に作る。)

工夫長養大慈心、臨濟消し來る萬兩の金、昔日の艱難吐哺を聞く、簑衣
若 笠鏝頭の吟。

會裡の徒に示す 三首

樂中苦有り 一休の門、箇々蛙争ふ井底の尊、晝夜心に在く 元字脚、是非
人我一生喧し。

公案參じ來つて明歷々、胸襟勘破すれば暗昏々、怨憎し死に到るまで忘卻
し難し、道伴の忠言耳根に逆ふ。

徒に祖師の言句を學得して、識情は刀山牙は劍樹、看よ看よ頻々他の非
を擧するを、血を銜んで人に噴く其の口汚る。

入定僧に示す

塵縁塵境萬端稠し、此に到つて誰人か衆流を截らん、誓心決定すれば魔宮

動く、 ① 長信の西風琪樹の秋。

碧岩集の序を讀む

② 夾山の言教價千金、一炬看來れば古今を救ふ、寒灰に向つて議論を成す
を休めよ、宗乘滅卻す老婆心。

③ 黃龍の三關

佛と成り驢と成る手脚全し、河沙の異號生縁に任す、黃龍關外黑雲鎖
す、積翠の春風楊柳の前。

④ 虎丘雪下三等の僧 二首

少林の積雪心頭に置く、公案圓成す上等の仇 僧舎に詩を吟す剃頭の俗、
飢腸食を説く也た風流。(舎を一に社に作る。)

禪者詩人皆痴鈍、雪下の三等議論多し、⑤ 妙喜是の若く大慈心、食を説く
僧に香積飯を與ふ。(痴を一に癡、又は懶に作る。)

大徳寺の修造を看て感有り

雲門の ⑥ 卯塔一茅廬、大用の黄金殿上の居、傍出す 正傳現前の境、⑦ 楊
岐の屋壁古來疎なり。

① 崇岳松源の禪風をいふ。
である。

② 大徳寺を云ふ。一休自ら任す
るものゝ如し。

③ 唐の許渾が詩に曰く、「琪樹西
風枕簾の秋、楚雲湘水同游を
憶ふ、高歌一曲明鏡を掩ふ、
昨日少年今白頭」と。老年を
感じての作なり。

④ 受持活用の義なり、物我一體
の上の活機用なり。普勸坐禪
儀に曰く、「實義自ら開けて受
用如意ならん」と。

⑤ 簑は竹の皮にて作れる笠。

⑥ 文字文章のことをいふ。

⑦ 李白が長信秋詞の詩に曰く、
「眞成薄命久しく尋思す、夢
に君王を見て覺めて後疑ふ、
火は西宮を照して夜飲を知
る、分明に復道思を奉する
時」と。夢に見る位では到底
へなければならぬと云ふ意な
り。

⑧ 青原下四世、船子徳誠の法嗣
なり。

⑨ 慧南禪師、學人接化に於ける
常用の手段なり、是れに三關
あり、曰く、生縁、曰く、佛
子、曰く、驢脚と。會元十七
慶閑章に曰く、「龍問ふ、如何
なるか是れ汝生縁のところ。」
閑曰く、「早晨白粥を喫す、如
今又饑を覺ゆ。問ふ、我が手
何ぞ佛手に似たる。」閑曰く、
「月下琵琶を弄す。」問ふ、「我
が脚何ぞ驢脚に似たる。閑曰
く、「鷺鷥啼に立つ同色に非ら
ず」とあり、以て其の關を
窺ふべし。其の關内に入れば
積翠より吹き下す春風が楊柳
の前にそよいで居る様なり。

⑩ 虎丘は支那江蘇省蘇州府元和
縣にあり、武丘山、又は海涌
山ともいふ。吳王闔閭を葬り
し所なり、宋末に至り、圓悟

大應國師の尊像を新造す

活眼大いに開く眞面門、千秋の後尙ほ精魂を弄す、
虚堂の的子老南浦、東海の狂雲は六世の孫。

姪坊に題す

美人の雲雨愛河深し、樓子老禪樓上の吟、
我れに抱持 唵吻の興有り、
竟に火聚捨身の心無し。

延壽堂の僧に示す

無常の殺鬼現前の時、最後の牢關誰にか説向せん、
百事休止難うして五欲闌し、
六窓鎖さんと欲すれば八風吹く。

病中の作

徳山の棒分臨濟の喝、嘆す我れ他の機境に奪はるゝことを、
若し人馬祖の不安を問はゞ、慚愧す一生相如が渴。
嘆す我れ他の機境に奪はるゝことを、
一に「嘆す我れ他の機境を奪ふを破る」に作る。

榮街の悪知識に示す 二首

參禪の婆子楊花の帳、入室の美人蘭蕙の茵、
近代箇の邪師の過謬、馬牛の

漢是れ人倫に非ず。(非を一に不に作る。)

捧心自ら稱す法王身、世上弄嘲徒に怒噴す、
一箇の獼猴巴尾没し、出頭す大用現前の人。
(捧を一に棒に作る。)

關山和尚の塔を拜す

荒草勦かす乃祖の玄、涅槃正法妙心の禪、
杜鵑叫落す關山の月、誰か花園躑躅の前に在る。
(一本三四句を「誰人か吟落す關山の月、
五夜の漏聲曉箭の前に作る。')

雨滴 齋名

蕭々門外是れ何の聲ぞ、會せずんば當機鏡清に
問へ、顛倒の衆生迷ふて物を逐ふ、窓前半夜一
燈青し。(窓前を一に吟魂に作る。)

松窓 齋名

茅廬竹閣興窮り難し、臨濟栽葱來つて功空しか

門下紹隆、此の山に居して盛んに臨濟の禪風を擧揚せしを以て名あり。

大慧宗杲禪師をいふ。

塔の一種、無縫塔とも云ふ、塔の形状は鳥の卵に似たるを以て、卵塔と稱す。

南岳下十一世の祖、慈明楚圓禪師の法嗣なり、楊岐派の祖。

筑前興徳寺の開山、南浦紹明禪師、圓通大應國師と諡す。

虚堂和尚に就いて法を受け、豁然大悟す、故にしか云ふ。一休は即ち六世の法孫に當る。

青樓を云ふなり。

楚の襄王、夢に巫山に神女に會せし故事に由りて、男女の密會するに用ふ。劉廷芝の公子行に、雲と爲り雨と爲り楚の襄王とあるも、李白の「雲雨巫山枉けて斷腸」とあるも

皆此の故事なり。

ついでみ、くらふ、又は談笑等の意あり。

捨錢の心ありて捨身の心なきなり。

臨命終に到るの時なり。

六窓は六根にして、八風は人の心を動かす風の如き、八種の法、曰く、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八を云ふ。

馬大師、不安、院主問ふ、和尚近日尊候如何。大師曰く、「日而佛、月而佛」と。即ち馬祖の面目は日月寒暑晝夜春秋の如く、不安安によりて別状あるなしとの意。若し一休がかくの如き問をうけたならば何と答ふべきと。

可馬相如、一生消渴の病に苦めども、其の一代の文章に於ける實に見るべきものあり、正に之れに恥づべきものか。

自ら驕り街ふものを云ふ。

嶽の異名、又胡孫と書す。

信州高梨氏の子、鎌倉の巨福山建長寺の廣嚴庵に到り、東僧啓に就いて剃髮受具す、京都に大燈國師の活手段を聞いて參す、一夕關の公案を透徹して印可を蒙り、關山の號を與へらる。

延元元年大燈國師病むや、花園と皇、國師滅後誰にか法を問はん」と。國師奏して、關山と云ふものあり、我が骨髄を得たり」と。花園の龍宮を改めて梵刹となし、關山を請じて開山となす、師、寺を正法山妙心禪寺と號す、勅召を奉じて妙心寺に開堂住持す、實に今の妙心寺派大本山の開祖たり。

天地自然の法則に隨ふは即ち任運なり、自然に安心を問ふ、即ち達磨不答の所、自然なればなり。

らす、枕上愧慚す閑夢有るを、夜來驚起す屋頭の風。(「愧慚す」を一に「自ら漸づ」に作る。)

面壁達磨

誰人か 任運に安心を問ふ、昔日神光少林に待す、^①面壁功成つて面目無し、知らず積雪滿庭に深きを。

苦行の釋迦

六年飢寒骨髓に徹す、苦行は是れ佛祖の玄旨、道ふことを信す天然の釋迦無しと、天下の衲僧飯袋子。

言外和尚

端無く滅卻す大燈の家、鐵眼睛劍樹の牙、一句分明言外の語、親しく聞く華叟は 曇華の若しと。

徹翁和尚

大燈の子大燈の孫、正傳臨濟の宗門、儼然たり靈山の一會、何ぞ妨げん三界の獨尊。

趙州の三轉語

泥佛水を渡らす、木佛火を渡らす、金佛爐を渡らす。

詩成つて小艶愁情を述べ、一枕多年夜雨の聲、長笛暮樓誰が氏の曲ぞ、曲終へて江上數峯青し。(「青し」を一に「清し」に作る。)

龐居士竹漉離を製する圖

河裏捨て來る十萬錢、庫中終に半文錢没し、眞箇簸箕門下の客、柴籬賣つて多錢に直らす。(「没し」を一に「無し」に作る。)

大惠宏智揖讓の圖

眉毛相結んで眼睛同じ、兩箇の老禪機境融す、力士の鐵槌子房が策、憤心は博浪沙中に在り。

山庵雜錄に曰く、楚石、嘉興天寧に住す、有司の重ねて官宇を

作るに、木石を闕くに値ふ。村落無僧の廢庵を取つて、需むる所に應せんと欲す、因つて諸寺の住持を集めて之れを議す。時に楚石力めて不可なる者を陳べて之れを沮む、有司聽かず、遂に退鼓を搦つて海鹽の天寧に歸る。二老皆義を行ふに勇み、師席の尊を棄つること、嘗に弊屣を棄つるが如くなるのみならざるを視る。今若に禍患

①面目なき所、即ち眞面目なり、老子の「大辯唯の如し」の意なり。

②釋宗忠、字言外、姓越智、豫州の人なり、白雲禪師に參じ、大いに得る所あり、永和二年秋、勅を奉じて大德に住し、大いに玄化を開く、密傳正印禪師と諡す。

③優曇華を云ふなり、此の華三千年に一度開く花なり、此の華開けば、世に輪王出づといひ、又世に佛在す時に此の華開くといふ。靈瑞希有のこと、に引き用ふるなり。然れども此の所、妙最禪師の法嗣、應慶曇華和尚をいふ。

④會元第四趙州の章に、上堂に曰く、金佛爐を渡らす、木佛火を渡らす、泥佛水を渡らす、眞佛内裡に坐す、菩提涅槃眞如佛生、盡く是れ貼體の衣服亦は煩惱と名く、實際理

地是れ何の處に著けん、一心生ぜざれば萬法皆無し云云と。

⑤龐居士は衡州衡陽縣の人なり、世々儒を以て業となす、少うして塵勞を厭ひ、石頭希運禪師に參じて旨を領じ、後又馬祖に參問す、大いに得る所あり、常に竹漉離を製して朝夕の供に充つ。

⑥居士、馬祖に問うて曰く、萬法と偈たらざる者、是れ什麼人ぞ。祖曰く、汝が一口に西江の水を吸盡するを待つて汝に向つて道はん。居士言下に大悟すと、之れによりて言を爲す。

⑦想中無愷禪師の撰する所、叢林の先徳世間の學者の勸善懲惡の資料たるべき嘉言善行を編録せるものなり。
⑧南岳下二十世、徑山行端の法嗣、元叟に徑山に參じて所得

己に罹ると雖も、而も猶ほ滯忍戀々たり、亦獨り何ぞや。予此れを讀んで感有り、因つて偈を作ると云ふ。又了庵の一事有り、之れを省く。(一本、二老を二左に作り、「己に罹る」を「己に嬰るに」作り、了庵を子庵に作る。)

奪人奪境事猶ほ稠し、幽谷閑林自由ならず、道ふ莫れ江山定主無しと、普天の下帝王の州。

龍門亭に偈を題して、^①天龍寺の再興を賀す

盡乾坤乃祖の門風、萬岳嵯峨たり烟雨の中、^②三級浪高うして黒雲鎖す、潛鱗直に天龍と化するを得たり。

龍翔寺の廢を感す

常住物誰か己身に用ふ、山門境致松筠を剪る、殿堂只だ花と與に零落し、^③廢址の秋風二月の春。

虛堂和尚十病 二首

病は自信不及の處に在り。
病は得失是非の處に在り。
病は我見偏執の處に在り。
病は眼量窺白の處に在り。

に開かれたのである。

あり、後海鹽の福臻に出世す。

①臨濟天龍寺派の本山、靈龜山天龍寺聖禪寺と號す。足利氏の開基、夢窓疎石の開山にして、京都五山の第一位にあり。

②京都府葛野郡嵯峨村にあり。故事に、萬門三級の波あり、桃花の節、鯉魚之れを感ゆれば龍と化す」と。

③松崎は松及び竹にて、山門の風致を添へる松や竹など剪り拂ひ、見る影もなきを云ふ。

④荒廢の跡、楊梅香る春も、錦紅散する秋も、共に寂々として昔の面影はなし。

⑤鶴足山は狼足山、又は尊足ともいふ。印度摩迦陀國伽耶の東南七哩にあり、摩訶迦葉入寂の地なり、世尊の大法を驚靈山の會に受けてより、鶴足室中生々世々の春は、此の時

病は機境不脱の處に在り。
病は得少爲足の處に在り。
病は一師一友の處に在り。
病は旁宗別派の處に在り。

病は位貌拘束の處に在り。
病は自大了、一生小不得の處に在り。

是非は元勝負の修羅、傍出す正傳人我多し、近代の邪師管見に誇る、識情毒氣偏頗に任す。議論未だ休せず正と邪と、無慚愧の漢是れ天魔、狂雲が臥病は相如か渴、一枕秋風我れを奈何せん。

拈花微笑

鷲峰會上現前の辰、^①鷄足室中來劫の春、毒に中る人は應に毒の用を知るべし、西天此土野狐の身。

慈恩窺基法師を賛す

窺基二味獨り天真、酒肉諸經又美人、座主の眼睛猶ほ此の如し、宗門唯だ箇の宗純有り。(「如し」を「若し」に作る。)

同門の老宿、余が淫犯肉食を誡む、會裡の僧、之れを噴る。因つて此の偈を作り、衆僧に示すと云ふ。

爲人說法是れ虛名、俗漢僧形何似生、老宿の忠言若し耳に逆はゞ、昨非今是我が凡情。

病中の作

佛病祖病鬼眼を進らしむ、臨濟几案禪板を焼く、金山大病の辛を會せず、時人空しく吟す艶詩の簡。

(「逆る」を「逆ふ」に作る。)

隱溪 齋名

呂公子陵眞の面目、受用風浪又水宿、江湖今 賈漁舟有り、我れに一片 湘楚の竹無し。

示衆

參玄衲子道成じ難し、但だ願はくは常不輕に歸依せんことを、一片の吟 懷誰に向つてか解かん、楚雲湘水十年の情。

邪禪を破す

瞿曇四十九年の説、看よ看よ 毘耶と 摩羯と、邪師臆説に話頭を拈す、 閻王の前豈に抜舌を免れん。(一本、羯を竭に作り、舌を口に作る。)

新に佛寺を建立す

一生破屋廢庵の居、這裡榮華也た虚しからず、清淨の佛寺利欲の地、楊岐 の屋壁古來疎なり。

將に山中に入らんとして一偈を屋壁に書し、以て衆に示して去る

愧慚す禍の 蕭牆より起るを、我見人を折いで 劍鋒の如し、此れより空

太公望及び嚴子陵を云ふ、太公望は渭水の濤に釣し、子陵は又羊裘を被りて澤中に釣る、其の時に應じて清貧に甘んずるは分の宜しきなり。

表面漁舟らしいが、中々さうでないものがある、即ち隱者を裝ふて却つて現はるゝ者が多い。

玄々微妙の法を實參實究する人の意、佛道修行の人のことなり。

行脚多年、善知識に法を求むる情を云ふ。

毗耶離、又は毘舍離とも書く、古代印度の國名、摩迦陀國の北方、佛、説法の地、維摩の生地、第二結集の行はれし地なり。

摩竭地、又は摩揭陀、摩伽陀と書す、世尊成道及び最初傳道の地なり。根本の宗乘を處

山幽谷の路、誰人か來つて板橋の霜を踏まん。

密庵和尚病起上堂の後に題す

江山の富貴是れ樵漁、風雨吟身一草廬、七顛八倒衆生の苦、耐へす小魚大魚を吞む。

大用庵養叟和尚、宗慧大照禪師の號を賜ふを賀す

紫衣師號家の貧を奈せん、綾紙青銅三百緡、大用現前賈長老、看來れば眞箇普州の人。

大德寺の僧に寄す

人多く大德の門に入得す、這裡誰か師席の尊を捐つる、淡飯粗茶我れに客無し、醉歌獨り倒す濁醪の樽。(大德を一本、大燈に作る。)

鳥窠和尚を賛す (一本、鳥窠を鳥巢に作る。)

巢は寒し樹上の老禪翁、寂莫清高名未だ空しからず、諸惡莫作善奉行、大機は須らく醉吟の中に在るべし。

養叟の大用庵に題す 二首

叢林零落して殿堂疎なり、臨濟の宗門破滅の初、大用は梅檀佛寺閣、

外にして、徒らに歴史的考證に臆説紛々たるを破するなり。最後の一句却つて妙を得たり。

君臣の會見する所に作りたるかきを云ふ。禍は近く門扉の内にあるの義にして、内變あるをいふ。

劍鋒は劍先をいふ。

密庵成傑禪師、應庵曼華の法嗣なり。

後花園帝、叟を召して禪要を問ふ、奏對旨に協ひ、特に宗慧大照禪師の號を賜ふ。

繪紙及び賜物をいふ、繪は鏡を通す縁なり。

支那の普州は昔盜賊の集會する所として傳ふ、故に普州の人とは盜賊を意味するなり。にせ長老はえらい儲ものをした、丸で泥棒の様なものであると、還つて大用庵の大用たる活眼の人自ら之れを知るの

蝶たり林下道人の居。(蝶を一に淨潔に作る。)

山林は富貴五山は衰ふ、唯だ邪師のみ有りて正師無し、一竿を把つて漁客と作らんと欲すれば、江湖近代逆風吹く。

百丈絶食 (絶を一に施に作る。)

大智禪師難行道、末法爲人眞の落草、飽食痛飲熱鐵丸、初めて懼る泉下の閻羅王。(王を一に老に作る。)

示衆

割截禁へ難し 忍辱仙、捨身は諸佛の舊因縁、千歳聲名斷碑の雨、獨體識盡く 北邙の前。

病中 二首

錯り來つて衆を領す十年餘、實悟知らず多く是れ虚、乃ち邪法の輩を破除せんと欲す、夜來背に發す 范増が疽。

藥山は兩粥 懶殘は芋、昔年祖師修行の苦、棒喝機關作家の禪、是れ牢關最後の句に非ず。(非を一に不に作る。)

衆に示す

みと、一休なぐのすれ者なり。

鳥窠道林禪師、徑山國一禪師に謁して得法す、後秦望山長松の枝葉繁茂、盤屈して蓋の如き上に棲止す、此の名ある所以なり、又鶴巢禪師とも云ふ。唐の元和中白居易來つて宗要を問ふ、居易曰く、禪師の住所甚だ危険なり」と。窠曰く、「居士の危険尤も甚だし。居士曰く、弟子の位、江山に鎮す、何の險なることか之れあらん」と。窠曰く、薪火相交つて讖性停らず、險に非らざることを得んや。居易問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。窠曰く、「諸惡莫作、衆善奉行」と。居易曰く、「三歳の孩兒も也た恚に道ふことを解す。窠曰く、「三歳の孩兒も道ひ得るも、八十の老翁も行ふことを得ず」と。居易遂

忍辱仙人常不輕、菩薩果滿ち已に圓成。撥無因果孤陋に任す、一箇の盲人衆盲を引く。

仰山を賛す 二首

小釋迦唐朝に出生す、夢中兜率太だ分明、耽源は體也鴻山は用、體用の中唯だ眼睛を開く。

枕子夜來推出する時、一宗 敗闕人の知るこゝと少なり、法身說法 座主の説、黃葉一枝小兒を誑す。

松源和尚 上堂に云く、「擧す、僧、巴

陵に問ふ、「祖意教意是れ同か是れ別か。」

巴陵云く、「鷄寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る。」白雲師祖云く、「巴陵は

只だ一半を道ひ得たり、白雲は則ち然らず、水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香、衣に滿つ」と。師拈じて云く、

に禮をなして師事せり。① 高くけはしきことの形容。② 百丈禪師、凡そ作務の勞を執る、必ず衆に先だつ、衆ひそかに作具を収めて息はんことを請ふ、師曰く、「吾れ徳無くして争でか人を勞すべき。既ににして作具を求めて得ざれば亦食はず、故に云ふ、「一日爲さずれば一日食はず」と。

③ 閻魔王、陰魔王、疾魔王、炎魔王、閻羅王、閻魔羅王、疾魔羅社、閻魔大王等の稱あり、冥界の王、惡罪に對して刑罰を司る冥界の霸者なり。④ 佛、昔仙と作つて山中に道な修す、歌利王妃と同じく獵に出づ、疲倦して寝ぬ、妃共に仙を禮す、王起つて問ふ、「仙四果を得るや否や」と。皆云ふ、「不得」と。王怒つて身體を裁割す、天怒つて石を雨らす、王懼れて懺悔す、仙の曰

く、「我れ本嘆るなし。」王曰く、「何の嘆なきことを知らん。」仙答つて曰く、「我れ若し嘆なくんば、身即ち平復せん、身果して平復すと。其の忍辱を見る。

⑤ 邱山は洛陽の北にあり、故に北邙といふ、漢以來墳墓の地として名高し、東漢の諸陵及び唐宋名臣の墳多く此にあり。

⑥ 范増、楚の項羽を助けて諸侯に覇たらしむ、漢王之れを患ふ、陳平の計を用ひて之れを問す、項羽乃ち之れが權を奪ふ、范増怒りて骸骨を乞ふ、行きて未だ彭城に至らざるに、疽、背に生じて死せり、好事魔の多きを云ふ。

⑦ 峽山惟儼禪師は青原下三世、石頭希運禪師の法嗣なり。⑧ 懶殘は懶瓚をいふが、懶瓚の芋の事に見ゆ。

「白雲力を盡して道ふ、只だ八成を道ひ得たり、靈隠に問ふこと有らば、只だ他に向つて道はん、人我無明一串に穿つと。」

祖意教意別と同一、商量今古未だ曾て窮らず、松源老婆心切、人我無明已躬に屬す。

⑦ 涅槃堂

眼光落地涅槃堂、自ら悔い自ら慚づ螃蟹の湯、七手八脚萬劫の苦、無常の殺鬼火車忙し。(殺を一に利に作る。)

⑧ 竹篋背觸

背觸は首山の閑話頭、誦訛着々來由没し、梨花院落黃昏の月、説いて愁人に向つて愁を解かず。

山居の僧、葉を擁す

孤峯頂上塵寰を謝す、三十年來山を出でず、因つて憶ふ 南陽葉を擁する意、半身は暖氣半身は寒。

山居僧

人無き時は喜び客來れば喚る、落葉飛花獨覺の身、正見の禪師若し令を行せば、三冬枯木百花の春。

拈華微笑

世尊拈出す一枝の花、一代の禪宗意氣奢る、金色の頭陀獨り傳法、近代知識河沙の如し。(「如し」に「若し」に作る。)

新法師に贈る

威音那畔法に師無し、自悟自然成道奇なり、偶々出家新戒の漢有り、劫空久遠今時に在り。(遠を一に遠に作る。)

會裡の衆に絶交する偈、且つ以て自ら警むと云ふ

徒を匡し衆を領じて魔宮を立す、汗馬從前蓋代の功、師弟の凡情共に姦黨、憐む可し 韓信が良弓を嘆せしことを。

行脚

① 天地の眞理として動すべからざる因果の道理を、然ることなしとする邪見をいふ。

② 南岳下四世、鴻山の法嗣、初め耽源に謁し、玄旨を悟る、後に鴻山に師事すること十五年、竟に印可を受く、後世鴻山の宗風と併稱して鴻仰宗といふ。

③ 枕子はまくらのこと。

④ やぶれかぐるをいふ、宗門の衰へたる人の知るなしと。

⑤ 一座の主、宗門にては教家、二解の徒を指していふ語。

⑥ 涅槃經に曰く「彼の嬰兒啼哭の時、父母即ち楊樹の黄葉を以て、之れに語げて云ふ「啼く莫れく、我れ汝に金を與へん。嬰兒見已つて、眞金の想を生じ、便ち止まつて啼かず、然れども此の楊葉實に金にあらず」と。

⑦ 粥飯の時、僧堂に上るを上堂

といふ、又法堂に上りて演法するをいふ、普説のこと、陞座ともいふ、此の所下の意をとる。

① 巴陵頓鑑禪師、雲門文偃の法嗣、雲門に參じて必要を得、辯舌俊利、真く人を化す。

② 楊岐方會の法嗣。

③ 十分に道ひ得たりの意なり、蓋し宗門十成を諱む、故に八成といふのみ。

④ 圓悟克勤の法嗣、靈隱瞎道禪師、宋の孝宗、道を問うて曰く「如何にして悟を得ん。對へて曰く「本有の性、歲月を以て之れを磨す、悟らざるも無し」と。

⑤ 延壽堂のこと、無常院、無常堂、重病閣、省行堂、將息寮等の名あり、病僧を收容して加療せしむる堂宇なり。主に延壽堂の名を以て呼ぶ。

⑥ 首山省念禪師、竹篋を拈じて

衆に示すの語「汝等若し喚んで竹篋と作さば即ち觸る、喚んで竹篋と作さざれば即ち背く、諸人宜しく喚んで甚麼と作さん」と。即ち背せず觸せざる所に於て、日用光中とするなり、即ち他なし、竹篋は竹篋に非ず、即ち是れ竹篋なり、其の他何の向背あらん。

⑦ 語は般の方正しとす、絲の錯雜紛糾して容易にとけざる混雜の様子をいふ、又錯り傳ふる意、展轉殺訛權を以て實となす等の類なり。

⑧ 南陽慧忠禪師、唐の肅宗の上元貳年、勅を奉じて西禪寺に住す、後代宗、臨御するに當り、迎へられて光宅寺に止まる、南陽白崖山の黨子谷に居すること四十有餘年、曾て山門を下らずといふ。

⑨ 摩訶迦葉、靈山の會に於て正

咸陽の金玉幾樓臺、^①方寸の封疆歸去來、一箇天外に出頭して看れば、須彌百億草鞋の埃。

達磨大師の半身を賛す

東土西天徒に神を弄す、半身の影像全身を現す、少林冷坐何事をか成す、香至王宮蕙帳の茵、(影像を一に影像に作る。)

讓羽山に新一寺を創む、山を虛堂寺と名づけ、大燈と扁す、因つて一偈を述ぶ。

茅屋三間七堂を起す、狂雲風外我が封疆、夜深うして室内人の伴ふ無し、一盞の殘燈秋點長し。(茅を一に苒に作る。)

中川を擯出する賀頌

病身を救はず病身を勞す、蕭牆禍有り會中の賓、十年劒樹刀山の底、萬劫消し難し阿鼻の辛。

中川を擯出する賀頌、勝瓊に呈す

本蛇影に非ず客盃の弓、元字心に在り劫空よりす、昨日の凡兮今日の聖、無根雲起る變通の風。

法眼藏涅槃妙心を傳法す。頭陀は杜陀、杜多ともいふ。陶汰、斗鼓、抖擻等の譯あり、煩悩の塵垢を拂ひ去りて、佛道を求むること修行と同義なり、これに十二行あり。

① 淮陰の人なり、漢の高祖之れを用ひて大將とし、遂によく天下を定む、腹下の忍を以て普く知らる。

② 秦の始皇の營みし阿房宮の莊嚴をいふ。

③ 物質上の金玉樓臺は何のものかは、胸中の丹心、箇の莊嚴あれば須彌百億も恰も脚下の塵の様なものである、蓋し足の向ふ所、金玉殿樓、山川草木、統べて坦々の裏にあり。

④ 達磨は南印度香至國王の第三子なり、蕙帳の裡に生れて、かくの如き難行苦行をなさるをいふ。

⑤ 此の句、大燈の扁額に懸す。

病

馬祖不安の閑話頭、毘耶語を杜ちて愁に勝へず、夜々苦吟す三十歳、月は滿つ、茂陵柱樹の秋。

紅葉に偈を題して以て多欲の僧に呈す

滿庭の落葉僧の掃ふ無し、南陽擁し來る猶ほ落草、自ら悔ゆ欲界の衆生と成るを、君子財を愛す是れ何の道ぞ。

長祿庚辰八月晦日、大風洪水、衆人皆愁ふ。夜遊宴歌吹の客有り、之れを聞くに忍びず、偈を作り以て自ら慰すと云ふ。

大風洪水萬民の憂、歌舞管絃誰が夜遊ぞ、法に興衰有り劫に増減、任他あれ明月の西樓に下るを。

重ねて靈山和尚榮街の徒に示す法語の後に題す

李下從來冠を整へず、世上に奔馳して豈に官に諛はん、江山の風月我が茶飯、自ら笑ふ一生吟味寒し。

白居易、鳥窠和尚に問ふ、「如何が是れ佛法の大意。」窠曰く、「諸惡莫作、衆善奉行。」白曰く、「三歳の孩兒も也た恁麼に道ふことを解す。」

① 晉書の樂廣傳に、「樂廣河南の尹に遷る、嘗て親客あり、久潤又來らず、廣其の故を問ふ、答へて曰く、「前に坐にありて酒を賜ふことを蒙る、飲むに方りて忽ち盃中蛇あるを見て、意甚だ之れを惡む、既に飲みて而して疾む」と。時に河南の聽事の壁上に角弓あり、漆畫して蛇を作る、廣、意ふ盃中の蛇は即ち角弓ならんと、復た前所に置酒し、客に謂ひて曰く、「盃中蛇ありや、否や」答へて曰く、「見る所初めの如し」と。廣乃ち其所を以て告ぐ、客豁然として意とけ、沈痼頓に愈ゆ」と。

② 馬祖不安の閑話頭、前に見ゆ。

③ 茂陵は司馬相如、病渴を愛ふに家居せし處なり。

④ 文選の古詩に、「君子は未然を防ぐ、嫌疑の間に處らず、瓜田に履を納れず、李下に冠を

窠曰く、「三歳の孩兒も道ひ得ると雖も、八十の老人も行ふことを得ず」と。靈山和尚、毎に曰く、「若し鳥窠の一語無くんば、我が徒盡く本來無一物、及び不思議不思議、善惡不二、邪正一如等の語に泥んで、以て因果を撥無し、而して世多く日に不淨の邪師を用ひん。」故に余此の偈を作り、以て衆に示すと云ふ。

學者因果を撥無して沉まん、老禪の一句價千金、諸惡莫作善奉行、須らく先生醉裡の吟に在るべし。

余、會裡の徒を誡めて曰く、「酒を喫せば、必ず須らく濁醪を用ふべし、肴は則ち其の糟のみ。」遂に之れを名けて乾一酒と曰ふ、仍つて偈を作り、以て自ら笑ふと云ふ。

醉裡衆人酒腸を奈せん、醒むる時伎盡きて糟糠を啜る、^② 湘南の流水懐沙の怨、狂雲が笑一場を引き得たり。

余四十年前、秉拂の僧法堂上（一本法堂を法座に作る）に在り、而して禪客の氏族を説くを聞く焉。商に工に行僕者の流に、各其の業とする所を評く。甚だしき者は、乃ち手を出し、以て模様を作すに臻る。吁是れ何爲るものぞや、即乃ち耳を掩ふて而して出づ矣。因つて二偈を述

① 整さす」と。
② 宋杭州の人、仰山靈巖禪師に參じて、契悟する所あり、元應初年東渡し、高時に迎へられて建長に住す。

③ 白居易をいふなり。
④ 屈平が漁父の辭に曰く、「世を擧げて皆濁り、我獨り清めり、衆人皆醉へり、我れ獨り醒む、是れを以て放たる」と。漁父の辭に曰く、「衆人皆醉はば、何ぞ其の糟を餉ふて、其の醜を飲らざる」と。蓋し此の漁父の意に隨ふなり。
⑤ 屈平懷沙の賦を誄じて、遂に湘水に没して死す。

す、意、弊を革むるに在り。凡そ四姓の我が門に入つて、皆釋氏と稱するは、其の食を乞うて而して命を資け、法を乞うて而して性を資くるを以てなり。（一本、「凡そ四姓の吾が門に入つて、皆釋氏と稱するは、其の食を乞うて而して性を資け、法を乞うて而して姓を資けるを以てなり」に作る。）亦何の 貴胃望族の有らん哉。今の世山林叢林の人を論する、必ず氏族の尊卑を議す焉、是れをしも忍ぶべくんば、孰か忍ぶ可からざらん乎。遂に前偈を寫して、以て四方に掲示す。誰か敢て 節を撃たん。其の偈に曰く、

說法說禪姓名を擧す、人を辱しむるの一句聽いて聲を呑む、問答若し起倒を識らすんば、修羅の勝負無明を長せん。

犀牛の扇子誰人にか與へん、^① 行者盧公來つて賓と作る、姓名議論す法堂の上、恰も百官の紫宸に朝するに似たり。

佛眼遠禪師三自省に曰く、「報緣虛幻、強ひて爲す可からず。浮世幾何ぞ、家の豊儉に隨ふ。苦樂逆順、道其の中に在り、動靜寒溫自ら婉ち自ら悔ゆ。」

自ら悔ゆ自ら慚づ温と寒と、看よ看よ 三界本無安、愚迷は正に是れ衆生の樂、蜜を嘗めて猶は井底の難を忘る。（一本、「看よ看よ」を「着着」に作る。）

① 貴族、又名望家の族等をいふ。
② 意に通つて手、又は膝を打ちて、同意を表するをいふ。
③ 馬祖道一の法嗣隨官齊安と侍者との問答商榷に、「隨官一日侍者を喚んで、「我がために扇子を過し來れ。」者曰く、「扇子破れぬ。」官曰く、「扇子既にやぶれなば、我れに犀牛兒を還し來れ。」者對ふる無し。齊安、一圓相を畫きて中に於て一の半字を書す。此處空即是色色即是空の體用を現す、即ち資福如寶の致す底を與へん

偈を作り飯に博へて喫す

東山に來往す昨今の若し、飢時の一飯僧千金、荔支素老佛魔の話、慚愧す
詩情風月の吟。(昨を一に昔に作る。)

松源和尚を賛す

娘生の眼太虚空を照す、天澤の兒孫海東に在り、宗風を滅卻す。三轉語、
詞華心緒一天紅なり。(華を一に革に作る。)

運庵和尚を賛す

惡魔の境鬼眼睛開く、五逆元來應に雷を聞くべし、臨濟當時几案を焚く、
道場觀面に衣を却し來る。(一本、鬼を界に作り、聞を聽に作る。)

大應國師を賛す

看よ看よ佛日乾坤を照す、天上人間唯獨尊、禪者如し。東海を渡る無くんば、扶桑國裡暗昏々。

大燈國師を賛す

畫き出す面門復藏無し、須彌百億露堂々、徳山臨濟若し室に入らば、螢火應に須らく太陽に遇ふべし。

虛堂和尚の三轉語

龍門萬仞碧波高し、天澤面前誰か牢を畫す、生鐵鑄成す三轉語、作家の爐竈吹毛を煨ふ。

①六祖大師、黃梅に春舎の賓となる。
②經に曰く、「三界無安猶如火宅」と。
③前に見ゆ。

④南浦紹明禪師、正元中、海を航して宋に入り、楊岐下十世の孫なる徑山の虛堂和尚に參じて旨を領じ、歸朝の後文永七年の秋、筑前興徳寺に出世し、門堂演法せり、故に爾か云ふ。

漁父

學道參禪は本心を失す、漁歌の一曲價千金、湘江の暮雨楚山の月、限り無き風流夜夜の吟。
靈山の塔に題し、正傳庵の僧に贈る

看來れば眞箇正傳庵、宗乘を説かす唯だ世談、凜凜たる威風人に逼つて冷じ、當機觀面誰有つてか參せん。

白樂天の像に題す

勳業名高し白樂天、自然流落して塵縁を絶す、叢林志を失す山林の輩、
訝る莫れ雙林寺裡の禪。

舊齋を思ふ 二首

山陽の長笛 子雲が吟、蜜荔支に漬す素老の心、熱處三生六十劫、一聲の望帝月西に沈む。

昔年の黃犬と蒼鷹と、苦樂悲觀地獄の能、楊岐を欺き得たり吾が屋壁、
乾坤一鉢一衣の僧。(悲觀を一に悲歡に作る。)

疎壁齋

楊岐は天下の老禪翁、此れより大いに興る臨濟の宗、紅塵紫陌我れ乍ち住

⑤風原が漁父の辭を讀出す。

⑥唐の杭州の刺史、名は居易、樂天と號す、久しく佛光如滿に參じて心法を得、兼て大乘の金剛寶藏を受く、杭州に牧たりし時、鳥窠道林禪師を訪うて問答す。又嘗て干濟禪師に書を致し、佛の無上大慧を以て教理を演出す、安んぞ機の高下に徇ひ、病の不同に應ずることあらん、平等一味の説と相反するを難じて問ふ。後龍門の香山寺を修し、自ら記を録す、又酒に醉吟し、自ら醉吟先生と稱す、又香山居士。

す、山舎半は吹く黄葉の風。(興を一に興に作る。)

滅燈齋

眞前の一盞太だ分明、乃祖の靈光。太清を照す、徳嶠の悟道我れ會せず、江湖夜雨十年の情。

斬猫僧に示す

是れ吾が會理の。小南泉、手に信せて猫を斬る公案圓かなり、錯り來つて自ら悔ゆる斯の令を行じて、牡丹花下の眠を驚起することを。

僧に尊卑無し

盧能馬箕姓名拙なり、教外別傳佛説を越ゆ、杜撰の禪流井底の尊、憐む可し皮下に元血無し。

謹んで久參の人に白す

圓頂方袍姪奸、威風鎮に人に逼つて寒し、古則參得の家業、愧づ可し妄に我慢を長すること。

言ふ莫れ

公案即ち圓成、八角の磨盤心上に横ふ、邂逅知り難し自尿の臭きを、他人の敗闕鏡中に明かなり。

士と號す。

朝の粥に對し、午時の食をいふ。僧侶に食事を供養することないふ。又轉じて亡靈の爲に讀經することをも云ふ。

晉書向秀傳に、秀、山陽の舊廬を經、隣人笛を吹くものあり、聲を發すること寥亮たり、秀、乃ち思奮賦を作ると。

揚雄、字は子雲、蜀郡成都の人、漢の成帝の時の人なり、太玄、法言を作ると。

揚岐の屋壁疎なるに比す。

天をいふ。鶴冠子に、聖人の徳は上太清に及び、下太寧に及び、中萬靈に及びと。

南泉普願禪師、座下の雲水に對する提示に類するをいふ。盧能は大德慧能禪師、馬箕は馬祖道一禪師、家範箕を作るとす、それより轉じて言説を稱して馬祖の家範、即

前年大燈國師の。頂相を賜ふことを辱うす。予今衣を改めて淨土

宗に入る、故に茲に栖雲老和尚に還し奉る。

禪門最上乘を離却して、衣を更ふ淨土一宗の僧、妄に如意靈山の衆と成つて、嘆息す多年大燈を晦ますことを。

狂雲は大徳下の。波旬、會理の。修羅勝負嗔る、古則話頭何の用處ぞ、幾多の辛苦他の珍を數ふ。

謹んで久參の人に白す

寛正二年六月十八日崇宗藏主交を絶つ

一善行せず諸惡と作る、他を憎み他を妬む。元字脚。口は堅勁にして見地は微弱、瞎禿の禪宗門零落、人は笑ふ是れ無繩自縛と。他の非を見て己が錯りを知らず、日用の工夫は禍の作略、暫時も得難し虚廓に住するを。直指爲人又機作、是の如きの禪話溝壑に填まる。勢を好み名に耽るの卜度、此に到りて誰人か刻削を與へん、古則に參得して心彌々濁る、醍醐の上味毒藥と爲る。

靈山の行狀を看る

宗門の極則又。警訛、乃祖靈山前釋迦、筆を採つて誰人か鬼簿に點す、工

ち馬範箕といふに至れり、其の名の拙きをいふなり。

宇宙所現の萬法、其のまゝが悟の現れである。

不意にであふことをいふ。詩に曰く、美なる一人あり、清揚婉たり、邂逅相遇ひて、我が顔に適ふと。

頭部を畫ける肖像をいふ。

魔王の名、常に惡意を抱き惡法を成就し、僧を擾し人の慧命をたつといふ。

阿修羅に同じ、六道の一なり。

三説あり、凡字のこと、元字脚は凡字の脚の意にして、元字の脚は凡即ち凡字なりと。乙字のこと、元字脚は元字の脚は乙、乙は一に通ず、故に一字の意と。古來多く此の説をとる。又墨跡字畫の意にて、上は横の二畫、下は豎の二畫を示し、文字の總名となすと、

夫日用俗塵多し。

香嚴擊竹

潭水の北兮湘水の南、竹枝曲裡口、喃喃、樽前爛醉す豪家の客、知らず愁人夜雨の談。(知を一に識に作る。)

會裡の徒に示す法語

凡そ參禪學道は、須らく惡知惡覺を、勦絶して、而して正知正見に至るべきなり。惡知惡覺なるもの、古則話頭、經論要文、學得參得、坐禪觀法、勞して而して功無き者なり。是の如きの輩、當代四百四病一時に發す、人の爲に辱めらる、是れ情識の血氣なり。閻老面前に對して、甚の伎倆か有らん乎。獅子尊者、頭を斷つて白乳顯露分明なり。正知正見なる者、日用涅槃堂に坐斷する底の工夫、全身火坑に墮在す。子細に之れを看れば、苦中に樂有り、若し能く見得せば、撥無因果の境に味ます。若し見不得なれば、永く成佛の漢ならず、懼る可し懼る可し。

汲井輪の略々停息無きが如し、今既に出家することを得て、僧相圓備、三衣一鉢下に在り。想ふに是れ過去幾生か修し來つて、此の如き

ことを得るか。若し是れ再び、驢胎馬腹に入り去らば、知らず又幾生を経てか、歸り來つて此の錯りを改修せん。努力せよ、努力せよ。切に須らく今生に了達して、是の如きの殊過無かるべし。之れを念へ、之れを念へ。

右靈山和尚の法語、其の後に題すと云ふ

互に高低を操る汲井輪、威音の彌勒一回の春、三世の諸佛歷代の祖、泉聲涙滴る苦吟の身。

我が病、良藥の効驗に及ばず、經呪の靈驗に及ばず、日を逐ふて窮困す。我が情識有るとき、爾等諸人、縦ひ利那と雖も、縦ひ一念と雖も、眞正の工夫を成し、窮決未了の處、實處に到着せば、諸の魔障頓に除いて、老懷如意ならん耳。衆對無し。

右靈山和尚病に因つて衆に示す法語、其の後に題すと云ふ

經呪の心頭を亂すことを須ひす、佛界伎窮り魔界收まる、愁人に向つて愁意を説く莫れ、相如が雲雨渴望の秋。

大德寺住持勸請の頌を拜するの頌、呈す

故に文字文章のことをいふ。此の所下説是なるに似たり。

五味の中の最上味、乳より酪を出し、酪より生酥、生酥より熟酥、熟酥より醍醐を出す、最上の法味にたとへ、生嚙りの人には却つて毒となるをいふ。

① 棒大の詭傳をいふ。

② 竹枝は土地のはやり歌なり、劉禹錫、阮湘に在り、俚歌鄙陋なるを以て、乃ち屈原が作る所の九歌によりて竹枝新詞を作り、里中の小兒をして之れを歌はしむ。もと巴蜀の歌なり。

③ べちやノ、としやべるをいふ。

④ 絶ち切ることなり。

⑤ 圓覺王をいふ。

⑥ 西天付法藏の第二十四祖、鶴勒那尊者に嗣法す、師子比丘とも云ふ。姓は婆羅門、得法

の後遊方して罽賓國に至り、波利迦を化し、達磨を論服して正道に入らしむ。魏の齊王二十己卯年示寂。

⑦ 即ち釣瓶の輪をいふ。

⑧ 來生には畜生道に落ちるをいふ。

⑨ 過去、莊嚴劫に於ける最初の佛を威音王佛といふ。故に父母未生前、天地未開已前といふに同じ。

⑩ 大德寺の山號なり。

⑪ 文明六年春二月、勅を奉じて大德寺の住持となる、即ち之れを云ふなり。

⑫ 朝廷にて佛門に下賜せらるゝ最上の光榮ある色とす、支那にては唐の則天武后の朝に、僧法朗等九人に紫衣を賜ふに始まる、日本にては聖武天皇の時、支那僧正に賜ひしを以て嚙矢となす、支那にては紫衣なりしが、我が國にては紫

廣德堂 上柔仲和尚

大徳大燈 龍寶山、靈光天 上又人間、香を焼き思に酔ゆ曇華夏、金色の頭陀曾て破顔す。

文明甲午の春、大徳禪寺住持 勅請を拜す、門客交々賀す。吁、

五十年簀笠淡如たり。勅黄捧照して、懐に愧づる無からん乎。因つて詩を作り、之れを泄す。

大燈の門庭殘燈を滅す、解け難し吟懐一夜の氷、五十年來簀笠の客、愧慚す今日。紫衣の僧。(庭を一に第に作る。)

再び、妙勝寺に住する次、虚堂和尚の法衣を披く。因に合山の清衆一偈を需む、書して以て其の請を塞ぐ。

先祖は衣を還し、順老は衣を留む、斬つて兩段と作す、是れ松源の衣。

龍寶山大徳禪寺入寺法語

山門

一跳直入、龍寶の三門、門々路有り、乾坤に逼塞す。

佛殿

色の法衣なり。

京都府養喜郡田邊村にあり、大應國師の開創に係る。

三解脱門の略、空門、無相門、無作門といひ、或は我空、法空、俱空の三空門ともいふ、ともに大涅槃に至る處入の道とす、寺院に入る正面の門を稱する語。

道の廣さ無邊、天地に充塞すと。

雲門の示衆に曰く、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」自ら代つて曰く、「南山に雲を起し、北山に雨を下す」と。

即ち釋迦も達磨も彌勒も露柱も皆同じなり。同一眞理何も別はない、南山も北山も自ら相異ならずして雲雨の相應するの自然、具眼者須らく自得すべし。

土地神及び護法神を奉祀する堂なり。

古佛堂中、露柱雲雨。手を以て分くる勢を作して云く、「分破して後如何。

雲門霧露。」

土地堂

上天は是れ梵天、帝釋、下天は是れ多聞持國護法神、何の處に向つてか新長老を見ん、新長老、響、六六三十六。

祖師堂

祖師何人ぞ、我れ何人ぞ。咄、誰か境を奪ひ人を奪ふ。

拈衣

小範平生心絲を亂す、慈恩先祖手中の絲、順老明眼の衲僧。袈裟を擲つて云く、「是れ甚の脚下の紅絲ぞ。」

室

明頭來明頭打、暗頭來暗頭打、四方八面來旋風打、虚空來連架打、新長老、響。乾坤一箇の蓋直僧。喝一喝して云く、「人の來つて相如が渴を問ふこと無し、敲破す梅花一夜の氷。」打。

退院

須彌山の頂上、初利天の天主にして、喜見城に居り、四天王及び三十二天を領して、佛法歸依の人を護り、阿修羅の軍を征する天王なりといふ。
東南西北、四天王の内、東方持國天王、西方廣目天王、南方增長天王、北方多聞天王、これなり、須彌山の半腹、欲界六天の四方に住し、正法を護し、又世を守る故に、護世の天王とも云ふ。此の所二を擧げて四を兼めるなり。
響は者を指す時の語なり、故に新長老よと呼びかける也。
臨濟爲人四料簡の内、前に見ゆ。
衣は嗣法の信として師之れを弟子に授く、弟子衣を拈じ法語を擧げて披す。
鎮州善化禪師、爲人攝化の機、前に見ゆ。
輕薄浮華をいふ。

平生^② 慕直小艶の吟、酒姦色姦詩も亦姦。拄杖を擲つて云く、「七尺の拄杖常住に還す。尺八を吹いて云く、「一枝の尺八知音少なり。」

帖

頂戴即ち是、放下即ち是、溥天の下是れ王土。頂戴して云く、「是々。」

國譯狂雲集上卷終

國譯狂雲集下卷

大燈國師の三轉語に曰く、「朝に眉を結び夕に肩を交ふ、我れ何似生、云々。」何似生、古尊宿と雖も受用の者有ること罕なり、唯だ慈明下の清素首座、能く之れを用ふ。然りと雖も晩年^③兜率の悦公に遇つて、荔支を食ふの次、遂に敗を納ること一場、惜しい哉始有りて而して終無きことを。「惜しい哉」を一に「情乎」に作る。感懐の餘、五偈を作り之れを記す。偈に曰く、

這箇諸訛受用の徒、古今の衲子一人も無し、素老は慈明的傳の子、荔支の核子嚼むこと何ぞ能なる。(素老を一に級老に作る。)

慈明の狹路楊岐を得、觀面の機痛處の錐、天澤愁吟す風月の客、繡簾吹き動す軟風の扉。

工夫日用門車を閉づ、五十年來烏有の歌、素老の荔支眞の敗闕、徳山臨濟竟に如何。(烏有を一に烏有に作る。)

暮天は細雨片雲は朝、名は成都の萬里橋に屬す、百年東海獨り休歇、艶簡の吟魂永日消す。

① 汾陽善昭の法嗣、慈明楚圓師なり。

② 兜率從悅禪師、南岳下十二世、寶峰克文の法嗣、初め道吾に首として數納を領す、雲蓋智和尚に謁して入室を求む、又眞淨に見え、鹿苑に出世す、諡して眞寂禪師と號す。
③ 楊岐は慈明の法嗣、故に云ふ。

工夫棹を弄す齋公の舟、尊宿鞋を織る蒲葉の秋、野老藏し難し簑笠の譽、誰人か江海の一風流。(弄を一に勞に作る。)

大燈忌宿忌以前美人に對す

宿忌の開山諷經、經咒耳に逆ふ、衆僧の聲、雲雨風流事終つて後、夢聞の私語慈明を笑ふ。

大用庵の破却を止む 二首 寛正五年

邪を破し正に歸す識情、勝負人我無明、出塵の羅漢を羨む可し、青天月白く風清し。

定盤を認む 擔板漢の禪、衲僧の作略豈に絃に膠せんや、殺活縱横惡手段、正印を鏤消す漢王の前。

大德寺の動亂に題す

禪者は禪を争ひ詩客は詩、蝸牛角上安危を現す、殺人刀矣活人劍、長く信す佳人獨り自知することぞ。

伏虎將軍是れ我が徒、英雄は失せず惡魔の途、吹毛三尺掌握の内、佛法南方一點無し。

①劉禹錫の竹枝詞の詩に曰く、「日出て三竿春霧消す、江頭蜀客蘭棹を繋ぐ、狂夫に書一封を寄せんとす、家は住す成都萬里橋。」

②一面のみを見て、全面をしらざる痴漢をいふ。

③莊子に「蝸牛の左角に蠻氏、右角に觸氏あり、相戦つて死者數萬」と、小事に驕縦するにたとふ。

④鋭利毛を吹くべきの鋒劍をいふ、機鋒鋭きに譬ふ。

⑤大德寺沙門宗照、養叟和尚に大德に參じて、雲門一字關によりて豁然大悟す、宗風大いに盛なり、後土御門天皇、其の德望を聞こしめし、特に正續大衆師の號を賜ふ。

⑥南宋の度宗の年號。

⑦唐の武帝の年號、此の時三武一宗の法難あり、佛祖緣記四十三卷に曰く「唐の武宗仙を

養叟の的子 熙長老の癩病を訪ふ(訪を一に問に作る。)

毒蛇の窟宅洛陽の東、癩病深く懼る亭徹翁、紹熙は養叟正傳の子、學び得たり天衣佛日の風。(風を一に禪に作る。)

病軽く脈重きは 咸淳の禪、病重く脈輕きは 會昌の禪、中に就いて腐爛す養叟の輩、病脈並に損す今日の禪。

熙長老が鷺尾の新造の寺を賀す、以て癩病を訪ふ

癩病の脚跟毒氣生す、殿堂新に造つて勢崢嶸、鋤頭耕破す鷺峰の頂、荒草山前一莖無し。(一本、脚跟を脚痕に作り、耕破を畔破に作る。)

梅檀の佛寺利名の禪、公案腰に纏ふ十萬錢、滿目青山法眼の境、鷺峯の樵客 通玄を踏む。

鷺峯建立す大伽藍、普請して山を崩し又岩を碎く、五臟敗壞して膿血を成す、黃衣の癩肉臭汗衫、妄に佛祖に參す舊因緣、天道豈に臆に逢着することを饒さんや、食淡く志潔し吾が自業、志姦

く食美なる汝が家傳。 獅獅尾無くして人前に出づ、乃祖嘲を弄して天下徧し、棒を拈じ喝を下して送一送、始めて看る勾欄

歌舞の禪。

好み、僧尼二十六萬五千人を沙汰して、會昌五年八月下旬勅して俗に歸らしむ」と。

①本朝高僧傳に曰く、「源の満詮、妙雲院を洛東に建、其の女通玄寺長老尼竺英、釣旨を承け、額を養徳と草む、以て考妣の香を奉ず、照を請ふて之に主たらしむ、照後之れを城北に移す」とある、蓋し之れを謂へるものか。

大燈門下 單子の境、姦賊此の時法筵を開く、厚面無慚唯だ畜類、古今此の如くなる邪師無し。(邪を一に禪に作る。)

風流室に入る 苾芻尼、因つて憶ふ慈明狭路の時、腸は斷つ纖々呈露の手、暗に小艶一章の詩を吟す。

願烈が禪話太だ新鮮、呈露して拳を開き又拳を出す、龍寶山中の悪知識、言詮の古則盡く虚傳。

果を得機に投じて多く人に教ふ、青銅定價兩三緡、歌ふを休めよ亡國伊州の曲、榮街の乾坤天寶の春。

伴を引き徒を集む幾癡兒ぞ、面門眼上總べて眉無し、法中の姦黨自了の漢、傳授師無うして話私有り。

願来的々兒孫に付すに題す
願卦名を題して食を貪り来る、會中の 膾炙寵梅の如し、金を攫む手段機輪轉す、君子果然多く財を愛す。

胡亂天然三十年、狂雲が作略這般の禪、百味の飲食一 椽の裏、淡飯粗茶正傳に屬す。(粗を一に麤に作る。)

支那匈奴の君長の稱、廣大の義。
比丘尼に同じ、佛四衆の一なり。
願卦は六十四卦の内、山雷頤の卦、艮上震下、名字を打するなり。
膾はなます、炙は焼き肉、その旨きが如く、人の口に稱讚するをいふ。虛堂錄に「千古人口に膾炙す」と。
椽は簷(すのこ)をいふ。

作る。)

病中 二首

破戒の沙門八十年、自ら慚づ因果撥無の禪、病は過去因果の果を被る、今何を行じてか劫空の縁を謝せん。

美膳誰か具す一雙の魚、小艶に工夫日用虚し、姪色吟身頭上の雪、目前の荒草未だ曾て鋤かず。(目を一に山に作る。)

斷頭罪人に代る 二首

六條河畔斷頭場、逼面に人を殺す三尺の鉞、伎窮り情盡きて魔途失す、空しく斷ゆ春閨夢裡の腸
或人は眼を眩り或は頭を低る、各是れ波旬の道流、多年の風月即今の劍、大地山河滿目の愁。

羅漢姪坊に遊ぶ圖 二首

羅漢の出塵識情無し、姪坊の遊戲也た多情、那邊非か矣那邊是か、衲子の工夫魔佛の情。

出塵の羅漢佛地に遠かる、一たび姪坊に入つて大智を發す、深く笑ふ 文殊楞嚴を唱ふるを、失卻す少年風流の事。

涅槃像 二首

京都六條河原にて、古の刑場のありしところなり。
雙珠戸利とも書く、略して文殊と書く、華嚴三聖の一、菩薩と相對して釋尊の左側にあり、智慧門を司る。
釋尊、跋提河畔沙羅雙樹の間

作佛披毛主賓無し、春愁二月涅槃の辰、有情異類五十二、混雜す紫磨金色の身。
頭上は北州脚下は南、前三々と後三々と、乾坤に逼塞す釋迦の像、看來れば惠日の一伽藍。

熊野權現を嘲る

跡を三山に垂る板本の頭、百由旬の瀑直に飛流し、室郡道ふことを休めよ馬進ますと、徐福が精神物外に遊ぶ。

閑工夫、榮街が徒を辱しむ

金襴の長老一生の望、衆を集めて參禪又上堂、樓子慈明何の作略ぞ、風流愛す可し美人の粧。

正工夫、久參の徒に示す

機輪轉する處實に能く幽なり、臨濟の正傳名利の謀、一枕の春風雞足の曉、三生の夜雨馬鬼の秋。

洛下に昔紅欄古洞の兩處有り、地獄と曰ひ、加世と曰ふ。又安聚坊の口、西の洞院有り、(聚を一に衆に作る)諺に所謂小路なり。歌酒の

にて、涅槃に入り給ふさまを書きたる像、中央に釋尊、北面右脇して臥したまひ、諸大弟子五十二種の輩、皆其の周圍に集りて哀泣し、天上より摩耶夫人來りて、藥を投じ、沙羅樹は白く變じて鶴の如くなる様子な、細密に圖表したるものとす。涅槃會を營む際に、是の畫幅をかけて供養するを例とす。

前後彼此、共に無數量の意に須ふる語。

秦の始皇、死を恐る、方士徐福をして東蓬萊に不老の藥を探るに遣はす、遂に滄溟に浮び、其の行く所を知らず。

唐玄宗の妃、楊貴妃、天寶の大亂に逢ひ、殺されたる馬鬼驛なり。

關雎は詩の周南の篇名、關々たる雎鳩は河の洲にあり、窈窕たる淑女は君子の好逑云。

客、此の處を過ぐるもの皆風流の清事を爲すなり。今街坊の間、十家に四五は娼樓なり、淫風の盛、亡國に幾し。吁、關雎の詩想ふ可き乎哉、嗟嘆するに足らず。故に二偈一詩を述べ、以て之れを詠歌すと云ふ。

頌に曰く

同居す牛馬犬と雞と、白晝の婚姻十字街、人は道ふ悉く是れ畜生道と、月は落つ。長安半夜の西。

佛露柱に交つて一に途を同じうす、邪法此の時扶くること得難し、榮街の徒作家の漢に似たり、佛法胸襟に一點も無し。

詩に曰く

姪風家國喪亡の愁、君看よ雌鳩彼の洲に在り、例に隨つて宮娥主恩の夕、玉盃夜々幾春秋ぞ。

俗人姪坊門前に詩を詠じて歸る

樓子無心彼れ有心、詩に姪す詩客色何ぞ姪す、宿雨西に晴る小歌の暮、多情愛す可し門に倚つて吟す。

云。后妃、文王の徳を悦樂して和諧せざるなく、又其の色に淫せず、慎固幽深にして恰も雌鳩の程よき別あるが如きに譬へたるものなり。
李白の子夜吳歌に曰く、長安一片の月、萬戸衣を拂つて聲、秋風吹き盡さず、總べて是れ玉關の情、何れの日か胡塵を平げて、真人遠征を罷めん。長安萬戸の壯丁が征戎の中にありて、空房を守る婦人は、月下に衣を拂ちて寒衣を製することにいそしめり。子夜は東晉の女子の名なり、此の詩又關雎の意を得たり、世の放蕩の兒は、實に夢寐にも之れを思ふべきなり。
相國寺は京都上京區今出川にあり、萬年山相國承天禪寺と號す。
禮記の樂記に曰く、「鄭衛の

相國寺沙喝騷動

① 元來長久萬年山、葉は戦ぐ松杉風外の間、濟北の蔭涼宗風滅す、
白拈手段活機關。(間を一に間に作る。)

童謠 二首

童謠耳に逆ふ野村の謳、唱起す家々、亡國の愁、十年春雨扶桑の涙、稼穡
艱難廢址の秋。

皇城山野野皇城、雅を變じ風を變じて人平かならず、
骨露る、狂雲一片十年の情。(幣を一に體に作る。)

杜詩を見る 二首

古今の詩格舊精魂、江海飄零亦主恩、仰いで虞舜と叫ぶ一生の涙、
淚痕 澱酒して乾坤を衰む。

淚愁ふ春雨又秋風、食頃も忘れ難し天子の宮、詩客名高し天寶の事、
寒儒の忠義也た英雄。

姪色の人に示す

巫山雲雨夢中の神、君子猶ほ迷ふ況んや小人をや、
風流の聖主馬嵬の涙

龜鑑明々今日新なり。

濃上桑間哇音を唱ふ、風流年少龍尤も深し、
世界三家村裡の客、重華識らず二妃の吟。

所愛の肉身喰食の忠、心肝生鐵一天の功、
男兒の死處色何ぞ屈せん、惱亂す楊花甲帳の風。

會裡の僧に武具を與ふ

說禪學道本無能、亂世の英雄一錫の僧、
觀面當機若し令を行せば、鐵圍百億棒頭に崩れん。

道人の行脚又山居、江海の風流簑笠の漁、
逆行の沙門三尺の劍、禪録を看すして軍書を讀む。

亂に因つて 二首 詩

請ふ看よ凶徒大いに籌を運すことを、
近臣左右安に優遊、蕙帳畫屏歌吹底、
衆人日夜醉ふて悠々たり。

忠臣の愁思功勳に在り、世上の汗淋君を識らず、
儒雅十年情寂々、貴遊一夜醉ふて、
醺々たり。

音は亂世の音なり、慢に比し、桑間濮上の音は亡國の音なり、其の政は散じ、其の民は流す、上を誣ひ、私を行ひ、而して止むべからずと。即ち其の鄙野の音を聞いて愁ふるなり。

② 骨及び皮をいふ、木葉脱落するをいふ。

③ 杜甫の詩を見るなり、杜甫字は子美、少陵と號す、玄宗の朝に賦を奏す、帝之れを奇とし、集賢院に待詔せしむ、肅宗立ちて右拾遺に拜す、大曆五年來陽に客として卒す、性放曠にして好んで天下の大事を論ず、忠君憂國の情詩賦にあらはる。唐人元稹云ふ、詩人ありて以來未だ子美の如き者あらずと。玄宗天寶年中安祿山叛し、后楊貴妃誅に達ふ頃、亂をさけて江頭にあり、哀江頭を吟す、左に抄

す、少陵の野老聲を呑んで哭し、春日潛行す曲江の曲、江頭の宮殿千門を鎖す、細柳新蒲誰が爲に綠なる、憶ふ昔霓旌南苑に下りしとき、苑中の萬物顔色を生ず、昭陽殿裡第一の人、聲を同じうし君に面ひ君側に侍す、鞞前の才人弓箭を帯び、白馬嘶嘶す黄金の勒、身を騰し天に向つて仰いで雲を射る、一箭正に墮ち雙飛翼、明眸皓齒今何んか、在る、血汚の遊魂歸ることを得ず、清渭東流して無聞深し、去住彼此消息なし、人生情あり涙塵を沾す、江水江花豈に終に極まらんや、黄昏胡騎塵城に滿つ、城南に往かんと欲すれば城北を忘る。

會理の俗徒に示す 警策 詩

前車覆る處 後車驚く、警策怠る時禍必ず生ず、半醉半醒夜遊の客、鳥啼き月落ちて夜三更。(鳥を一に鳥に作る。)

詩歌吟詠全功を失す、天上人間軍陣の中、意舞醉歌して日を度るを休めよ、飛揚跋扈君が爲に雄。

亂に因りて坊城少納言に寄す 詩
當代の菅儒少納言、詩文の家業乾坤を動かす、英雄亂世に風月を好む、長劔大弓主恩に酬ゆ。

拔舌の罪を懺悔す
言鋒殺戮す幾多の人、偈を述べ詩を題して筆人を罵る、八裂七花舌頭の罪、黄泉免れ難し火車の人。

亂裡 二首
國危うして家必ず餘殃有り、佛界身を退く魔界の場、時に臨む殺活衲僧の令、君看よ忠臣松柏の霜。

獨坐頻に忙し 騰晦の心、誰人か忠義此の時深き、曉天一睡枕頭の恨、

朝日三竿夢裡の身。(身を一に吟に作る。)
關東御上洛
虜軍萬騎已に東より來る、京洛の凱歌一曲催す、相坂の關門征駒の路、胡兒の性命馬蹄の埃。

姪坊の頰、以て得法の知識を辱しむ
話頭古則欺謾を長す、日用腰を折つて空しく官に對す、榮街世上の善知識、姪坊の兒女金襴を着く。

日用
日用の正工夫、弓を挽いて東胡を射る、佛を殺し祖を殺す令、波旬途を失却す。(一本、挽を引に作り、三四句を「佛魔混雜底、邪法竟に扶け難し」に作る。)

祝聖
海内太平即ち現前、清風明月碧雲の天、萬年七百高僧の行、看よ看よ天龍正覺の禪。(一本、即を便に、僧を祖に、禪を前に作る。)

德政

衣を沾す、東の方都門を望み馬に信せて歸る、歸來池苑若舊による。又曰く、夜半人なく私語の時、天に在りては比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と爲らん」と。一天萬葉の君にして、女色に耽つたがため、遂に破滅の悲運にあふ、況んや平人に於てをや、當に鑑すべきなり。

錦帳などと同じ。

醉ひ心地よきことなり。

警策策勵すること、坐禪の時睡魔の襲ふを警策し、修業精進を策勵するなり。

天上に生ずるも人間に生ずるも、恰も軍陣中に居るやうなもので、油断するとんだことが出来る。

十二月三十一日の心、即ち忽忽なる心持ちをいふ。

日出でて三本ほどの高さに

上りたる時刻の意にして、即ち午前八時頃日稍々上りてよりのこと。詩に曰く、日出でて三竿春露消す」と。

年分行事の一、月分行事の一。今上天皇陛下の聖壽無窮を祝禱する法要の稱なり、禪院にては毎月の朔望、又元旦、聖節の早良などに、合山の大家出頭して之れを嚴修す、香華、湯燭を今上の牌前に虔備し、同音に大悲呪、消災呪を誦誦し、維那、祝聖回向文を稱へて式を終ふ。